は知識なるや否や、理性及び合理的有心性に至要なる一切のものと一致する所のものなるや否やに在りとす、

若し人は只五官によりてのみ知識を得可くして、其智力的作用は只其五官より來れるものを確定するのみならば、且つ學術的知識を得るが爲に使用する所の能力も亦渾て是等に外ならずとせば、則ち其神を知らんと欲するには、其特別なる用に供するが爲に、更に又特別の能力なかるべからざるなり、然れとも若し人にして凡ての思想と行爲とを統御せる普般原理と理法を知覺すべき理性を以て賦與せられたる者ならば、即ち其合理的及び宗教的感性を以て超物的啓示、即ち神の啓示を收接するを得べく、而して更に神の知識を得んが爲に、特に所謂信仰器能なる者を必要とせざるべし、果して然れば人の理性は宇宙を整理、組成せし絶對の理性と同一種なる者にして、宇宙と其間に自己を啓示せる神とを知るとを得べきなり、

宗教的信仰なる者は人の本性の自生萌芽にして、其基因は有心者として人を組成し、以て人を人類として禽獸より區別する所の一切のものゝ中に在り、宗教の能力は人類の固有性にして、發して其宗教となるあるは、人間の正則なる發達に避く可からざる者なりとす、然りと雖とも、若し宗教的信仰にして特別なる器能若くは機關より起るものとするときは、則ち此の如く言ふとを得ざるべし、何となれは若し然りとせば、宗教的の信仰は最早靈性的たる人間か有する全躰の本性に基因する者に非らずして、通常の智能と思想の通法と關係なく、又人をして實驗的、數學的、論理的若くは哲理的學術を構成するを得せしむる所の理性の諸能力より絶緣、孤立せるものたらざるを得されはなり、此の如くなれば宗教的信仰力は人間諸能力の城外に除拒せられて、人を以て靈性的となし、之に宇宙の知識を與ふるに至要なる所の凡ての者より離隔せらるゝものなり、果して然らは宗教的信仰力は理性より離隔し、必ず理性と反對の地位に來らざるべからずして、人は其本質中に宗教的知識と學術との反對を固有すと謂はざるべからず、而して神に於ける信仰を維持せんとするには、必す理性、及び吾人をして學術を建設するを得せしむる合理的智能の外に超然たるか、又は之を打破せざるべからず、此の如くんば宗教は其本質に於て、人間的に非らずして幽靈的なり、現世の事に非らずして、知るべからざる他の世界の事たるに至らん、

(註)レスリ、スチーヴンの論は最も茲に的當する者と謂ふべし、曰く、「佑助なき智力の無能なるとを説明せんとて舌を爛らしたる基督教徒中、最も哲學的なる辯護者の目錄(カタナ)を作爲するより何物か容易なるとあらん、コムトは絶對と無限を論するに就て人の無能力なるとを公言すれとも、中々に正教記者(オーソドクスライター)全數の言はどに明言するとなかりき、吾人は殆と饜倦を來さんとする程に下の如き語を聞けり、曰く、「汝の理性に信頼せよ、然らば汝不可知論者となる可し」と、吾人は汝の語によりて汝を捕ふ、吾人は不可知論者となるべし」と、ヘーゲル又曰く、有限は神を知りて之と直接の關係を保つ能はずと言ふは、是れ謙德に似たれども、却て神を以て他に自己を知らしむるの能力なき者と爲すものなりと」(宗教哲學第一卷一九五頁)

扨此謬見を正すの法は、只其基因せる所の誤謬なる知識論を訂正するに在るのみ、夫れ人が初て超物的微光に接するは、神の信仰に因るに非らず、元來人は自己の有心性に因て生れながらにして超物的なる者なり、而して其生涯の經驗は物界に在ると等しく、又た超物界にも在るものなり、故に人は普般原理、若くは理法の合理的直覺力に因て、或は眞善、全福に關する動機と感情に因て、或は自由意志の撰擇に因て、自己の超物的たるを知り、又超物的實躰を見、及び之を感するなり、人の神に於ける信仰とは、人が合理者として其肖像たる絶對の理性に關する知識なり、而して人は唯た此知識あるが爲に、其有する知識の眞實にして合一せるとを發見す、今吾人、人を以て只物界の被造物、一種の高等動物となし、而して其性質に加ふるに、物界の中に圍まれたるところの人が、頼て以て其少しも入りたるとなき超物界なるものを窺ひ得べき一種特別の器能を以てすればとて、之を以て不可知的及唯物的學術に反して有神論を建設すると能はず、此の如き能力は哲學より之を觀れは、彼のポレースが詩中に嘲責せし破衣、垢服に於ける紫色の燃ゆるが如き補片と何の異なる所かあらんや、之に反して吾人は證明せざるべからず、曰く、人は超物的に組成せられたる者なり、故に自己を知るとき則ち超物界を知る、曰く、人の神に關する知識は其人間的器能と共に正當に其内に存在すべきものなり、曰く、此知識は人の理性の最高使用より起る、是れ知識が理性の外に超然し、之と反對して以て相遠離するが爲に起るに非らざるなりと、是れなり、

ウエース氏は余が以上指示したる危險の傾向に陷りたる類例なり、氏は云へる樣、凶禍災厄にも關らずして神の慈愛と全能を信するの信仰は「單純なる合理的信仰の地歩を去て、原理上后來一層の進歩を爲し得べき處置を行ひしに外ならず、此信仰たる、獨り理性の命令のみに由て其信仰する所を計量するを全廢し、以て全く他の嚮導者の手中に之を委したるものなり……信經の信仰は是等の困難を承認して公言すらく、是等の困難たる單純なる物界理性を以て論する時は、到底排除す可からず、是を排除せんと欲すれは、須らく超物的實躰と超物的保證に憑依せざる可からず」と、信仰箇條を削減して以て學術と合和せしめんとの計畫に關して、氏は又述へて曰く、「吾人が單純なる思辨以上の者として信仰箇條を抱持する以上は、則ち吾人は學術的論據以外に出て、以て單純なる理性の能力に超越せる保證の上に立つものたらざるべからず」と、氏は本心　證明及び無上大法と雖とも、之を理性と異なれる信仰力の使用と思考したり、曰く、「惡の上に於ける善の專制權を信ずる」は則ち、「信仰の著大なる作用なり、……之に關してヒユームの語を借りて、是れ『凡て理解力の原則を傾倒する者なり』と云ふも決して過言にあらず」と、要するに氏は理性と信仰の判然たる分別と反對とを主張し、而して信仰力に由て理性に反對するとを信するの正道にして且つ必要なるを主張せるものゝ如し、

人は神を知るの能力を有すと論せる點に於て、余は赤心を以て氏に同意を表するものなり、氏が暗に示す如く、吾人は神と直接に接觸す、然れとも余が氏の意見に反對するの點は、只信仰は人の理性、及び合理的智能、及び合理的幷に有心的實在者たる人間の本性と絶緣孤立せる特別機關なりと云ふの一段に在り、抑も人は或る意味に於ては數學的、倫理的、及び美術的知識の特別なる器能を有すと謂はれざるにあらず、人が宗教的知識の特別なる器能を有すと謂ふとき、此意味を有するものとせは不可なかるべし、今日の基督教有神論に於て最大必要の條件は他なし、理性と信仰の總合を確定すること是なり、夫れ信仰は理性の最高使用を包含す、博士トマス、アルノルド信仰の定義を爲して曰く、「信仰は神に依賴するの理性なり」と、吾人は神に依賴するに由て神を知るなり、吾人信仰を以て神に依賴するによりて神を知る、此信仰とは即ち意志の働きを含むものにして、此く意志の働きを含むが故に、其心髓に於ては取りも直さず信賴に外ならず、此くの如くして吾人は經驗に因りて

神を知ル、然れとも今吾人が研究する所の場合に於ては則ち然らず、神に依頼する者は意思に非らずして理性なり、理性が凡ての思想と行爲を統括せる直覺的原則及び理法を、眞實にして普遍的なるものと知るは、唯た此等のものが絶對的理性に依頼し、其永遠の眞理及び理法として此絶對理性に支持せらるゝによる、校長トロツクの語に曰く、「心意は其最下等の力に於ても直覺的なるが、其最高等の力に於ても亦然り、人若し外界を見て、可視的世界を説明するに當り、自己の知覺に表現するが故に外界は實在せりと思惟せざる可からずと云ふの外に又説明の方法なしとせば、則ち有限界の上方を見るに際しても、亦同しく自己の知覺に顯はるゝ眞理の高等世界あるを知る、而して吾人が依て以て可視界の外に存在する實事を知覺する所の直覺力より成れる此かる高等世界の存在は、夫の極端なる非哲理的の自定を其基礎に据へ、隨て視るべきものゝ外に一物をも認めざる學派を除くの外、凡ての哲學派の承認する所なり」と、

世の超物界に關する人の智識は單に孤立せる信仰器能に依る者なりと確信する の徒は、皆「單純の理性」「自然の理性」、「佑助なき理性」を以て神を知るに不適當なるものとなす、斯る意見は眞正なる哲學の同意を表する所の者なり、人は佑助なき理性を以て神を知るにあらずして、只神が自己の作用により己を啓示したるが故に之を知るのみ、且つ哲學は尚ほ斷言を進めて曰く、之と全しく人の佑助なき理性は決して何物をも知ると能はずと」夫れ人は祐助なき理性を以て物質界を知るにあらず、只感官に於ける物界の作用に由て、先つ物界が自己を人の意識に啓示するが故に之を知る、又人は佑助なき理性を以て人類の靈性を知るにあらずして、只其靈的感性及び能力を經由して自己の上に及ぼさるゝ作用により、其靈性として吾が意識に啓示せらるゝあるが故に之を、知る、譬へば吾人が高潔なる道義的の行爲を見る時、吾人の靈的感性忽ち之に感鳴するが如し、之と同しく人は佑助なき理性を以て神を知るにあらず、只神が或作用に由て人の意識に自己を啓示するが故に之を知るなり、夫れ外部より啓示を受くるとなくして、絶對の知識を有するは獨り神あるのみ、右の點に於て、吾人の神に關する知識は、吾人の宇宙に關する知識と同一なりとす、故に神に關する學術的知識の基礎は、其種類に於て全く物界及び人類に關する學術的知識の基本と異なるとなし、而して靈光と靈命に關して人は全く神の

靈に依頼する者なりと云ふ基督教の教理は、克く此哲理的原理と契合せるものなりとす、彼の間斷なく人の意識に啓示せらるゝ有形の世界は、單に覺官を經由して自己の實在するとを啓示するのみならず、人が其欲望を達する爲め、又凡て單純なる物質的の幸福を得んが爲に必要欠くべからざる者として、人の動物的生命の肉慾、願望、及び情好を經由して自己を啓示す、之と同しく聖靈に關する基督教の教理の如く、靈的に人類を包圍せる神は、間斷なく人の意識に自己を啓示し、而して只に自己が實在するとを啓示するのみならず、凡て靈の光の本源として、又凡て靈性上の希望を滿足し、及び凡て靈性上の全と福とを享有するに於て、人の依頼倚托する所の者として自己を啓示するなり、

博士カーペンター其著書「精神生理學」に述べて曰く、學術の或部分に於ては、「吾人の結論或一種の經驗にのみ基かずして、知らず識らず、吾人の有する全經驗の集合の上に立ち、或る一聯の推理に由らずして、一の中心點に輻湊する吾人一切の思想の集合に由るものあり」と、此論や、吾人の神に關する知識に就ても亦眞實なり、夫れ神に關する知識の根本は、吾人の感情、理性の中、及び自由意志と道義的責任の意識の

內にあり、吾人の經驗と反省的思想の內に在り、眞、善、全、福及び絶對に關する吾人の思辨的思考及び實際的行爲の內に在り、故にルターは信仰を解說して曰く、「信仰とは余が靈生、思想、感情及び意志が信仰の目的物と結合せんとするとき、相合する心理上の作用を云ふ」と、

右之如く、此信仰は人の中心及び人をして有心的の人たらしむる一切のものより發生するが故に、凡て人の正則的行爲と相結托するものなり、故に其人に對して確實なるとは、宛も自己の實在の確實なるに同し、左れば此の信仰を棄つるは即ち合理的有心的の人たる自己に對する信仰を棄つるなり、人の實在の發達に於て、又其生涯の目的に於て最高最貴なるものを棄つるなり、

此と同一の理由によりて、右の信仰は全身、全靈を神に献じて之を愛し、之に信頼し、之に奉事するとを人に命ず、夫れ人誰れか單純なる思辨の爲に、又推理の力に因りて到着せる結論の爲に其生命を棄つるものあらんや、只其の生路を正當ならしむるが爲に自己を奬勵、嚮導し、及び興奮せしむる者にして、自ら是れ人間の眞福を現實するに必要なりと信する眞理の爲に其生命を抛ちて顧みさるのみ、基督教の信

仰は決して思辨に非らず、其信者は眞理を得ると謂ふよりも、寧ろ神を信ずると謂ふべきなり、

而して信者は啻だ神を發見したる而已ならず、亦其中に自己をも發見したり、彼は其神に對する自己の關係を發見したるが爲めに、又自己の眞正に偉大なると、最も高尚なる靈能を有せると、其眞福及永生を發見したり、又人間の眞正なる名譽と善は果して何物なるやを發見したり、而して如何なる世の境遇に在るも、人は人間に神の證を立つる所の神の證人となり、而して人は只神を知るよりして自己の有するものゝ中、最も偉大にして且つ最も善良なる者の何たるを知る可きことを人に證明し、又人生中何物を以て眞正にして且つ不滅なるの價値を有するものとなすやと云ふことを之に證明するを得、

(六)論して此に至れは、則ち又一箇の反對論の起るあり、曰く、絶對無限なる神にして有限なる心意の意識に自己を啓示すべしとは、是れ何等の妄論ぞやと、

夫れ有限の心意が、神の絶對性と無限性とに就て完全の知識を有す可しと云ふとの妄說たるは、神學者も亦反對論者と共に之を承認す、抑完全に神を知る者は獨り

神あるのみ、然れとも絶對的實在者は積極的資性を具備する者にして、單に消極的資性のみなるが故に、人は不完全ながらも、神に關して積極にして眞實なる知識を有するとを得る、吾人は神と吾人と同しく超物的なる靈なりとの積極的知識を有す、吾人は神の無碍にして絶對なるを知る、然れとも絶對とは果して如何なる者かに就ては、吾人只神が神の力を賴まざる所の物に依賴するとと、時間、空間及び分量に限畫せらるゝとを否定して、以て消極的に之を知るとを得るのみ、然り而して神は靈なるが故に、其絶對性中には不完全ながらも、有限なる心意の意識に靈として積極的に自己を啓示するを妨ぐべきものは一も之れあらざるなり、今夫れ赤子は、己の母の何者なるかに就て充分の知識を有するに不適當なる者なり、然れども母は毎日之に對して自己を啓示するが故に、赤子の心意發達するに隨て次第に母を知るに至る、凡ての知識は皆自生的信仰に始まる、蓋し此信仰は知識の核仁にして、其周圍には思想中に在る意見、推察及び誤謬の爲に、又知識の進歩の爲めに其地を成すところの不定、不確といふ寰を以て圍まるゝなり、

左れは神に於ける自生的信仰も、亦人の經驗よりして起る者なり、假令蒙昧なる人

種に於て、存在する所の信仰と雖ども、之を釋定檢討するときは、其中少くも隱微ながら知識の核仁たる、超物的及び超人的實在者に關する意識を含蓄し、而して之が周圍に此實在者と委細の點に於て果して何物なるかといふことに關して意見、推察、忘想及び誤謬を容るべきの地を爲す不定といふ寰あるを發見すべし、而して神は間斷なく萬有と人類に自己を啓示し、一箇人の經驗にも、人間の歷史にも發見せられ、又人は絶へず思想を以て其自生的信仰を釋明、檢討し、虛僞を排除し、差當り疑ふべきは一の說として之を存し、他のものは眞理として之を證明し、以て之を確定せる知識に化成するが故に、宗教的知識の右の核仁は漸次に擴充せらるゝなり、是れ即ち眞正なる基督教の不可知說なり、既に神に就て知る所の偉大、壯嚴なるとに因て、吾人は益々神の超絶なる奧妙を悟り、其實在の理會すべからざるとを感じ、而して其の既知的境域の漸次に擴張すると共に、未和的境域の地平線も亦益々遠離するに至るなり、

故に神は有限なる物若くは人の如く眞實に人の意識に表現し、若くは啓示せらる、神に就て吾人の直接なる知識の限界は、有限なる物若くは人に就て吾人の直接なる知識の限界と同一なるとを知るべし、吾人意識を以て此を知るの眞實なるとは、又彼を知ると全しく眞實なり、而して此に於ても彼に於けるが如く、心意が其反應を以て其物を知る所の目的物の爲めに其意識に波及せられたる印象と啓示とに因て之を知るなり、蓋し有限なる人及び物の吾人の上に活動するとの日常普通なるが爲に、吾人は吾人の意識に於ける印象に由て是等を知り、心意の之に反應して以て是等を知覺するとあるを忘遺し、吾人が神に關しては到底有し得可からざるが如き確實の知識を是等に就て有すると想像するに至れり、然れども神に關する吾人の知識も亦同一の方法を以てし、其表現と作用との意識に及ぼしたる印象と啓示を經由して、之に一々心意の反省するありて、以て其物を知覺するなり、成程有限なる人及び物は幾分かは覺官的に吾人を感動し、神は唯た靈的にのみ感動するものなり、然れども前者に關する吾人の知識は直接にして、后者は然らずといふことはなき譯なり、蓋し靈的なる者は物形的及び覺官的なる者よりは遙かに深く吾人の性質中に根を下す者なり、若し吾人が滿足を得て以て吾人の靈性を繫くべき靈的需用性をして、夫の吾人が滿足を得て以て吾人の物質的生命を繫く可き物質的

需用性の如く猛烈豪宕なる者ならしめば、若し神の觸接をして、靈に來るとなくして肉躰に來らしめば、若し神をして吾人の精神を照すとなくして肉眼を照さしめは、若し神の恩惠をして靈の靜境に於てせずして人の肉耳に語るとあらしめたらんには、則ち吾人は神に關する吾人の知識を以て、太陽の吾人を照すか如く、朋友の吾人に語るか如く直接的なるものと思惟するとなる可し、然れども神の靈能は覺官に來らずして只靈に顯はるゝのみ、物質的なる人は其物質的の覺官と感性とに因て、「神の靈の情」を受ず又知ること能はず蓋は靈の情は靈によりて辨ふべきものなる故なり」、但し神靈の事に關する人の靈的知識は、覺官を經由せる萬物に關せる人の物質的知識と異なるとなく、直接して且つ眞實なる者なりとす、

(七)茲に又他の駁論あり、其言に曰く、假令人の神に關する信仰なるものは生する者とするも、決して知識となるとを得ずして、常に單純なる主觀的信仰として存せざるべからずと、不可知論者、唯物論者及び懷疑論者は、人が本性的に宗教心を有することを承認するものにして、人の神に關する信仰を有し得べきとをも承認するものなれども、此信仰の知識となり得べきとに至りては之を拒む者なり、時あつては有神論者も亦神に於ける信仰を神に就ての知識より分別して、信仰は決して知識となると能はずとの意を含蓄する說を爲すとあり、

此駁論に對して第一に發すべき疑問は他なし、曰く、彼等の所謂信仰なる者は果して何を云ふかと、是なり、何となれは前の信仰器能の場合の如く、此場合に於ても言語の意義未た明了ならざればなり、從來信仰と知識との區別に就て名論卓說多く世に出てたりと雖とも、未た曾て此區別の那の邊にあるやを明にせしとなし、又之が一定の意義を確立せしともあらず、文學上及び哲學上の慣用に於て、知識と區別せる所の信仰なる語には、種々雜多の意義を附與せられたり、

信仰なる語は知覺的若くは推理的の知識より分別して證據を見て以て物を承諾するとに用いらるゝことあり、

特に信仰なる語は、神學に於ては神の言葉たる聖書の信憑力を承諾するとに使用せられ、又神の言葉の言義を說明するとに思惟せられたる公會の信憑力に於ける承諾を顯はす爲に用ゐられたり、斯の如く使用したるときには、道義的の元素、信仰の中に入れるものにして、信憑力を有する者として神若くは公會を信賴する所の意

志の作用を含有するとなるべし、

信仰は又主觀的の承諾と云へる意義を顯はす爲めに用ゐらるゝとあり、此意味を以て用ゐたる信仰と區別する爲めには、知識を解釋して、人の意識に自己を啓示する或物躰の作用と、此物躰を知覺する所の心意の反應と、幷に物躰を理會、釋明し、其他物に對する關係を確定して以て其他物と共に一系の中に之を曉得するとに基ける一種の承諾と爲さゝる可からず、然れとも主觀的承諾は凡ての知識に最も必要の元素にして、如何に其知識の複雜なるものにもせよ、之なくんは則ち知識あると能はざるなり、之に反して最も單純なる主觀的承諾と雖とも、少くとも必ず意識に於ける或物躰の表現と、之を知覺する爲めに之に對する心意の反應あるとを含むなり、

信仰なる語は、又表現的若くは合理的直覺力若くは記憶力に於て起る所の自明、自生なる知識を顯はす爲めに用ゐらる、斯の如く用ゆる所の信仰なる語は、知識なる語と區別あるとなく、信仰とは唯た始生の有樣の知識と云ふ迄なり、是れ思想の中に結構せらるゝ凡ての知識を生立する所の元始の知識なり、是れ吾人が因て以て

思考すべき材料を與へ、又此思考を統御す可き法則を與ふる者なり、

生活上實際の經驗より起る所の承諾にして、時に或は知識と區別せられて信仰と稱せらるゝ者あり、譬へは吾人の經驗に因りて、此く〳〵の行爲の結果は此く〳〵と知り、又は生存の最高目的に達する爲には如何なる原理を以て行爲を支配せざるべからざるかを知るが如し、但し此の如くにして起れる信仰は最も確實なる知識たると往々之あり、夫れ死を見ると歸するが如く、容易に殉教者となりて悔ひざるものは、只此の如く生活上實際の經驗より生出して、凡て人世の利害得喪と相關係する所の信仰に由れるのみ、

右の如くなるを以て、論者の難問や寸毫の力なきものと謂はざるべからず、何となれば知識より區別したる此信仰なる語は、斯の如く數多の相違せる意義に使用せらるれ、駁論者も亦其數多の意義の間に區別を立つるとなくして此語を使用し、而して其議論の間に、絶へず一意より他の意に遷移するあれはなり、

又吾人の注意せざるべからざる一事あり、此の如く信仰に數多の意義あるも、一として決して知識に反對する者にあらずして、其信仰は即ち知識の或る特殊の形狀

なりと云はざるを得す、而して少くとも上の第三及び第四の意義に在ては、信仰は凡ての知識に必要欠くべからざるものなりとす、右各條の意義を玩味するに、信仰とは實躰に對する智力的反映なりと云ふに外ならざるとなるが、知識とは全躰此と全物に過ぎざるものなり、

若し神に關するの信仰は特別の信仰器能なる者より生ずる者とせば、則ち信仰を以て知識に區別するとを得て、知識に反對せる者と做すとを得べし、然れとも此の如き特別の器能の存在に就ては一も確證あらず、

且つや吾人は學術的知識も亦同しく信仰に始まりて、有神説と同しく眞實に「自定」を基礎とせるとを發見するなり、反對論者は曰く、「故に信仰より知識を搆成し、畢竟自己も亦只信仰たるに過きざる神學なるものは、全く學術にあらず、何となれば學術は信仰と相獨立せざる可らざるものにして、一切の自定に關係なくして以て搆成せられざるべからざればなり」と、嗚呼何そ其言の事實に違ふの甚太しきや、彼の學術家が思考する所の物形的實躰に就ての知識、思考者なる自家に就ての知識、及び其思想を統御して以て其結論に確實性を與ふる所の凡ての原理に就ての知識は、皆全く自明にして證明せられず、又證明すべからざる信仰の礎上に建てるものなり、此の知識たる、自生的信仰を思想によりて搆成したるものに外ならず、ウルリチー言へるとあり、曰く、「學術に在て、知識と信仰は常に嚴重に分離すべき者にあらずして、最も精密なる學術に於ても、互に最も密着の關係を有する者なり、吾人が有する學術的知識の大半は、實際知識に屬せずして信仰の域内に屬す、近世萬有を探究するものをして、動もすれは、自己の研究の結果、推測、及預斷によりて至確、至精の知識を得ると思惟し、傲然其頂點に立て哲學及他の學術の探究を睥睨するに至らしむるものは、一として其事物を考へず、又學術的精確を欠くに職由せずんばあらず」と、之に反して神に關する知識は、人の意識に於ける神の啓示と、人の經驗に於ける神に就ての知識とよりする自生的信仰に始まり、日常生活の經驗に發育し、凡て人の最高の得喪と交錯し、思想によりて査察、確證せられ、以て其最も高尚に發達せる形狀を有する知識たるに至る、故にウルリチーは曰く、「宗教上の信仰は最高、至上の實識（サーヴィンシー）に達するものにして、人は之か爲に肯て其財産と生命とを犧牲にするに至る、是れ學術的知識の爲めに人の稀に爲す所なり、之によりて知るべし、信仰と知識

との差異は實識の度に在るにあらず、即ち數量的にあらずして資性的なるとを、……宗教的信仰にして、其人が有する活ける自家の確認を喪失するとなく、反省的思想によりて以て尚ほ發達して學術的信仰に至らば、是れ人間知識の達す可き最高形狀にして、且つ純粹なる人性の最も完全なる表現なり」と、

故に神に關する人の知識は、知識としては毫も其宇宙に關する知識と異るとなしと雖ども、唯其知識する所の目的物に關して相違あるのみ、左れば彼の反駁論は遂に自ら、人の知識は覺官を通過して知覺せらる可き目的物にのみ限ると云へる頗る狹隘の獨斷に陷らんのみ、

(八)世の人多くは思へらく、神學なる者は只概念及言語、區分及び定義等を論ずるに止り、畢竟抽象の理に由て成立する者のみと、誠に然り、抽象的思想を研磨して、具躰的思想を慢棄し、具躰的實事を棄てゝ、概念と言語とを以て思想の目的物となす中古時代の風習は、今猶ほ思想の諸局部に附帶して除き難きが如く、全く神學より脫除せず、然れども神學の眞面目は決して然らず、神學は吾人の意識、宇宙、人間の歷史、基督及び其王國の歷史的建設中に自己を啓示する活ける神、及び神に對し、其王國に對し、靈系に對して關係を有する人、及び人間の生活と宇宙との深遠なる實躰を論するものなり、

形而下學術の指導に因て、今代思想の傾向は盛に言語を去りて實物に入り、抽象を去りて具躰に赴けり、然れども此思想にして懷疑主義若くは唯物論の勢力の下に出づるときは、其深遠なる實躰を看過すべし、何となれは今の思想は靈を斥け、只覺官に表現するものを是れ追求すれはなり、是れ世界の機械的組織を研究するを以て滿足し、其機械的の組織に由て啓示せらるゝ所の一層深遠なる實躰を顧みざるものゝみ、是れ萬有と稱する一大書籍の表裝、印刷、躰裁を吟味するとを以て滿足し、而して其意義と趣旨とを咀嚼するとをなさゞるものゝみ、故に其說く所は中古の駁言說(ロジマキー)よりも、寧ろ膚淺なる乾燥無味の實躰說に陷落せり、詩人ゴエテー之を譏刺して曰く、

"He who seeks to know a thing well
Must first the spirit within expel;
Then he can count the parts in his hand,
Only without the spiritual band."

「能く物を知らんことを望む所の人は、第一に內なる靈を驅逐せざるべからず、然

るときは其人靈の繫累なくして、己の手の中なる諸部を數ふることを得べし」、

マッシニ、アルノルドの語る處に據れば、大學に一少年あり、シエクスピアに記述せる「汝は病める心意に奉することを得ざるか」と云へる一句を變更して、「汝は癲狂者を看護し得ざるか」と爲せりと云ふ、是れ詩人の詩情と、感情と、至深の悲哀とを剝奪し、以て單に形質的疾病のみを殘せるものなり、此事能く近時一般に流行せる所の實躰說に比喩すべし、是等は只詩情と感情を取去る而已ならず、亦哲學、宗教、及び凡て靈に屬する所のものを取り去るなり、是等は夫の活氣なき支那の繪畫の如く、濃淡、遠近の工夫なく、以て宇宙と生命とを描出するものと謂はざるべからず、

神學は有形若くは靈性の中孰れかを排斥するが如き片面的のものに非らず、神學は決して有形世界を拒斥せず、反て其眞相及び最高の意義を以て之を表章す、又靈的世界を排拒せず、反て之を以て萬有中に表章せられて、其一層高遠の目的に萬有を服從せしむる一層深遠の實躰と爲して之を顯はす、而して人は靈として自己を知るが故に此靈界に安住し、又之によりて相親愛す、而して其神に關する知識は、空虛の思想に存する虛空なるものに非らず、反て充全富饒なる意義に於て具躰的實躰の知識たり、生路の經驗中に與へられたる神及靈的實躰の知識たり、抑も此知識は金庫に散亂せる金貨の如く、人の心意の中に散亂するものにあらず、夫れ金庫は變化するとなく、又其含蓄物より利益を受くるとなし、而して貨幣は其金庫と活ける關係を有せず、然れども心意は活ける植物の水と土とを吸收して、以て其自己の生活機躰に之を變形するが如く、其自己の生命と發育の運用によりて此知識を採收するなり、

是に至りて吾人は知る、知識なるものは空虛なる主觀的の作用に非らずして、啓示せられたる物象に對して活動する主觀的の知識たり、而して此物象は智力に給するに物躰を以てし、且之れなくんば薄弱幽暗なるべき其焰火をして旺熾赫々たらしむるものなることを、若し心意にして直接に覺官の前に在る所の凡ての物躰以外に超脫して宇宙を說明することを得るとせば、是れ則ち遊星、太陽、分子、物塊、動、力、肉躰及ひ靈を知覺し、而して是等が實質的實躰たるを基礎として、以て其存在せる所の凡てのものゝ知識に進むが爲めなり、此の如く、神に關する知識にも神の啓示を預想するなり、蓋し此啓示たる、神を求むるものが萬有の中に、人間歷史の中に基督の

中に、殊に追求者自己の精神中に發見するものなり、吾人は既に神が萬人通有の宗教的感情に啓示せらるゝことを見たり、基督信徒は神が靈によりて吾人に近き、又恩惠を與ふることを世人よりも一層純潔、強大に實驗するが故に、世人に比して一層明白、廣大に神の啓示を有す、蓋し此靈は基督に就て證し、以て神の啓示の大動機を深く人々の心に銘するものなり、左れば神の觀念と神に於ける信仰とは、所謂神の存在の證明の後に成るものにあらずして、其の初めに於て存するなり、茲に於て吾人は此觀念を組成する所の要素、及び吾人が神の存在を信するは何故なるかの理由を確定し、又理性の明光に此信仰の基礎を照らし、其果して道理に合へるや否を判定し、而して神か吾人の經驗に自己を啓示するとを信するの道理に合ふとを發見し、又吾人は自己の意識の域内に表現活動する者として神を知るとを發見す、吾人は自己の内に於て神を發見す、「誰にても初め自己靈性内の聖所に於て神に面せざりし人は、星辰の道途を攀ぢて以て神の座に達すると能はざるなり」、アウゴスティンは久しく思辨的困難と激爭せる後、一旦豁然、驚喜の間に自己の靈魂中に自己を啓示せる神を發見し、而して絶叫して曰く、「おゝ美よ、吾汝を愛せしと何ぞ遲きや、汝は昔に在ても、今に在ても、常に新にして變はるとあらず、嗚呼吾汝を愛するとて、汝が創造せし美なる形躰の内に跳入りつゝありき、汝は此に在らず、内に在りき、外に迷ひ出て、我は汝と共に在らざりき、若し汝の中に有りしに非らずんは則ち在ること能はざるべかりし諸の物、吾を妨けて汝に遠からしめたり、然るに汝は吾が聾を喚びて、叫び破りたり、汝は吾が盲を照らし、燿し、又開かしめたり、汝は佳香を薫せしめたり、而して吾は之を呼吸して以て汝を喘ぎ慕へり、汝は吾に觸接せり、而して吾は汝の平和を得んとて心燃へたりき」と、吾人一度自己の内に神を發見せしときは、則ち全世界に神の存在、表現及び活動の證據充滿せるを見る、パウソルン妙辭を以て此理を述べて曰く、「基督教信徒の信仰は、妙粉莊飾の窓戸を有せる雄嚴なる大禮拜堂の如し、外よりして之を望むときは、汝其榮光を見ず、又必すしも何等の榮光あるとを想見すると能はず、然るに一たび内に入りて之を見るときは、光線の各條悉く言ふべからざる妙麗の調和を啓示す」と、

人の靈魂内なる靈生中に、其恩惠的の作用を以て自己を啓示する神に關する右の

知識は、神の存在の證據を論ずる近時の記者等屢々之を看過せり、然れども此知識は古往今來靈性上基督の使徒となれる人々の宣言、信仰及び喜樂として存せし所なり、ヒオフヒラス曾てアウトリカスに書を與へて曰く、「若し吾子にして余に吾神を示せと問はゝ、則ち予は答へて曰はん、先つ吾子の人を予に示せ、然らは則ち余は當に吾神を吾子に示すべし、又先つ吾子の靈眼は果して克く見るか、吾子の心耳は果して能く聞くかを示せ、蓋し肉眼を以て他に屬する物の明暗、黑白、美醜を辨識し、耳を以て音聲を聽取するが如く、心の耳、靈の眼は則ち能く神に屬せるものを鑑別し得るなり、人々此靈眼を開けるときは、直に神を見るべし、萬人皆眼を有せり、然れとも或人の眼は盲せり、故に太陽の光線を看ると能はず、然れとも太陽は決して彼等の盲したるの故を以て照耀するとを休めざるなり、彼等は自ら見る能はざるを以て其盲に歸せざる可からず、おゝ人よ、吾子の事正に此に全し、吾子の靈眼は罪の爲めに暗くなれり、即ち吾子の罪深き所業の爲に暗くなれり、彼の鏡面に光澤あらざる可らざるが如く、人の靈魂も亦純潔ならざるべからず、若し夫れ鏡面に一點の曇あらは、人其顏面を寫すと能はず、此の如く靈魂に罪あらば、人又神を見ると能はず」と、

右の論旨より總括すべき必要の論結は他なし、曰く、人は神の啓示を收接し、之に因りて神を知るべき能力を賦與せられたる者なり、其實在の一面に於て、人は物界の一部分且つ其分有者にして、有形世界の實躰を知るを得るの本性を有するが如く、其實在の靈性的側面に在りては、靈的にして道義的なる系統の一部分且つ其分有者にして、靈界の實躰を知り得べきの本性を有するものなり、キチー言へるとあり、曰く、「人間は其靈と肉の凡ての繫繩を以て、其造主なる神の方に牽引せらる、今夫れ獅子の生るゝや、荒野に行き、鷲の生るゝや、山頂に翔る、此の如く人は社界に出て、人間に入り、神に向ふなり、然り、見よ偉大の名は言明せらる、若し汝搖監の中に於て人の心に神性に對する或る本能あるを承認せざるときは、則ち萬事永へに解釋すべからずして畢らんのみ」と、

第六章

人の靈能は醒覺せらるゝを要す、

人の神を知るの能力は、其活動せんが爲には之を挑發するを要し、又其靈眼は、靈性上人を成育、發達せしめて以て之を淨むるを要す、

(一)右の如くせざるべからざる所以を問へば、或は人の靈能の未た發達せざるが爲めなるもあるべく、或は人が之れを自暴自棄し、若くは自意を以て之を毀壞したるが爲めなるもあるべし、パウロは人間に於て靈性的なる者と物界的なる者即ち肉なるものとを區別したり、此區別は蓋し人なる者は合理的及も靈的系統と有形的若くは物界的系統との兩者に屬する者なりとの事實に基因して立てたる者なり、故に人は肉に屬する生來のまゝなる人たると同時に、又靈に屬する人たるなり、所謂物界的とは、渾て人獸兩界に共通せる所の部分を云ひ、靈性的とは渾て神人兩性に共通せるものを云ふ、

而して生來の人は靈に因て觀る可き所の靈に屬する事物を知ると能はずと云へるパウロの斷言の基礎は、則ち茲に在て存するなり、人は茲に說明せるか如き單純なる物界的能力を以て神を知ると能はず、神も亦之を經由して人に自己を啓示すると能はず、蓋し覺官は能く物質物を知覺すれども、更に靈物を知覺すると能はず、饑渴其他渾て單純なる物慾及び欲望の神靈の觸接に呼應すると能はざるは、猶ほ泥塊が伶人の絃弓に呼應すること能はざるが如し、蓋し是等のものたる、人を導きて神に至らしめず、又人をして眞理と理法とに循ひて、合理的の理想と目的とを現實すべき生活を爲さしむることなくして、只欲望を滿足せしむべき快樂を追求するに汲々たらしむるのみなり、主樂主義は獨り人間の物性にのみ其基礎を定むるが故に、物性的生活を以て人間最高の生活と思惟するなり、夫れ然り、然れども人は元來合理的實在者にして、單に肉のみにては幸福なると能はざるが故に、遂に眞正の哲學として厭世主義を建設するに至れり、禽獸は人に靈性あるを知らず、若くは自己が之を知らざるとを知らざるが如く、人も亦禽獸と自己とに共通せる所の物形的能力と感性とを以ては、神を知り、若くは自己が之を知らざるとを知る能はず、又自己の中に靈的能力及ひ感性あるとを知る能はざるなり、神は獨り靈に對して

自己を啓示する者なれば、則ち啓示も亦獨り、靈を以て收接するとを得可きのみ、天地に於ける神の功業は素より覺官を以て知覺するとを得べし、然れとも是等を以て神其物を知覺す可きにあらず、只其外部の形躰及ひ運動を知るに過ぎざるものにして、獨り靈のみ是等の物を經由して以て神を知覺するものなりとす、

人が神を知り得る爲に靈の醒覺と發達は何故に必要なるやの理由は、實に右の如く人の本質上よりして然り、抑も人に在ては、物性の發育は靈性の發育に先立つ者なり、而して人の本質たる靈能は其活力と爲りて顯出するの前に、多少の間不動、睡眠の有樣に在るものなり、例へば新に出生せる赤子の如きは、只小動物の本能と能力とを見はすのみ、而して靈の能力は固より其本質中に存在して未た顯はれざるのみ、醫學博士モッヴレーは其著書顚狂論中に、狂質を有するの小兒は時として非常の潜能力を顯出して、猿類も及ぶべからざるの機才を見はし、以て頑是なき惡戲を行ふとありと云へり、然れとも最も健全の小兒に在ては此能力長く顯はれず、然るに幼稚なる靈魂は自己の作用によりて感性を發達し、其能力を養成して、遂には殆んと自ら靈魂を創造せしが如くに見ゆるに至る、

右の如く人間に於ける肉欲的及ひ物界的なる者は先に發達するものなるが故に、一時靈的なる者を制抑、包藏するものなり、而して肉に屬する衝動は物質的生命の繼續に必要なるが故に、其勢力も隨て横肆、猖獗にして停息するときなし、是れ實に靈的能力が其正當なる上級の地位を得んと爭ふときに當りて、終局は兎も角も、發端に於て有、する能はざる勢力なりとす、

夫れ小兒に於ける靈能發達の有樣は、人類の歷史に於ける靈能發達の有樣と毫も異なる所あらざるなり、人類の眞正なる進歩の歷史とは、則ち其合理的若くは靈的能力に關し、又合理的理法に自己の物質力を從はしめ、高尚なる目的に此等を向はしめて以て自己の靈能を物質力の上に置くとに關し、及ひ萬有の理法を確知して其勢力を支配し、之を人間の用に供して以て自己の靈能を外界萬有の上に位せしむるとに關して、人の意識が漸次に發達するの歷史を云ふ、而して宗教歷史なるものは、物質的の生活より神の智識に遷移するの歷史にして、眞正にして靈なる宗教に人類が進歩するの歷史なりとす、

靈能は人の意思より出つる行爲に因て、尚ほ一層物力の下に沈沒するとあるもの

なり、人或は其靈能の習練を怠るあらんか、靈能は之が爲に衰弱すべし、然るに始終物質的の生活のみを送るものは、物性の偏向必す旺盛を極めて、遂に靈性を勝伏す可し、而して私慾と俗味との生活中に在ては、人は自ら好んて罪惡の行爲をなし、以て絶へず其能力を毀壞し、其靈性を鈍くし、其邪惡なる品性の爲めに神を離れて逆境に進むものなり、

吾人は尙ほ之に附加して言はざる可からざることあり、即ち私慾の生活を爲す者は、其靈魂衰耗して、終には常に其周圍を包圍せる神の恩惠の勢力を感受すると能はざるに至ると是れなり、

人は受造物として常に神に屬する者なり、人が其合理的若くは靈性的能力に於て神に屬するとは、尙ほ其物形的組織に於て神に屬するが如し、蓋し人は其正式の狀態に於ては常に神の感化を受くるを得へきものなり、人は啻に合理的の本質を有し、而して此本質あるが爲に、殊に神の理性の明光を享有するとを得る而已ならず、神と活ける交通をなし、而して自己に對する神の啓示により、て、絶へず啓沃、開育の恩澤に沐浴す、人が其心意を正式に開發し、其靈生を正式に成育、發達するに至るは、唯た一に彼が右の如く神と相結合するによる、故に基督は此道理を説明して曰く、

基督教徒は只神に連りて生存し、又其實を結ふとを得るが如しと、

に連りて生存し、又其實を結ふとを得るとを得ると、尙ほ葡萄の枝の葡萄の樹然るに人は神の受造物たるに、罪を犯し、之に隨ふとをなさず、却て自力を負み、隨て神が絶へず、人を包圍して其恩惠を其靈魂に注入する所の溝渠を頑然として閉鎖す、左れば神は絶へず其人の前若くは意識の内に己を啓示すと雖ども、人は此く自己の許に來りて其感化に自己の心靈を同化せしめんとする神に注意するとを好ます、是を以て其靈の感化を通すへき溝渠日に益々涸れ、靈性終に枯死するに至るは亦必然の勢なり、此の如き順序を以て、其意識に於ける神の啓示は全く遮斷せられ、其神の幻象も又消滅するなり、而して此勢にして尙ほ一層を進むるときは、則ち人は全く自己が神を知らずと云ふとと、自己が汚て眞正なる靈生を缺くと云ふとの意識を全く失するに至るべし、畏れざるべけんや、蓋し此かる人は即ちパウロが恐るへきの語を以て記述したりし有樣に陷落せる者なり、曰く、「汝等罪科のために死せり」と

斯る人物に對して神を知らしむる爲の第一の要件は、即ち其靈的感性と能力を醒覺せしむるとなり、夫れ此の如く醒覺したるときは、則ち其人直に自己の神と隔離せるとゝ、及び之が爲に靈の死を自己の身上に得たるを悟得し、以て神に還り、其靈魂を開て神の永遠、普遍の光明及恩惠を受納するとを得可きなり、是れ即ち信仰の作用にして、神の前に於て義とせらるゝの要狀なり、抑も人間の作用には只二個の區別ある而已、曰く收接作用、曰く生産作用是なり、一切の有限的作用者に在ては收接作用は生産作用に先立たざる可からず、而して凡ての有限者に於ては生産作用は皆收接作用に依據する者なり、是れ重學の理法なり、有機的生命と發達との理法なり、人の靈的生命と能力の理法なり、若し夫れ初めに受くるとあらずして生産するとを得るものとては、獨り神あるのみ、人の神に向ひて、其常に自己を包圍せるの恩惠を受けんとて其靈魂を開く所の作用は、即ち是れ信仰にして、人が義とせらるゝに欠くへからざる要狀なり、何となれば是れ獨り有限の人に在て正義なる品性と眞正なる靈生を得、眞實に神を知り得る樣に其靈魂を闡明せらるゝ唯一の端緒にして、又神が人に授くるに眞福即ち其心靈の完了を以てし得へき神人の一和を來し得る唯一の端緒なればなり、

蓋し右に述へたるが如く、人の信仰と神靈の流入、宿在とによりて、神人の相一致するとは、神に關する眞正完全なる智識を得んが爲めに欠く可からざる者なり、パウロが所謂、人の靈と共に證明する神の靈とは即ち是れなり、

事理既に此の如し、故に人にして神より隔離するときは、肉慾、勢利及ひ私慾に沈沒し、以て自己の靈的動機を枯死せしむるなり、斯の如き人物に對しては、宗教的生活は頗る無味なりと見へ、甚しきに至りては極めて厭惡す可きものゝ如くに見ゆ、若し此人物の衷心に立入りて其至願を窺はゞ、只「何を喰ひ何を飲み何を衣ん」かと此一事あらんのみ、神の信仰に關する靈的生活、及ひ神と人とに對する愛の如きは、善事として斯る人の喜ぶ所にあらず、其心意を樂しましめて、其嗜好を動かす者は、只其肉慾、勢利若くは私慾的需求を滿足せしむる所のものあるのみ、其人物の靈的感性の遲鈍の有樣を形容するには、「オイエルバッハ」の粗惡なる誠語の適切なるを見る、曰く、「此人は即ち是れ其食する所のものたるに外ならず」と、此かる人物には眞正の幸福も凶禍の如くに見え、眞正の凶禍も幸福の如くに見ゆ、故に靈的生活の高

遠なる優境と快樂とに達せんとを求むる可しと云へる渾ての勸誘は、彼に對して殆んと馬耳東風たるのみ、此の此き人物の心事を説明せんが爲めに、フェチルンはセールセの爲めに豚と化身せしめられたるグリルスとユリセスとの間に起れる談話を著作したり、即ちユリセスは元の人間に彼を復歸せしめんとを望みたりしが、グリルスは斯る希望を有せざれば、ユリセスの勸誘に同意せず、乃ち公言して曰く、「豚の生活は人間の生活よりも適かに愉快なるを覺ゆ」と、而して種々の議論をなしたる後ユリセス曰ひけるは、「然らば則ち吾子は能辨、詩歌、音樂を以て物の數算へざるか」と、グリルス事もなげに答て曰く、「余は實に斯くも多福なれば、此かる技能をば渾て足底に輕視するなり、余は公等の如く能辨ならんよりは、寧ろ豚の鳴聲をなして樂む者なり」と、ユリセス曰く、「然れとも吾子は如何にして此嘔吐すべき汚穢と臭氣に堪ゆるとを得可きか」と、答へて曰く、「是れ各自の嗜好如何と顧るべきまでのことなり、余が覺官には此香氣は、琥珀酒の香氣よりも尚ほ芬ばしく、汚泥と穢塵は神酒よりも尚ほ馨し」と、

故に人の靈生が肉情、物慾の爲めに覆はるゝの度に隨て、其靈靈界を覺知、認識する

の能力は消磨するなり、一千八百八十二年モントレオール州に於て、亞米利加國學術協會の年會ありたるとき、毎朝刊行の新聞紙の報道せし所によれば、此會に於て、人類は樹木と兄弟なりと確定せられたりとの報告書を讀みたりしと、蓋し彼の唯物説は人類に禽獸の有せる所の者と種類を異にせる能力の存在するを信認せず、宜なるかな、其主義を執るものは、勢ひ靈として人を特別なる者たらしめ、又人をして神と相契合するとを得せしむる所の高等の能力を蔑如し、以て其下等の能力を尊重するに至るや、想ふに前世記に於て、宗教的不信仰の風一般に行はるゝに際して、世の學者往々説を爲して、蒙昧、蠻野の風を以て大古に於ける質朴、至福の形狀なりと辨論し、文化の次第に層進するに隨て、人の風俗は漸々此有樣より沈淪せる者なりと爲したり、近世世の道德に關して攻究する者にして、時に或は獸類を以て純全の正義を表白せる者なりと論定する者あり、吾人は又ホイットマン氏なる者あるを見る、氏は思考を凝らせる後、獸類の人類よりも更に優等なる者なるとを發見して、轉た彼等と共に其生活を俱にせんとを望むの情に堪へず、覺へず絶叫して曰く、

余は思ふ、余は生を更へて彼等動物と共に生存したし、彼等は實に和平にして自ら滿足せり、余は佇立して彼等を見ると多時なり、看よ彼等は自己の狀態に就て不平なく、苦むことなし、暗中に醒覺して横臥するとなく、自己の罪惡の爲に悲泣するとなし、又神に對する自己の責任を研究、細考するを要せず、一として不滿足を抱く者なく、又物を獲んが爲に狂奔する者なし、一として他を跪拜する者なく、若くは數千年前世に生存したりし所の祖先に對して叩頭する者あらず、全地球上悉く是れ平等にして、一の特に敬重せらるゝ者なく、又特に不幸なる者なし、

ハルトマンも亦之れと同く厭世的の結論に歸着したり、曰く、「至福の人間とは粗野なる蒙昧人なり、而して文明の人に在ては其無敎育の社會なり、抑も不滿足なるものは敎育の增長するの度に隨て增長するものなり、……左れば貧困、卑陋、粗野なる狀態は、富裕、文雅、優秀の狀態よりも尙ほ幸福なる者なり、迂愚なる者は才氣活潑の人よりも寧ろ多福なり、……禽獸は人類よりも寧ろ多幸なり、詞を換へて言へば、寧ろ墓なさの少なき者なり、何となれば彼等の不滿足は迥かに鮮少なればなり、嗚呼思へば、牛若くは豚は實に愉快なる生活を送れる哉、其有樣を言へば、恰も夫の人類の孜々汲々として幸福是れ追求するに引替へ、世の繫累、煩惱の表に超然するの方便をアリストートルより學びたる者の如し、……禽獸の生活を以て、潔白なる性質の最も純粹なる源由として、之を兒女に知らしむることは必要のことなり、此くてこそ、彼等は自己の單純なる實在を理會すべく、社會の僞善、虛飾を去り、以て自己の自己たる所以を復興、更新す可きのみ」と、

夫れ斯の如く、人にして其靈性の肉慾中に沈沒するときは、則ち內情以外宇宙に物あるを發見すると能はざるなり、漫々たる彼の蒼穹、一たび學術の手に觸るゝや、忽ち其星辰を散布せるの床板を碎き、以て上下に之を放開せり、而して之が爲に人に顯はるゝ所の者は何ぞ、曰く、空間と時間の悠遠、無窮なるとなり、曰く、物質の無量塊なり、曰く、無數の世界と世界系となり、曰く、到る所に活動して抗拒する者なき勢力なり、曰く、迅速なると理會す可からずして、永遠に運轉するの運動なり、而して此中には智能あらざるなり、意匠あらざるなり、目的あらざるなり、指導あらざるなり、智慧あらざるなり、愛存せざるなり、結局歸着する所は、只是れ窺測す可からざる唯一の秘義と、全く知るべからざるものとのみ、而して凡て之れを通して觀察し、

以て其裏面に横はれる秘奥を見る所の人は、是れ獸類よりも劣れるものにして、殆と樹木の兄弟なりと云ふ、

若し夫れ基督教有神論者に顯現する所の實事に至ては、實に上の有樣とは全く霄壤の差違あるなり、曰く、人は神と其像を一にし、宇宙に通して其智能を開放し、事々物々の中に神を見、且つ所として神と共に在らざるなきと、曰く、神は人間の内に自己を啓示し、基督によりて自己に世界を復和せしむると、曰く、基督は神の榮の光輝、其質の眞像、罪より人類を救拯し、彼等を兄弟と稱ふるを耻とせざる救主たると、曰く、此く贖はれたる人は永遠、無窮に亘り「主と共に限りなくありて」、進歩的に全と福とを現實するとを得可きと、即ち是れなり、

是れ實に生來の人は靈のとを知るに由なき者なりと云へるパウロの語を完結するものと謂つべし、夫れ斯の如き人は物質の生活中に沈沒して、自己を周繞せる靈的實躰を感覺すると能はざるなり、聖書に在ては此有樣に沈淪せる人を、罪の爲めに奴隷にせられ、盲聾とせられ、死せしめられたる人、邪道に惑溺し、虛僞を信ずる人と稱せられ、是れ等の人に對しては、物質的天地は至大、至久、至實なれとも、靈的天地

は、不實、瞬忽、幻の如く夢の如くなる者と見ゆるのみ、而して彼等は人を見て以爲らく、此れ夫の獨り發芽して生長する植物の如く、吹き去り吹來る風の如く、滔々として流逝する水の如く、萬有の抗拒す可からざる勢力の爲めに、至大至紛の勞苦中に驅逐せられたる高等の動物たるに過ぎずと、其人々の期する所如何を問へば則ち曰く、死するときは埋沒せられて、轉し去り轉し來る土塊と共に意識なく混淆するのみ、又其生存の間は靈的無意識の有樣にて、旋り去り旋り來る土塊と共に、轉り去り轉り來る萬有中に埋沒せらるゝなりと、蓋し肉眼を以て見るとを得べきものは此の如きに止る、

此の如き人に在ては、聖書は猶ほ彼が萬有を見るが如く、其間に毫も靈の意義を含有せず、曾て米國の一學生にして獨乙の大學校に遊べる者あり、偶ま同校に在て古物學の研究に從事せる獨乙の一少年と相知るに至れり、然るに此少年基督をも、神をも信仰せず、彼は聖書を讀まんと欲するの精神あるとなく、揚言して曰く、余は此書の中に、一も余が心を感ぜしむるとを發見せずと、其後彼の米國學生、幕屋の築造方に關する詳密の説話を彼に爲せり、彼れ之を聞きて非常に興を催し、此事を攻究

する爲めに終夜睡眠を廢せりと云ふ、是れ其人は聖書に記錄せるところの、罪惡より人類を救拯し、又基督と地上に建設せる義の王國とに於て啓示せられたりし神の愛の歷史に於て、感憤すべき事實を發見するとあらず、却て幕屋築造方の陳述を聞けは、其精神の全幅に行き渡りたるものなりとす、斯類の人物極めて世に多く、其唯理說を主持せるが爲めに、其心情の乾燥、冷却せる者にして、時に或は聖書を批評し、若くは其註說を作ると雖とも、其の聖書の意義を理會するや不當、謬劣、猶ほ彼の獨乙學生の如きものあり、彼等は聖書の文法と古事を明解するとを爲すと雖とも、其眞義を說明すると能はず、字句と言語を細拆すれとも、其の中の生命と權能とを指示すると能はず、レナン曰く「宗敎の歷史を作らんと欲する者は、一たび宗敎を信したる者ならざる可からず、然れとも史筆を執るに當ては、最早之を信ぜさるを要す」と、是に由て之れを觀れば、彼も又正當に宗敎を記述し若くは批評せんとするには、經驗を以て宗敎を知るとの必要なるを認許せるなり、然れとも彼が言ふ如く、一たび信仰せし者を放擲して又不信仰に返るは、是れ宗敎歷史家の資格を與ふるものにあらず、却て之を奪ふ者なり、宗敎の完全なる批評家若くは解釋者たる者或は其從來の特別なる宗敎より超逸して一層高尙なる他の宗敎に移るとある可しと雖とも、兎に角に、其自己の經驗に於て宗敎の何者たるとを知り、而して其自己の靈的生活と見識とに於て、たとひ其形狀の部陋なるにもせよ、苟くも宗敎たる以上は、何れの宗敎的生活と信仰とに對しても同感を表するとを得るものたらざるべからず、

(二)神を知るべき能力は、人間の至深なる靈性上の不能感の中にも存するものなり、嬰兒に在ては、靈的能力は只潛勢力として存し、有心者たる小兒の本性中に在りて未た發育、活動せざるなり、蓋し此等の能力たる、最初は不完全に發育せる嬰兒の機關を通して自ら活動啓示すると能はず、然るに嬰兒の物質的生命の次第に前進するに隨て、其靈能漸次に作用を初む、此作用に因て、彼の嬰兒は次第に明瞭に自己が靈なるとを意識するに至る、而して此靈は「自己に還り」、靈として自己を知り、物界の生命より自己を區別し、以て自己を他物に啓示するに至る、

人は此世の生活を次第に增進するに隨ひ、其自己の有意的の作用に由て、自己の內なる靈性を物性の下に沈沒せしめ、以て靈的不能感(インセンシビリティー)の有樣を以て生存するとある

べし、然れとも此場合に於ても、尙ほ其靈能は本性中に存して滅するとなく、之が爲めに常に沈沒の有樣を出でゝ、再ひ靈の生活に還歸し、至高の境に靈魂を擧げ、以て貴重なる目的に其能力を導かんとて、物質と爭ふの自由を有するなり、此く其靈の感性は彼の內部を刺衝すれとも、彼は高遠なる生活と貴重なる目的に自己を刺衝する所のものとして、此等の感性の意義に毫も注意せず、反て其靈能の刺擊を受けて、以て自己の義務と罪とを自覺し、隨て動物と全一の安心を享くると能はざるを恨む、彼は牛の和平、豚の閑散を妬みて、自ら牛馬の如き福祉を得るに由なきを歎ず、」夫れ神を知るの能力は、人の本性的靈能と同しく常恒不變なる者なり、否寧ろ本性的靈能中の一として、之れと分離すべからざる者なり、此能力や、使用せられ、而して神か靈魂の上に及ぼす作用の結果の其人の意識にあらはるゝことあるべし、然かも其人は此結果の神の顯現たるを認むるとなく、又自己が之によりて神を知るに足るとにも氣附かざるが如きとあるべし、

而して此と同一なる事實の存するあり、即ち或人は其智識を以て單に覺性の物躰にのみ限局せられたる者なりと信認して、合理的直覺力の確實なるとを否定し得るなり、然るに一方を顧みれば、其人の思想は一に此合理的直覺力の統制の下に在りて、常に自らは此に屬する觀念を預想する所の合理的動機と情緒とを感じ居るなり、又人は絕へず自由の意志を使用して、自由と德義上の責任とに就て意識し居るにも拘はらずして、其存在を否定するとを得るなり、サー、ゼームス、フ井ッゼームス、スチーブン論して曰く、「若し汝自ら、余に於て無き所の能力を有するとありとて其事實を余に信ぜしめんとを欲せば、則ち汝は吾人の共有せる所の能力に訴へて、以て汝の余に優れるとを證明せざるべからず」と、因て氏は曰く、人あり盲者に對して自己の視力を有せるとを證明せんとするときは、遠隔の距離に在る物躰の形狀を詳述して、之れに充分に聽取せしめ、然る後に彼を導きて其所に至らしめ、手を伸べて其物に觸れ、以て自己が前に述へたる所の差はざるとを納得せしめざる可からずと、然り吾人は思惟す、氏が此の格言を拒み、此例證を非議する者はあらざるべしと、然れとも惜い哉、氏は其第二の例證に至りては、上の第一の者の如く完全なるものを發明すると能はざりき、氏は亦曰く、若し人にして、「狼星に起れる、出來事を直覺」するとを得べしと云ふ者あらば、則ち吾人は其人に向つて、果して其之を視るの

能力ありとの證明をなさん爲に、室の一隅に立ちて他の壁上に掛ける所のタイムス新聞紙の一行を讀まんとを請求せざるを得ずと、然れとも若し余は直覺力に由て猥星中の出來事を知る、即ち其光を發射しつゝあるとを知ると云ふとせば如何ん、是れ余は彼の反對者自身が、其眼より二尺を隔離せるタイムス新聞の一行を視、若くは室の一隅なる壁紙に印せる數字を視、及ひ其發光躰なる猥星を直覺するに毎に使用すると同一なる直接の視力に依賴せるものにあらずや、何となれば凡て覺性なる者は直接的及ひ表現的直覺力にして、自明、眞確、人智の證明す可からざる所の者なればなり、且つ若し余にして、人に覺性の到達す可き境域外に在る所のものを知るの合理的直覺力ありと主張するとするも、是れ亦余は反對者が自ら有せる所の一能力に訴ふるまでなり、何となれば反對論者は猥星を視て、引力法及物力永存法に從ふて活動する所の一物躰なるとを知り、又之より發射する所の光線は、是れ地上に在て自己の眼目に感するに光線と同一なる分子の作用より生ずる者たるとを知り、而して彼が之を知り得るは推理によるものにして、其推理なるものは合理的直覺力の確實なるとを基礎とするものなればなり、抑も反對論者が力を極めて否定せんとを試むる此等の直覺力の確實力の上に、凡百の學術は建設せられ、而して學術の進歩、人間の經驗は間斷なく之を證明するものにてあるなり、

さて吾人は神を知るの能力を有し、及ひ自己の靈魂中に神の恩惠の啓示を經驗すると言ふも、之を確定、證明せんが爲に、吾人は敢て他人の有せざるが如き特異の器能に訴ふるとを爲さず、只萬人に共通し、人を禽獸より區別して以て神に一致せしむべき靈性上の能力と感性とに訴ふるのみ、若し反對論者にして神を知らざるか、是れ其固有の靈能の習練するを怠れるか、若くは不正則の生活を爲したるが爲めに、其靈能をして不正則境遇に沈淪せしめたるかの二理由に由るに相違なし、

若し盲人にして、一たび他人の克く物象を見るとを知るときは、必す其人が見たる所の者に就ての證據を納るゝを肯んずるなる可し、今夫れ人類の經驗に由れる神の智識の確實なるとに關して、幾世幾代、之を保證するもの何そ限らん、縱ひ如何程に疑惑深き人なりとも、此智識中に多少の眞理を包有してはあらざるやと攻究すること道理にも合ふ義ならずや、而して、彼等若し正直に神を求むるときは、往時豫言者の言は則ち神の眞語たるとを發見す可し、曰く、「汝らもし一心をもて我を索め

なば我に尋ね遇はんと、

人は人に對する神の啓示を通過して、經驗上より神を知るとを得る者なりと云へる吾人の說に反對する所の駁論に曰く、世には凡て宗敎的感情と信仰との全く欠乏せる者少なからざるにあらずやと、然れとも此駁論の無根なるとは今や全く明白と爲れり、第一、此論者の所說は事實に反せり、元來宗敎は人類の固有性にして、無神主義は是れ一個人に於ける癖性のみ、古往今來未た曾て無神主義若くは宗敎心の欠乏せる人種、々族の世に存在せしとを聞かざるなり、第二、不可知論者、唯物論者及ひ無神論者も亦た神及ひ宗敎の觀念を有す、彼等は大概人の本性的宗敎心と、之に對して滿足なる目的物を給するの必要なるとを承認し、且つ明かに自己が宗敎的の能力と感性とを使用するとを示すなり、第三、深く沈淪して神を感する能はざるが如き場合に於ても、吾人は幼時の後に至りて、其人の靈能の活潑に、而かも其毀壞せられたるものたる明證を發明するなり、

故に吾人は結論す、人の神を知る可き能力は其本性に存在して、其至深なる靈的不能感の中にも生存するものなりと、夫れ然り、此能力は人性に固有し居る者なるが

故に、要する所は單に之を提醒して、以て正當に之れを指導するに在り、然るに其至大の可能力は深く陰蔽して其人自己にさへも視へず、何となれば人生の理法即ち普般の愛の理法に隨て之れを習練するとあらざればなり、然れとも新に之を感化するものあるか、若くは新に出來事の偶發するあるときは、此能力は茲に其作用を初め、以て直に人に神を啓示し、人は神に關係を有せるもの、又神を知るとを得べきものたるを啓示す、今夫れ閉鎖せる「ピヤノ」は、只是れ立派なる細工物として人に顯はるゝのみ、然るに之を開て其組織を精査するときは、即ち吾人は其眞實、高尙なる意匠に關して理論的に或る事を知るなく、尋常の伶人をして之を彈せしむるときは、則ち其音曲力の幾分を人耳に顯はす可し、リースト一たび之に觸るゝとあるときは、則ち此器械は前に顯はさゝる所の音曲力を顯はして、以て聽者を歡喜せしむ可し、之と同しく人には、新力の加はるとき、則ち忽に外に發表す可き智力、感情及ひ能力に對する陰伏力ある者なり、大能辨者は大音曲家が器械の上に於けるが如く、聽衆の上に其勢力を波及して以て其全幅の力を喚起するなり、彼等聽衆初めは譯けも無きとを談りつゝ、徐ろに辨士の前に靜座す、已にして辨士口を開て彼等の智

力を警醒、說伏すれば、新奇の觀念彼等の心に吹き込まれ、萬事萬物彼等に對しては新しき形容を裝ふに至る、辯士又聽衆の感情を自由に挑發せば、彼等をして或は泣かしめ、或は笑はしめ、或は怒らしむ、辯士一度聽衆の意思を奮興せしむるときは、彼等をして斷然として決心せしめ、奮然として蹶起せしむ可し、是れ辯士は聽衆をして自己に自己を啓示せしめたるものなり、文學若くは技藝若くは發明等に於ける偉人傑士は、尋常普通の事物の中に、此迄世人の氣付かざりし意義及ひ美、事實若くは法、勢力及ひ用法あるを人に示すものに外ならず、世の改革者若くは預言者は、道義的眞理の適用を顯はして、以て社會の人民を興奮せしめ、又は彼等に壯圖を吹き込む者なり、又近時合衆國に起りたる內亂の如き、大亂、激變は、人が至貴の感情と、至高の熱心とを發揮し得べき才量を有し、又喜んで身を犧牲にし、勇剛の事業をなし、氣力、忍耐を顯はすへき才能を具するとを示し、之が爲めに前時未發の有樣を演出し、以て自他を驚愕せしむる者ありとす、

凡そ能力は不用と濫用とに因て薄弱と爲り、人生の理法に從ひて之を使用、練磨するときは、則ち克く發達して强壯に趣くは、是れ人性の一理法なり、左れば筋力は練達なる勞働者、泅泳者、鞦韆家及ひ角觝者の妙技に其潛勢力を顯はし、以て吾人を驚歎せしむるとあり、耳目、指端と雖とも練習に由ては亦驚く可きの感覺力を有するとを啓示す可し、盲人の觸覺を見るときは、宛も新規なる一覺官彼に創生する者の如し、至大なる音曲家も、音樂の趣味と敎養を有せざるの人に對しては樂器に伏在せる潛勢力を顯はすと能はず、然れとも此無趣味の人と雖とも、習練の効力に由て雅曲を解するの地位に進むとを得、天然及ひ藝術の美を鑑識するの能力は、敎育と訓養とに由て發育せらる、人類の能力及ひ感性の作用に在ても、一して此の如くならざるはなし、即ち練習に由て發達せしむるとを得るなり、而して之が結果は實に驚異す可くして、宛も新器能の創造せられたる者あるが如くに思はる、故に人若し山村の草舍に一小童を見、其後數十年を經過して、其小童敎育を受け、智能開發して大人となり、或は勢力あるの地位に處して、部下を顧使するに遭逢せば、則ち之を思惟して、彼の最初の小童と同一の人物なりと信ずると能はざるなる可し、而して彼の文明人の複雜、富贍なる感性、能力と、野蠻人の質粗、單純なる能力との差異を決定する所の者は、一として此習練と敎養とに由れる發達の理法に基せずんばあらず、」

扨此理は人か神を知るの靈能に適用して眞なるを見る可し、人或は言ふべし、我は神に關する智識を有せす、我決して神の臨在に關し、若くは其自己に及ぼすの感化、作用に關し、或は何等の法方を以て己に對する神の啓示に關して何等の經驗をも有せすと、彼又言ふべし、我は頼て以て神を知るとを得可きの器能、若くは器能の萠芽をも有せず、我は頼て以て神と交通するとを得、若くは神と意識的觸接及ひ關係をなすとを得可き何等の信仰若くは感情の自己に存するを覺らずと、然れども之を以て人に此かる能力なきを證明する能はさるは、猶ほ教養、習練の欠乏せるが爲に發達せず若くは衰痺したりし他の能力若くは感性を人が意識するとを能はずとて、此を以て其人の中に此能力、感性の本性なく、又其内に潜伏するとなしと云ふとを證明する能はざると同し、今夫れ吾人、人の本性を精密に攻究するに、ピアノが音樂の爲に構成されたるとを發見するが如く極めて明了に、人は靈なる目的の爲に作られたる者なるとを發明す、而してたとひ粗野若くは毀壞せる者なりとも、必す其靈能の或る表現を示すとを發見するなり、而して的當の勢力を以て刺衝せらるゝときは、此同一の人は即ち聖人及ひ殉教者の如き靈的視力、感情及ひ氣力を發表するとを得るに至る、然るに人は尚ほ默坐、不動、物界中に圍繞せられ、其能力を有しながらも靈の音樂を奏するとを爲さず、又自ら其實在中に斯の如き高尚の能力の存在せるとをも忘却し果てつるなり、今夫れ身躰の睡眠中に在るときは、外界と内界の通路一時閉塞して、以て其實躰單に瞬忽、瓢焉の夢幻として見らるゝのみ、之れと同樣に、靈的睡眠中は神及ひ靈界との通路全く閉塞して、靈的實躰は單に夢想として見らるるに過きず、斯かる人に對して神を知らしめ、而して靈的の實躰を見るとを得せしめんと欲せば、第一に其靈性を醒覺するを要す、

(三)基督教は吾人に教へて曰く、神は其人に對する愛心を以て、人の靈的不能感より人を醒覺せしめ、以て其靈生を更新、發達せしめんが爲に、恩惠ある靈能を人の上に下すと、夫れ此靈性の醒覺は下の如き場合に於てのみ爲し得らるべし、即ち其本心及ひ他の靈的感性と能力とに由て、人が自己の沈淪せる罪惡を見るとを得、其覺官の感覺する能はざる神及ひ靈的實躰と自己との關係に於て、自己の到達し得べき高遠の境界、即ち其高大にして尊ぶべきこと、若し眞に之を現實するときは人生の至福を得、最も貴重なる追求の目的を達するの境界を識別すべき地位に達せし時

に在りとす、

此醒覺は是れ人類を罪惡の中より救出して、肉の生活より靈の生活に至らしめんとする、基督に在る神の愛を人に與ふる所の神の靈より來るなり、人若し此くの如くにして神を知り、之に因て自己の眞性を悟るに至る迄醒覺せらるゝときは、又若し其人にして其私心より變して、神に對する信仰及ひ神と人とに對する愛の生活に向ふときは、則ち其人は聖書に錄せられたる所の更新、變化を實驗す可し、曰く、暗を去て光に移る、曰く、盲目の開放、曰く、新生、曰く、死者をして生に回らしむ、曰く、古人を脱して新人を衣ると即ち是れなり、左れば、ウルリチーは此神に於ける更新的信仰に就て述べて曰く、「是れ靈魂の深底の生命より湧出つる者ならざる可からず、何となれば人類靈性の深底の生命は、神を以て其根據と爲し、之に加ふるに人類自己の宗教的及ひ道德的感情を以てする者なればなり」と、

扨此靈性的更新に在ても、亦何等新創の能力の人に加はるにあらず又既に人類の本性中に存在せざりし靈能を醒覺して神を意識せしめ、信仰と奉事の高尚なる目的者として、神に此靈能を傾けしむるに在るのみ、

(四)夫れ斯の如く、靈能一たび醒覺せられて、且つ正當の方向に傾くときは、則ち靈智次第に擴張して、心に存する所の神の幻象漸くに明瞭に赴き、以て永遠進歩して止むとなき靈的生活及ひ發育の要素となるに至るべし、

夫れ眞正の教育は、單に無生の器物中に於ける物の如く、頑然變化なくして智力中に守持せらる可き知識の修得を要する而已ならず、之を其靈的生命、發育及ひ能力に消化組成するとを要するなり、吾人は思想をして生命に變化せしめざる可からず、昔人言へるあり、吾人羊に草を與ふるときは、則ち此羊よりして再ひ此草を獲んとを望まず、却て羊毛を獲んとを望むなりと、蓋し此理を言へる者なり、健全の心意は自己の發育に知識を消化せしめて、再ひ之を生命、品格及ひ能力として發表するなり、ベーコン公曰く、「研究は品性を成す」と、又其格言に曰く、「眞は善を印刷す」と、實に然り、眞理の眞に明白に赴くは、是れ只其人の感情、意思の上に印象するが爲めのみ、絶對理性中に、儀型的に存して、有限の創造物に表現する眞理と理想は宇宙の本性なり、故に是等のものは一切の思想と勢力の模範なり、斯かる本性を有する宇宙に於て、生涯の眞の目的と、是等を現實するの方法とは、皆な此眞理の決定する所なり

とす、此を以て行爲の理法として此眞理が實際に有する關係を見若くは考ふるとなくして、只思辨的に之れを知るは、是れ其實際に存在する有樣を其儘に知るものにあらず、即ち片面的にして不完全の知識なり、半眞の知識なり、若し之を全成の眞理として受くるときは則ち至大の謬妄に陷落す、左れば單純なる思辨的攷究は則ち片面的にして不完全なるものにして、知力を導て懷疑主義に至らしめ、精神をして乾燥ならしめ、意思をして不決斷に且つ薄弱ならしむるなり、是れ純然たる學者は乾燥冷淡にして實際に無智、薄弱、而して倚頼するに足らずとの感想を世人一般に起さしむ所以なりとす、

懷疑家や單に一遍の理論として神を尋究する人は其知識の園に於けるや恰かもさたんがえでんの樂園に於けるが如きのみ、

On the tree of life, The middle tree and highest there that grew, Sat like a cormorant,……
nor on the virtue thought. Of that life giving plant, but only used For prospect what well used
had been the pledge. Of immotrality.　(失樂園第四編百九十四—七)

神學者の資格を成すには三個の要件を要す、即ち思考、祈禱、試練なりとは世に稱する所なるが、此言實に然り、彼は唯思考し、自ら推理し、又他人と辨論すると而已を以て其資格と爲すべからずして、神に祈り、又其心と精心とを開て神の智慧と愛とより發する光明、温熱を受け納れざるべからず、故にアウゴステンは云へり「祈禱の念を以て叩くの智能にして、門戸を破りて窮入するの智能にあらず」と、然れとも未た此兩者を以て充分なりとなす可からず、彼は親しく日常の行爲、艱難の間に身を處し、以て信仰を試驗、練磨するとを爲さゝるべからず、吾人は生活なる學校に入りて教育を受くる者なり、即ち吾人が神に於ける信仰及ひ神と人とに對する愛を以て、心内及ひ外界の惡の權力に抗敵するが如き、吾人が其實在の最高理想に達せんと務むるが如き、又世界の中に基督の王國及ひ眞義若くは其恩寵を盛にし、且つ之を擴充せんとして全幅の氣力を發揮するが如きは皆是れなりとす、斯くて虛僞の信仰は全く其不完全なるとを暴露し、眞誠なる信仰は愈堅確に赴き、以て眞理の新生面を開き、新適用を示すなり、

バンヤンは靈的眞理を組成、消化せしめんとて自己の心理に興起せし紛爭を描出して躍出たり、彼は福音の一約束に關して言ふて曰く、若し余の生涯中「サタン」と余

と、神の或語に關して爭ふとありたりとせば、則ち此基督の「善美なる」語に關して然りしなり、而して此爭鬪に在て、彼れは一端に在り、余は他の端に居れり、吾儕は實に目醒しき働きを爲したりき、余は言ふ、吾儕の斯く激しく爭鬪せし所のものは、約翰傳に於ける已上の語に關してなりき、彼れは率けり、而して余も亦率けり、然れども神は讃頌す可きかな、余は彼れに捷ちて、非常の愉悅を得たり」と、氏又他の所に述へて曰く、「嗚呼余を譴責、叱咤する所の聖書の語は、其片言、隻句も尙ほ能く余を憂愁、畏怖せしむるに足り、其勢の猛きこと、矯々たる四方の貔貅の當り難きよりも尙烈し」と、又曰く、「此時余は神の嗣業たる此等の語の中に、余が此世に生存する間、人に語り盡す能はざるべきほど多く遠大の意義あるとを悟れり」と、他の處に在ては、氏又曰く、「余は靜座して未た二三分時ならざるに、無數の天群なる語余の上に降下し來るを視たり、之と同時に希伯來書第十二章なる「シオン」の山（譯者云ふ廿二節）は余が眼前に來りたり、此時余は歡喜、雀躍して余が妻に語りて曰く、嗚呼今余は之を知れり」と、其後多日の間は、是れ實に余が爲に至福なる聖經なりし、而して此一句に由て主は漸次に余を指導し、彼より此に進み、斯の如くにして其進歩の一段毎に驚異すべき榮光を余に示し玉へり、是等の語は爾後屢々余が靈魂の爲めに至大の慰籍となりたり」と、斯の如く神の語が靈魂の需急に應じたるときは、則ち其中に含有せられたる神意を顯はし、而して此神意たる宇宙の本性より見るとき、其中に棲息すべき樣に造られたる人類の靈魂の需急に適合する永遠の眞理苦くは實躰たることを示す、即ち神の語は人の感情、意思に對する語となり、人に對する生命力となるなり、吾人世上の人々の有樣を通觀するに、道義上の熱心を有せる生活を爲す所の人は、必す貴重なる眞理の寶庫を其胸中に藏す、蓋し此寶庫たる、彼等が生涯の中種々の危急に遭達するとき、恰も天より降る天使の如く、之を扶助、介抱するものなりとす、即ち詩篇の如き、福音書中の一節の如き、詩歌の一句の如き是れなり、明瞭に彙別して、煩雜の累を省きたる心理說の如き、金言の如き、物性學の遠大なる原理の如き、四通八達せる對比の如き是れなり、人生の遭遇中忽然閃きて人の心奥に顯はれ、爾來永く窓戸の如く心理に遺り、以て不可視界に向て開放せられ、之を通して永遠なる榮光の光明赫々として流入する所の某の眞理の如きも亦是れなり、

若し人斯の如くにして其自己の實在と發達の中に神に關する知識を組織消化し

て進むときは、則ち單に此消化せられたる眞理を了解し、且つ其眞理が生命に對して重要の關係を有し、及び人の關係を有する具躰的實躰を表發するに於て緊要なるとを知るのみならず、常に神の啓示を受けて以て神を知る可き新能力を得るなり、是れ實に「吾人は吾人の地位だけの事を知るものなり」と云へる古の格言に適合せる者なりとす、吾人は眞理を消化し、眞理によりて生活し、神の象に益々近づく丈け、益々深遠なる神の啓示を受け、而して神に關して、新にして且つ一層富饒なる知識を得るの能力を有す、故に人の靈能にして一度醒覺せられて、以て正當の方角に向ふときは、則ち絶へす遠大にして富饒なる知識に進み、充分の意義に於て「神を視る」と云ふとを益々愈々現實するに近くへきなり、

是故に人、神の靈の勢力の刺衝を受けて神に還り、以て神と人とに對して愛の新しき生活を初むるときは、則ち其愛は新知識の本源と爲りて、其人の爲めに一層偉大なる神の象を開展す可し、何となれば神は即ち愛なればなり、斯く如く自ら愛の眞味を解し得たるときは、則ち パウロ の證明せし如く、永遠に亘りて人間の知識に超脱せる神の愛の高さ、深さ、廣さ、長さを知り、又神に滿てるものを以て滿たさるゝを

を得るなり、是に於てか、人は自己と自己の生活とを、神及ひ神の律法と相調和せしむるとを得可し、而して其人は己の信頼と奉事の無上目的者として神を撰ひ、神の人を愛するか如く、己も亦他を愛し、其品性を擧げて神の品性と調和せしめ、其活動を擧けて神の活動の線路と契合せしめ、神の企圖と揆を同ふして、虚僞、不義及ひ私慾に反し、以て眞、義及ひ善の爲めに神と偕に立ち、神の王國に屬して「神と共に働き」、以て其國の利益を昇進せしむ、人は神と親密なる有樣にて生涯を送り、日々神と交通し、又神の恩惠を受け、其靈の宿在を得て以て神と相知るに至る、左れば此境に達するときは、則ち自ら靈を以て視るべき事物を知り、其愛心を以て神を知る、其知るや、愛なき單純の知識の決して能はざるが如く奥妙的に之れを知るなり、蓋し愛は人の心眼を開て神の衷心を視せしむ、

然るに懐疑論者は之に反對して曰く、神に對する愛は是れ眞理の發見を妨碍する害物なり、世の攻究者たる者、若し果して眞理なる眞理の討究者たるとを欲せは、則ち一切從來の感情の外に出でゝ、全く無頓着なる有樣を以て、獨り知識の光明に依頼して以て講究する所あらさるべからさるなりと、(有神論哲學的基礎三八頁至四

三頁)、固より眞理の未た知られさる間は、之を研究する上に於て公平無私ならざるべからず、而して眞理の一度發見せられし後も、人の心意は常に其有限なるとを意識し、自ら之を開放して以て新知識を得んとを望まざるべからず、然れとも眞理の既に發見せられたる後に是を愛するとは、是れ其人が之を悅ひ、行爲の規矩として之を信奉すと云ふとを含む者にあらずや、然るに今此反對論は此事實を排斥して、眞理の知られたる後に在ても、其以前と同く依然として常に無頓着ならんとを主張し、而して眞理を愛すると云ふとは、之に對して無頓着なるとなりと信するものなり、左れば此論たる、人は決して眞理を知ると能はずと預斷する者なり、即ち信仰なる者は其何物たるを問はず、毫も憑據力を有すると能はさる者にして、神の存在の信仰も、愛の律法及ひ道義的區別の實在の信仰も、若くは自己の存在及外界の實在に關する信仰も、皆虛妄、無根底の者に過きずと預斷するものなりとす、夫れ此の如き反對說を基礎として立つる所の人々は、論理上普般懷疑者なり、其如何なる信仰を世に來す可きやに關して冷然無頓着に、以て「來る可き未來を見んとを蹺望せる者なり」、彼等は無頓着なり、何となれば一切の信仰は其心髓に於て一樣に不確實なればなり、是れ實に知識を得るの絕望の上に立つ所の無頓着にして、勢ひ左の如き結論に達せさるを得す、曰く、若し人にして神に關して或る信仰を有するときは、則ち其人をして神學を研究するの資格なき者たらしむるなり、曰く、若し人にして基督敎徒の生活に於て非常に純潔に、敬虔に、而して其神と人とに對する愛に於て非常に深大なるときは、則ち其人は神に關する眞知識を得るに於て不的當中の不的當なる者なりと、然れとも此論は唯獨り神に關する知識にのみ適用す可き者にあらずして、苟くも一の問題に於て確定せる信仰、例へば地球は其軸を中心として廻轉すると云ふが如き信仰も、此信仰を有せる所の人をして、此問題に就て一層の研究を遂くるに公平なることを得ざらしめ、隨て進んて新知識を得しむること能はざるべし、然りと雖とも人類は受動的に他に待つよう作られたる者にあらずして、進取する樣に造られたる者なり、隨て絕望的懷疑の爲めに世に生れたるに非すして、有爲なる信仰の爲に生存する者なり、是を以て人の知識と其感情とを離分することとは到底出來ざることなり、若し强て之れを離分するが如きことあるときは、則ち其知識は必す欠乏的の者となる可く、而して實體の眞知識たること能はざる

なり、元來知識なる者は人生日常の行爲に關係を有するものなり、若し其れにして此實際的關係より分別せらるゝときは、欠乏的にして亦誤謬的の者とならざるを得ず、今夫れ知識中に在て最も緊要なる部分は、有智的實在者に關する吾人の智識なり、然り而して此内に於て最も緊要の部分は、此有智者が意志の自由、道義的責任、及ひ道義的關係を有することの智識なり、其行爲の源泉と動機とに關する知識なり、其成就せんと欲する目的及其福祉を決定するの原理に關する知識なり、而して此知識を得んには、同一の自由を享有し、同一の道義寰内に活動し、而して經驗上同一の道義法の下に、同一の責任と動機を知れるの人のみ之を能くす可し、而して知識は實際上人生の行爲に關係する者なるが故に、此關係すると云ふ一個の事實は、則ち人の知る可き事實の緊要部分にして、又眞理の證據を檢するに於て人の考察す可き重要實事なりとす、左れば眞理、正義及ひ神と最も同情を有するの人は、則ち最も克く人類の歷史を曉會するに適當せる者なり、何となれば、人類の歷史なる者は、其人間思想の歷史たると同じく、亦人間の感情、撰擇、目的及ひ品性の歷史なればなり、壓制者と被壓者との爭鬪、正と不正との爭鬪、私慾と愛との爭鬪、及高遠の理想を現實せんが爲め百艱萬難を嘗めて勇往する進歩の歷史なればなり、此かる問題を決するに、一切の感情を剝奪せられ、何れの原理、原則にも無頓着なる乾燥、無味の智力を以てせんと欲す、嗚呼其れ出來べき限りのことならんや、此かる有樣を以て、眞理を研究するに最も必要なる者と爲すか如きは、是れ第だに道義上不正なるのみならず、亦哲理上虛僞なる者なり、神に對する愛は是れ神に關して最上至高の知識を得る爲めに必ず欠く可からざる者なり、蓋し神は愛なり、愛は宇宙を支持、整理し、及ひ指導する所の勢力を運轉し、以て其存在の目的を指定するものなり、而して神の愛なるとは、是れ人間が知ることを得る至大至要の眞理なり、人若し十分之を知らんと欲せば、只自ら神と同樣に他を愛するに在るのみ、神と人とに對するの愛を自己の勢力の源泉となし、自己の全活力を鼓舞し、指導し、及ひ美成する所の勢力と爲すにあるのみ、「凡そ愛ある者は神に由て生れ且つ神を識るなり愛なき者は神を知らず神は即ち愛なればなり、」

(五)以上歸着せし所の論點よりして、吾人は靈の證と云ふ基督教の教理の能く道理に適合せることを見る、蓋此教理たる、夫の宗教改革者等が特に重きを置きたる所の

者なり、彼等論して曰く、人の神の實在と其基督に於ける啓示とを信ずるに至るは、是れ人の精神に神の靈の證據の印象せらるるに由る、曰く、敬虔の心を以て神を求むる人が聖書を神の啓示なりと知るは、是れ基督教の聖書中なる神の眞理に對して神の靈の證あるに由ると、抑も靈の證と云へる基督教の教理は、是れ單に一切の宗教中に包含せる一眞理を一層明白に説明したる者に過きず、夫れ人は單に思考のみに頼て神に關する知識を得ると能はず、之と同樣に可覺物及有心的實在者に關する知識も、又思考のみにて得へからざるは吾人の既に看る所なり、即ち最初其物が人の上に作用を及ぼして、以て其意識に表現するにあらずんば、則ち人は決して思想のみにて之か知識に造ると能はさるなり、此の如く、神は人に自己を啓示し、其前后を圍繞し、以て己の手を人の上に按く、而して人の靈魂は能く神の此作用に對應して、以て其臨在せる神を認識す、蓋し此一般の事實は特に靈の證なる基督教の教理中に唱道せらるゝ者なりとす、此説や、宗教改革の當時に於ては、基督教の辨護論及ひ教理説の上に非常の勢力を有したれとも、近世復た昔日の如く旺盛なると能はざるものゝ如し、然りと雖ども此理たる、有神説及ひ基督教の辨護に於ても、

又は其教理の敷衍に於ても、兩なから正確なる思考の根本として存せさるべからざる眞理なり、ヘーゲルの云へるか如く、有限なる者は外部の媒介を通して吾人の上に活動すれども、靈に關して證據を爲す者は是れ靈なり、靈的信仰の眞の基礎は是れ靈の證にして、靈の證は自ら是れ靈的に活動して、以て靈を醒覺するなり、然れども神の存在を證する者は、單に人間の靈魂而已ならずして、神の靈も亦人間の靈と偕に其自己の存在に就て證明するなり、

第七章

神に關する知識に對して、實驗的、歷史的、及合理的の總合、

神は一箇人の意識に自己を啓示す、故に經驗によりて知らる、

此場合に在ては、神が因て以て自己を啓示する結果の、意識の中に在て主觀的たると、宛も外界が因て以て自己を人の意識に啓示する所の感官上の感覺と同一なりとす、加之、吾人の既に看得せる如く、神は客觀的即外部の結果に因り、萬有の本性と進行とに因り、及び人類の本性と歷史とに因り、而して最后に神が依て以て自己に世界を護和し、以て義と惠の國を建設する基督、及び人の心に宿る所の基督の靈に因て自己を啓示するなり、

此萬有、人類、及び基督に於ける神の客觀的啓示をば、余は稱して公然的若くは歷史的啓示と云ふ、是れ本書の後篇に於ける攻究の問題となるべき者なり、然りと雖とも先つ意識に於ける啓示と之との關係をは、今茲に一層充分に講明し置かざる可からず、

夫れ此公然的即歷史的啓示は、意識に於ける神の啓示、及び之より生す可き自然的信仰を檢討、訂正し、而して其啓示、信仰を眞理たる限りは、之を確實、擴張す、是れ即ち理性に存する眞理、律法、理想及目的の指導を以て、反省的思想の作用により爲さるゝ所なり、此の如くにして、一切の源泉より神に關して知られ得べき一切の事は認知せられ、確定せられ、及び區別せられ、且つ合一調和して以て合理的系統を成すとを發見す、

扨人間の理性は正に右の處に至りて其作用を爲し、以て神に關する知識に對して一箇の元素を加ふるなり、此事に關して許多の神學者は屢々不道理なる狐疑を抱けり、然れども若し理性を使用するにあらずんば、何を以て信仰を合理的なりと確知するとを得ん、何となれは夫の自然的宗教心は神の歷史的啓示の明光によりては消極的に檢討、確定せらるればなり、即ち理性に存する普般原理及び律法、若くは宇宙の事實と理法とに反對する所の者は神の啓示と稱するに足らざればなり、且つ理性によりて自然的宗教心は積極的に檢討、確定せらる、即ち其信仰が理性の原

理と理法、及び宇宙の本質と其實際の事實及び理法と相調和するとを示し、又理性中の理想と目的とを現實し、及び人間の靈性的需用を滿足せしむる爲に其信仰の必至なるとを示して、以て之を檢討、確定するなり、加之、基督教信者は聖書に記錄せる如く、基督に於ける啓示と其信仰との相契合せるを確知するとに由て、之を檢討するとを得べし、

然れども此く論すれはとて、吾人は人間の理性を以て神より獨立して自ら充全なる者なりと爲せしにあらず、反て理性の正則なる狀態及作用に於ては、自己が絕對の理性たる神に屬し、又自己に付て與へ玉ふ神の啓示を受くべきものとして之に屬從するとを知れるものと爲せしのみ、此の如く形而下學に於ても、人間の理性は決して心に對する有形世界の作用より全然分別、孤立して、以て自ら有形世界を知るに充分なる者なりと主張するとを爲さず、之に反して理性なる者は、外界に關する人の知識は覺官を通して來れる世界の啓示に依て生する者なるとを敎へ、此く依賴して成れる外界の知識は、眞正にして合理的なる知識たるとを吾人に示すなり、

是故に神に關する知識には、實に三要素あるものとす、吾人は之を稱して經驗的、歷史的、及び合理的若くは理想的と云ふ、

神學上の知識とは、即ち思想の中に此等の三要素を統一、總合し、以て之を理會するに在るなり、而して歷史的要素は是れ經驗的及合理的要素の總合に對する媒介なりとす、

吾人は此章に在て實に是等三者の總合は、神に關する眞の知識に對して至要至切欠くべからざるものなるを示し、又世に迷妄、誤謬の見多くして、或は邪路に入り、或は退步するとあるにも拘はらず、神學の眞の進步は、常に此總合を完成するの傾向を有して、年代の經過と共に、益々神に關する人の知識を檢討、確定し、且つ饒富ならしむるとを示めし、遂に此の事實を認識するは、是れ今日に於ける神學思想の運動と眞意とを正當に曉會する爲に必要なる者なるとを示さんとす、

此總合の必要なるとは、則ち事實に徵して明白なる事なり、蓋し是等三要素の一若くは二のみを承認して、其他を承認せざるの思想は、必ず悲慘なる誤謬に陷れはな

若し三要素の一なる經驗的信仰のみを執て之を守持せんか、則ち之が結果は神秘主義となるべし、合理的若くは理想的信仰のみを執て之を守持せんか、則ち之が第一の結果は獨斷主義たる可く、而して最後の結果は唯理主義に陷落す可し、以上二者の場合に於ては、神の啓示の記錄たる聖書は、背後に膣若として遂に廢棄せらるゝに至らん、又獨り歷史上の信仰のみを執りて之を守るときは、之が結果は單に不靈にして乾燥なる聖書の批評となり、又人類學的若くは古物學的攻究となり畢らんのみ、

(二)神秘主義とは靈の上に於ける神の臨在及び作用に關せる直接の經驗、若くは意識の中に自然に發生するものにして、反省的思想に因て認知、判別及び組成せられず、隨て知識の正當なる檢討物若くは正當なる標準を以て檢討、確定せられざるものを云ふ、彼の印度の「ヨガ」の如きは則ち之が的例にして、世人の屢々唱道する所に依れば、印度は實に此主義の產土なりと云ふ、然れども此主義は是れ一切高等の宗教中に發見せらるべく、而して基督教の歷史の上にも間々之が出現をなしたるとありたり、

神秘主義に在て、人の意識內に神の啓示あるを信し、又神と直接の交通を爲すとを信するは眞理に合する所にして、其信仰も亦强大なりと雖ども、其弱點は此雲霧の如き漠然たる意識、此明解せられざる經驗を其儘に差し置きて、理性の明光に之を照さず、思想に於て之が眞實の意義を考明せず、過去に於ける基督教的の實驗及び知識と之を比較するとを爲さず、又萬有及び人類の本性若くは歷史、及び聖書に記錄せる如き、基督に於ける神の啓示を以て、之を檢討するとをせざるに在るなり、斯の如く片面的なるが故に、此主義は誤謬に陷落し、又危險なる實際上の傾向を有し、純然たる主觀主義となり、又間々腐壞して惑溺に入る、而して神秘教者と雖も思考を廢するとを能はずして、禮拜の或る形式と、感情に對する或る思想とを有せざる可らず、故に或教師の指導せる教派に合從するか、若くはギヨン夫人の如く、靈的指導者の指揮を受るか、又不可誤なる教會の權力を承認するか、若くはベーメ、エカルト及び其他の人々の如く、詭怪なる神智說を創定して、以て時に凡神說に瀕するものあるに至る、且つ此主義は時に或はギヨン夫人の讃美歌、及び其他或る人の讃美歌及び敬虔的文學の愛に關する語句の如く、感覺主義に傾向するとあるを免かれ

ざるなり、

夫れ斯の如く片面的なるが故に、神秘主義は單に感情の宗敎となりて、寂靜敎（クイエチズム）に陷落し、默想と祈禱のみに身を委し、荒野或は修道院に退隱して、日夜靜坐するとにのみ心力を消費し、現世に於て正直なる生路を步行するよう人を補導するよりも、寧ろ來世に於ける救拯の保證を喜び、其道、內觀を主として、自己一身の平和と喜樂を得るとにのみ全心全力を用ひ、入定を修練して、之を生存至高の成果となす、彼の印度のヨーギ派の爲すが如く、兀然端坐、默想に餘念なく、一定せる眼睛を以て絕へず內觀を行ふときは、其人は自己の感情を神の啓示と認め、之を「內光」とし、以て之を受納し、之をして聖書、理性及び常識の地位を占領せしめ、而して或る偶然にして解說すべからざる衝動若くは情緖起るときは、之を神の感化なりと思惟して、自己の規矩と爲し、以て之に隨從するなり、是れ神秘主義の特性なるが、此特性は現時の宗敎的生活中に種々の變形を爲して存在す、一婦人あり、常に自ら思へらく、吾能く「高遠なる基督敎的生活」に造詣するとを得たりと、一日使介あり、此婦人の門を叩て、其唯た一人の同胞にして隣村に住せる者、只今急病に罹れり、請ふ迅速に來りて看護せよと告げて去る、然るに婦人往かず、一二使を經て使介又來る告げて曰く、其病危篤なり、急に來りて之を見よと、婦人又往かず、少時にして報する者あり曰く、病人既に死せり、埋葬の期は某日某時に在りと、然るに婦人は頑として聽かざる者の如く、葬式にも列するとなし、何となれは此婦人は當時毫も心內の衝動を感せざりしが故に、之を爲す爲に神の召を被りしとあらずと自ら確信したれはなり、斯く此婦人は惑溺に於て通例あるが如く、自己を人間以上の者なりと思考したるが爲めに、忽ち人間外のものと成り果てたるなり、然り而して往々此かる惑溺を以て、神が人に及ぼす作用に由て人に自己を啓示し、人は經驗若くは意識に於て之を知るてふ眞理の代表として揭章し、且つ此眞理の時に或は基督敎の有神論者に排斥せらるゝとあり、何となれは是輩は、此眞理を彼の惑溺と混視すればなり、然れども吾人少しく考慮を費やすときは、此眞理を否定するは、凡ての宗敎に在て缺くべからざる神と人との交通なる根本の事實を否定する者にして、又基督敎の至要の眞理たる、人心に於ける神靈の感化を否定する者たるとを知るべし、

此外神秘主義は、又一層暗黑なる形躰に陷りて、畏懼の宗敎となるとあり、即ち神は

自ら神と直接の交通をなして存在すと信仰せる人々をして、畏伏慴縮せしむる程に偉大にして威嚴ある者なりとの信仰是れなり、博士ベロース曰く、神の受造物は「其面前の榮光に對して畏懼、縮退する者なり」と、特に斯の如き畏懼、縮退は人の神に對して罪惡を犯せりと自ら意識せしときに顯はるゝの結果なり、蓋し「罪惡に關するの意識は、其性質決して快活なる者に非らずして、却て之が反對なる者なり、是れ失敗、無價値の意識にして、人の自重、自尊の精神を剝奪して、之が代りに自非自責の心を起さしむる者なり、此意識たる、神人兩者の是認を得るの望なきに至らしむるものにして、畏怖を以て人を壓し、失望を以て人を挫き、人生をして來世に在ては恐怖あらしめ、現世に在りては失望あらしめ、過去に在りては憂悶あらしむ、斯くて全躰の意識は凝集して、日々憂愁を漏し出す一の叫聲とはなるなり、曰く『吾人は渾て墓なき骸なり』と、夫れ一切の宗敎は必す罪惡の感を深からしめて、神と、見へざるの世界と、賞罰とを靈魂に密接せしむ、而して之が結果として第一に顯はるゝ者は、畏伏なり、蓋し見るべからずして奧妙に、且つ處として存在せざるとなく、如何に狡猾なる者も欺罔すること能はず、如何なる技術を施すも避くること能はず、如何なる速度を以てするも、逃遁すること能はず、如何なる威力も抗敵すること能はざる者の臨存すると云は、實に大に人の靈魂を畏縮せしむるものにして、又其實在者が日となく夜となく常に罪惡を糾察しつゝありとの事實は、頗る靈魂を畏怖せしむる者なり、此の如くにして來世の畏怖の中に、現世の一切の利害を埋沒し去る所の畏怖の宗敎は現實せらるゝなり、神の前に於て、我れ果して何者ぞや、永劫と比較せば、時は是れ果して何者ぞや、見へざる世界に存する永遠の事物と比較し來る時は、此浮沈定まりなき現世一切の利害は果して何者ぞや、一切衆生の犯したる無上、普遍の律法と、恐る可くして且つ免るべからざるの刑罰とは、鬼氣蒼涼人を襲ひ、世を覆ふ、其陰影の下に在ては、快樂は塵の如く、浮世の利害は見蟻に似たり、人事世務は夢幻となり、此世の利慾は『他の世の利慾』に驅逐せられ、嬉々たる世俗の愉樂は、本分の重荷と神『譴』の畏怖との驅逐する所となり、而して宗敎は其全力を擧けて、神の譴怒を解かん爲に供物を献し、又痛悔をなすとをのみ是れ務む、若し人此の如き鬱悒と畏怖の下に在るとき、一旦忽然として其心中に興起せる强大の宗敎的衝動を以て、神より直接に受けたる啓導なりと思惟するときは、則ち激烈なる惑溺の門戸茲に開け

て、其熱心の上騰するや、人身を犧牲として奉獻するが如き無法を爲すに至る、其意に曰く、神と比較するときは人類は是れ果して何者ぞや、神の王國の利益と相比較するときは則ち人類の利益は果して何者ぞやと、凡て此の如き人は異說を容るゝと能はざれは、若し自ら權力を有する者なるときは、則ち之を利用して以て異端者を死に處し、若くは戰爭を起し、兵力に依賴して自己の信する所に世人を風靡せしむるもあるべし、而して神は最も貴重なる物を需る者なりとせは、其篤信家は安んぞ人身の犧牲を獻けて以て自己が推察する所の神命に服從せざるを得ん、何んぞ父たる者が自己の兒子を供獻するを怪まん、何んぞ惑溺者が其神の企圖を妨碍する者なりと信認せし人物を屠殺するとを神より命せられたりと自信するあらを怪まん、眞正なる宗敎と此の如き惑溺とを同一視するに由て、フオイエルバツハは神に人を供獻するとは是れ宗敎の必要なりと主張するに至れり、其語に曰く、「斯の如くにして道義的感情は、宗敎に於ては毀壞せられたり、故に人は人を犧牲として神に獻ず、蓋し此殘忍なる人身犧牲は宗敎の至深、至奧なる秘訣を表白する一種の粗略なる物象に外ならず」と、

以上の如くなるを以て、人は神の啓示を受け、此啓示を受くるによりて實驗上神を知り、而して此くして發生せる信仰は檢討せられ、確定せられ、思想の中に釋定せられ、組織せらると云ふ眞理と、夫の全能者の啓導として單に感情にのみ依據し、而して此感情の理性を以て解釋、說明すべからざるは、其感情の神聖なる確證なりと思惟する神秘主義とは、互に區別せざるべからざるものなりとす、蓋し神秘主義に基けるの信仰は、常に一私人の主觀中に閉鎖せられ居らざるべからず、是を以て此主義に於ては信者の數と同數なる各別の宗敎存在するを得べき道理なり、是れ實に危險なる實際的傾向を顯はすものにして、之か爲に諸種の誤謬を生し、宗敎に關して恐るべき誤解、迷說を世に出し、之を以て宗敎の眞面目と思惟する人々の間に行はるゝ所の反對と不信仰を起さしむるに至る、ヘーゲルの言眞に當れり、彼は云ふ、若し宗敎と神に於ける信仰とにして、單に感情にのみ根底する者ならしめば、則ち神に關する知識は決して得べからざる者なり、而して唯物說及び其他なる諸種の無神說こそ獨り之が結果として顯はるゝ者なれと、此言や決して唯た宗敎にのみ特別に適用すべき者に非らず、人生の如何なる寰域に在りても、若し人にして感情

の衝動にのみ隨ひ、而して人智の解說する能はざる所なるが故にとて、殊更其感情を確實、不可誤の者なりと思惟するが如きとあらは、則ち之が結果は信仰上に取りては恐る可きの誤謬となり、實際上に取りては尙ほ一層恐るべきの誤謬となるべし、然るに自生的宗敎信仰は實に人類の靈的本性の全躰に根基を定め、且つ眞實の知識として檢討、確定さるゝ者なり、而して此の如くなるが故に、不善なる實際的の傾向は抑制せられ、誤謬の點は訂正せられ、不信仰の反對說は一々答解せらるゝものなりとす、されは神の臨存と啓示、及び神人間の交通は、人を畏怖、慫慂せしむるが如きと決して之あるなく、却て之に因て人は神の眞の偉大の顯はるゝを見る、是等のものは人をして神と相交通せしめて、之を愛の生活の境に導き、神によりて以て人の實在に存する一切至高の能事を現實せしむ、是に至りては吾人實に最早左の如く歌ふを須ひざるなり、

Great God, how infinite, art thou, What worthless worms are we.

(大なる神、爾はいかに無限なるぞよ、吾儕は誠に取にも足らぬ蟲類なる哉)、

之に反して吾人は神の偉大なる性質と、神人間の親交とに於て、吾人の取るに足らざる蟲類に非らずして、神性の分享者なるとを發見し、又宗敎は神に人身を献供するとをなすものに非らずして、却て人をして「神性の分享者たらしむる」者なるとを見、又た其唯一の犧牲は即ち神に依賴し、之が感化を被りて剛勁となり、其同胞人類の爲に盡し、以て自己の完全なる發達、化育及び福祉を現實すべき献身的愛心なりとの事實を發見するなり、彼の數世紀間宗敎の畏怖と抑壓的勢焰の盛んに行はれたりと稱する中世紀に在てさへも、吾人は其反對の結果の證據を發見す、但し斯くも旺盛なる誤謬の中に在るとなれは、其充分の勢力を逞ふすると能はざりしには相違なし、ダブリユ、エス、リリイ氏曰く、「最も巖峻なる中世の詩歌中を通貫して隱顯せる優和の氣象と、古代詩人の手に成りし最も放縱なる歌賦中に流通せる悲悽の深情との間に顯はれたる反對ほど、世に較著なる者はあらざるべし」と、

(二)經驗的及び歷史的信仰より、神に關する知識に於ける理想的若くは知力的要素を全く分離するときは、則ち獨斷主義に陷落して、以て遂には唯理論に至る、抑も組織神學とは、其如何なる方法によりて啓示せられたるを問はず、理性に照らして、其思想を神及神人の關係の上に專らにし、斯くて出來べきだけ神に關する明

晰、確定及び組織したる知識に到達せんとを務むる、智力の正當なる作用より生ずるところの產生物を云ふ、然れども是等の敎理一度形成せられて宣言せらるゝや、愈々之を獨斷敎と爲し、世人をして其眞僞を問はず、一個の信憑として之を受けしめんとするの傾向あるは、免るべからざるものゝ如く、而して智力的要素次第に首要の地位を占得するに至り、以て神の啓示及び一私人の經驗、若くは人類の歷史に於て顯はれたる神の靈の證據と相分離して、自ら孤立するの端を開くに至る、獨斷敎の正當の究極は則ち唯理說なり、而して唯理說は神學に於て種々の段階を通過し、諸種の形躰を取りて顯出したり、然れとも其種々の面目を有するに關はらず、其中を一貫する所の敎理を問へは、人間の理性は孤獨にして一切宗敎上の眞理を解明し、之に由りて宗敎的生活を化育、指定するに充分なる者なりと云ふに歸着するなり、是を以て神秘說が感情を以て基礎となし、自ら經驗より生ずる自生的信仰內に割據して、其他を知らざるに反して、唯理說は純粹の思想より一切宗敎的知識を發生すべきものなりとして、神秘說と同しく一方に偏して、知力的即理想的なる要素のみを以て、全躰と思惟する者なり、日耳曼に於ける該主義當初の形躰に在

ては、基督敎の聖書中なる奇蹟を排斥して、歷史的要素のみを守持したりしが、後代の說に至りては歷史的要素をも、單に道義的若くは宗敎的敎誨を施す器械となし、若し其說話が敎ゆる思辨的眞理と道義的敎訓及び動機にして確定されなば、則ち其事實の眞僞は之を不問に措て可なりと思惟するに至れり、ストラウスは其第一著即耶蘇傳に於て、彼が生涯の物語中に敎へたる眞理は、よし此物語其物は歷史上の眞理なき神仙傳に過ぎずとも、其價値を失はざる可きを論示したり、今其言の二三を援引すれは曰く、「蓋し吾人敎會が基督に附する賓位（プレザクート）に對すべき主位（サブゼクト）として、一の人間の代りに一の觀念を用うるとをせば、是れ基督學の全躰を開展すべき鑰を有するものなり、但し此觀念たる、是れ實際に存在する所の者にして、單に心意にのみ存在するカントの觀念の如きに非らざるなり、……而して夫の神人兩性合一の觀念の如きも、若し余此觀念の現實として人類全躰を擧くるときは、余が其現實として特に一人を扱擢するよりも、適かに高遠なる意義に於て、眞實の觀念なるに非らずや」と、其歸着する所、終に唯理論者に對しては聖經は既に早や愛の神の啓示に非らず、單に古代文學の遺物にして、其中僅かに眞理と優美なる情操とを包

含する神仙傳的若くは小說的記錄たるに外ならざるに至る、而して彼等が漸次其議論の步武を進むるに隨て、智力的即理想的要素は該論の全組織を充實するに至り、神學忽ち變して純然たる哲學となる、而して此哲學に於てはたゞ主觀的思想のみを以て宇宙の問題を解說するとを勉むるが故に、其注意の目的物は具躰的實事にあらずして、心理的抽象たるに至り、思想は宇宙の終局的實躰なりと主張せられ、神を變して無若くは思想中の零と同一なる純粹の實在者、若くは純粹の活動、若くは世界の秩序と爲すに至り、而して宇宙の進化の如きも、論理學の運用と同一物と見做さるゝに至るべし、

經驗的及歴史的より分離して、理想的及び智能的に割據する神學の、右の傾向と獨斷主義を經過して唯理主義に到達する此遷移とは、「プロテスタン」主義の歴史上に其實例を見るべきなり、

抑も此歴史の第二期に於ては、神學上の思想は具躰より抽象に傾き、人類間に臨在、活現するを經驗上より知れる活ける神に就ての活潑なる思想よりして、神に關せる敎義の攷究に傾き、靈性上の達觀と能力とを人に與ふる者と思惟せられたる「インスピレーション」に關する思想よりして、字義的精細（ヴァーベル、アッキュラシィ）を確保するものなりとの思想に傾き、宗敎改革者輩の思想を貫通、統御せし神靈の臨在と證徵とに關する思想よりして、聖書の文字は神靈の啓導を受けたるものなるが故に、文字自身が聖靈の證なりとの思想に傾き、甚しきは少ポックストルフ及び其他の人々及び「フォルミユラ、コンセンサス、ヘルベチカ」と稱する信經が敎ゆる如く、希伯來語の母音の符點までも、爾かく思惟せらるゝに至れり、されば敎會の思想と活動は敎義を形成、組織し、信條を弘布する事業にのみ傾住し、知能と理想は經驗と歴史を離れて獨立し、敎會は敎義の形を異にするの故を以て數派に分裂したり、是に於てか益々保羅の語の確實なるを覺ゆ、曰「儀文は殺し靈は活す」と、蓋し此傾向の結果は今日に至るも尙ほ未だ全く除却せず、一千八百八十三年米國マサチユセッツ州の牧師會にて朗讀し、其後世に刊行したりし「所謂神學の進步」と題する論文に於て、記者言をなして曰く、「普通の名辭を棄廢若しくは改造すべき神學的敎義に關する或る論說は、是れ取も直さず敎義其物を實際に棄却若くは改造するとなり、思ふに數學を除くの外如何なる學術も、語は即ち物となりと云へるとに就て神學の如く眞實なる者はなかるべし」

と、然れとも、言語を經由して事物に至る神學的思想の運動は、よし吾人が事物に到達せし時に、或は時として其言語を變換するの必要を發見するとありと雖とも、然れとも是れ實に健全なる運動たるなり、

此獨斷主義に至るの經路は則ち唯理主義に達するの道を備ふるものなり、レッシング敎へて云ふ、聖經中に顯現せる一切の眞理は、若し人類が充分の時間を賦與せられたるときは、則ち人間思想の進歩するに隨て、遂に人の之を發見するとある可き筈なり、神は啓示を與へて以て人の眞理を發見する上に佑助をなし、又之が進歩を促したるなりと、畢竟斯の如き敎誨の成立つ所以を尋ぬるに、神學者が活ける神及び歷史的救拯の攷究に代ふるに、人類が其思想を以て發見し得べき眞理と敎義とを以てしたるに由らずんばあらず、敎會にして宇宙及び人類界に於ける歷史的作用、特に基督によりて罪惡より人類を救拯する歷史的作用、及び此世界に在て基督の統御の下に、聖靈の權力を以て義と惠の王國及ひ愛の支配を設定、組成する一切の歷史的進路中に、自己を啓示する活ける神を確知するときは、則ち上に述へたるレッシングの說の如きは、決して世に行はるゝと能はざるべし、人は思想に頼りて眞理を確定、鮮明及び組織するとを得べしと雖とも、思考して決して神の歷史的作用を考へ出すと能はざるなり、夫れ上の如き順序にて、日耳曼に在ては獨斷說より漸次に變化して遂に唯理主義の產出するとなるに至り、而して此唯理說は恰も連日、彌久の大旱の如く、神學思想の靈生は之が爲に全然枯死するに至れり、

(三)宗敎の歷史的要素のみを取りて之を經驗より離し、又神靈の證なるものを一切認識せざるときは、則ち諸の宗敎及び人間に存する諸の聖書の攷究は、是れ單に人類學の一派となり了らんのみ、斯の如く分離して學者風に聖書を攷究するは、單に古物學的講究若くは古代敎書の批評に陷るべきのみ、然り而して斯の如き非宗敎的なる聖書の攷究にして、奇蹟は妄誕なり、聖經中にて神の超物的顯現の記錄なりと稱する一切の部分は是れ皆神仙傳的なる者なりとの自定に基て其論究を始むるは、稀有の事にはあらざるなり、是を以て事實に憑據するとなき放恣の自定に頼り、神的の要素は亂暴にも聖書外に排拒せらるゝに至り、而して斯く排拒したる上は、聖書中には古代の文學と歷史の外は何物をも餘さゞるに至りて、聖書攷究に於ける唯一の興味は、批評學、古物學、及歷史學のみたるに至る可し、此の如くんば則ち

活ける水は乾涸せるものなり、吾人は潰湧する清泉を有せずして、只々井垣と桶とのみを有するものなり、生命の河水を有するとなくして、只々曾て滔々として水流の漲溢したりし河身を有するのみ、然り而して人の批評的思想は唯た乾涸して礫石磊々たるの流路を尋求するの業にのみ汲々たるに止まらん、此の如き學者に對してしは、ファウストが曾て其書生を說訓せし警語を呈すること極めて的切なるが如し、曰く、「羊皮紙果して聖き井にして、之より飲むときは則ち永遠汝が渴を消するとあるか、若し其れにして爾自己の靈魂より迸出し來るに非ずんは、則ち爾は決して消渴劑を得るとなかる可し」と、又シルレルの「ピッコロミニ」(Piccolomini) 中なる少年の語も、亦た同しく能く此の如き人に的中するを覺ゆ、曰く、

The oracle within him, that which lives, He must consult and question-not dead books, Not ordinances, not mold-motted papers.

(彼は其心裡なる活ける託宣に謀り、且つ問ざる可からず、死せる書籍に問ふべからず、誡律に信賴すべからず、反故同樣の敗紙に謀るべからず)、

と、夫れ聖經の學者的批評及び解釋は、是れ素より必要なる者たるに相違なしと雖

とも、必すしも之を神の知識に於ける經驗的及び合理的要素、及び靈魂內なる神靈の證より分離するとを要せざるなり、蓋し敬虔なる學者も不敬なる學者と同一に、矢張り學者たるとを得べし、而して聖經中には、よし如何程鋭敏なる批評的眼光を有するも、單純なる學問のみにては決して見る能はざるの事理存在する者なり、されば若し學者にして其靈的需用を感ずるとあらば、若し又其靈的感性にして醒覺し、其靈的能力にして活動するとあらは、則ち聖書を研究するに隨て神は彼を發見す可く、彼は又神を發見すべし、若し研究者を動すものにして、單に批評的若くは古物學的の興味たるに止まらしめは、則ち其自ら發見する所の者は、批評學と古物學との外に出ざるべきなり、

此に又吾人の注目せざる可からざるの一事あり、即ち此かる批評的若くは古物學的研究をなすに充分の學識を有するものとては、縱し敬神家にせよ、不敬神家にせよ、何れにしても此かるとの專門家に限るとは是なり、而して此かる研究を經てのみ果して獨り聖經中に存在せる一切の事理を發見すべき者たらは、則ち是れ聖書なる者は一般人民の爲に世に存して、彼等が私己の判斷を以て誦讀、解釋せらる可き

者に非らずして、其意義を說明す可き爲に、特に其道に通曉せる人の撰まれたるものと爲さゞるを得さるべし、聖書は是れ大學に於て何を信仰す可きかを知るへき爲に、或る專門家が發布する類書の如き者となり畢らんのみ、ベルシエー氏曾て其說敎の一に於て、佛國に於ける此の如き結果の現狀を說明して曰く、「多數の少年輩は自ら批評學に愬へたるときは、則ち直ちに之を以て自ら一切の事を言ひ盡したりと信仰せり、彼等は曰く、「批評學は此く決定したり」と、而して彼等の斯言を發するは、宛も他の人々が「公會は此く決定したり」と、云ふと同一なる信用と安靜の語調を以て之を云ふなり、彼等は其神に向ひて有する信仰に對して、他人の說を確信しながら、尙ほ自己の判斷を使用しつゝありと思惟するなり」と、

一隅に割據せる歷史的攷究及び批評學に附帶せる他の弊事は、ロイスの記する所に據りて明かなり、而して氏が此論を艸せし以來、幾多歲月の經過は、之に加ふるに新實例を以てしたりき、其語に曰く、「方則の益々、複雜に赴き議論の價値彌々批評家の主觀的見解に左右せらるゝに從ふて、一致は愈々出來得べからざる勢となれり、結果なき臆說の雜草茂生し來て、堅牢なる歷史の地面を蔽覆したるとなれは、吾人は大に力を勞して又之を掃蕩し盡さゞる可からず、懷疑主義は蔓延せり、而して批評學の銳利と濫用とは相密接し來り、爲めに批評の原理は疑訝の霧中に埋沒せらるゝに至れり、而して斯の如き攷究に於て、甲乙双方の論者が相辨論して、而して其論辨の重要にして、而も際限なきに至る所以のものを見るに、歷史的の疑問其物よりも、寧ろ其背面に存在する神學的疑問に在て存すると往々にして之れありたりしは、是れ事實たるなり」と、

之に反して一方には、合理的思想より分離して、歷史的啓示を割據孤立せしめんとする明白の傾向あり、世上の牧師動もすれは則ち曰く、吾輩は基督敎の事實を守持する者にして、此事實を說明、解釋及び表白する事、若くは此事實より推測するとなれば、凡て人間の思想より生出する何等の敎義若くは何等の哲學を守持する者にあらずと、斯の如き人々は神學を却けて、獨り聖書の啓示を有するのみを以て安んせる者なり、然れとも此の如き見解は是れ宗敎上の問題を考察し、若くは神は果して自己に就て如何なるとを聖書の中に啓示せしやと云へる事實を確知する爲めに、其合理的器能を使用するとを禁止して、人になさしめざるものなり、而して又此

見解は、基督教の事實と人類の理性、及び理性の原則に循へる其一切の思考との間に撞着の存すべきことを含蓄するものにして、基督教が人間の理性、思想及び學問の穿鑿探究に逢ふときは、假令敬虔にして謹直なる人之をなすと雖とも、其詮索の鋒に堪へざるものなることを承認し、又基督教の事實及び教理は人の思想の中に曉得せられ、之を組織して以て一個の理會すべく、又道理に合せる教系を成し得べきものにあらずとのことを承認するものなり、然れとも是等の人々、聖書中の語句と異なれる言語を使用し、以て神に關する聖書の啓示なりとして自己の信ずる所を說明するあるは、是れ即ち彼等が自己の神學を吾人に說明しつゝあるものたるに外ならず、然るに彼等は往々己の割據的教義に循從するの門人を得んことを望めるを見る、されば疑問は神學を有せざる宗教と之を有する宗教との間に存するものに非らずして、未熟、狹隘、誤謬、なる神學を有せる宗教と、祈禱的、學者的、熱心的、及び合理的なる、思想を以て聖書より演繹せる神學を有せる宗教との間に存するものなりとす、蓋し基督教的知識に反せる此反對說の結果は、或は魚宗教ともなるべく、或は不信仰ともなるべし、無學、妄想、迷信なる聖書の解釋及び適用ともなるべく、或はノル井ッチの監督が稱して、「或る一定せる教理を無法に輕視する醉酩的感情主義にして、教理の筋骨なき無神經の宗教」と冷評せし所の者ともなるべし而して夫の拘攣的溺信の僞宗教に至るべきの道茲に開く矣、

(四)以上論述し來れる所に由りて之を見るときは、則ち神に關する眞知識は、唯た經驗的、歷史的、及び合理的の總合よりしてのみ得らる可きことを知るべし、

夫の神秘主義が、人は神と直接交通の生活をなし得可きことを主張し、神は人の意識的經驗の中に自己の作用を以て自己を啓示することを承認する所迄は、是れ眞理なりと雖とも、其誤謬は、則ち宗教を以て人間の全靈性に基因する者と信認することをせずして、之が成立を全く感情にのみ制限し、知識と理性の明光に之を照すことなく、只だ此感情の經驗內に宗教的意識を閉鎖するに在て存す、然れとも基督教の聖書は決して斯の如き狹隘主義に向ては、之が保證狀を交付せざるなり、聖書は要求すらく、吾人が神に對して盡す所の奉事は「合理的奉事」たる可し、細言すれは理性に由りて嘉稱せられ、指導せられ、及び純潔にせられたるの奉事たるべしと、此聖書の要求を約言すれは則ち曰く、「爾曹の衷にある望の緣由(ユヘシ)を問ふ人には答を爲さんことを

恒に備へよ」と是なり、預言者に對してさへも聖書は「ヒーズン、インスピレーション」(異敎的啓導)の無差別なる感覺を禁止し、且つ訓へて曰く、「預言者の靈は預言者に制せらる」と、又人が稱して神の託宣なりと云ふものを受くるには、吾人須らく、凡の靈を信ずる勿れ其の靈神より出つるや否やを試むべき」ものなり、而して其理由を問へは、實に「神は亂の神にあらず」てふ意味深き道理あるによるとなりとす、夫れ神の靈は單に感情のみを通して自己を啓示するとを得る者にして、人の理性、常識、反省力、及び既得の知識をして悉く用ふるに地なからしむる者なりと想像するは、無法、顚倒の說なり、加之感情なる者は眞理の終極の試驗石たるとを能はずして、吾人は常に理性の光明に照らして感情を判定し、以て其果して合理的なるか、將た不合理的なるか、正なるか、不正なるかを見ざるべからず、然るに神秘說に於ては、凡て此の如き智力に於ける證明と檢討とを撥斥して、以て宗敎の勢力と生命とを枯死せしむる者となす、されば神秘說は博士フライデーレルの稱せる如く、「己を忘れ世を忘るゝ神醉心」にして、之を神の眞知識と相比較するときは、宛も是れ艶色、佳香に富みたる既開の美花と、未だ綻びざるの蕾とを比較したるが如し、其結極する所、神秘說は格別に神の啓示を主張すれとも、却て啓示せられたる神の實躰を握り損し、其掌裡に存するものは獨り主觀的にして虛空なる意識と、其目的物を知らざる單純なる感情とに過きさるものなり、此の如く看來るときは則ち神秘說は基督敎に對して、彼の懷疑論が陷しいれんと熱望しつゝある地位を受容する者なり、何となれは懷疑論は人間が本性的に宗敎の感情を賦與せられたりとの事實を容認すれとも、是等感性の目的物は妄想より出てたるものにして、知識の目的物となると能はずと主張すればなり、

合理的思考は又神に關する眞實、最大の知識を得るに就て極めて必要なる者なりと雖とも、宗敎的經驗及び歷史的啓示を以て制限、確定せられざるときは、則ち直に唯理主義に陷落して、深く思辨に入り、竟に神に關する眞知識を喪失し了するなり、」

神に關する眞實にして最大なるの知識は、唯た經驗的、歷史的及び合理的の總合よりして得べきのみ、而して是等の數者は相互に檢討、訂正、及び制限し、之と同時に互に相掃除し、相確定し相補充して以つて各自箇々の結果を唯一に歸結し、神に關して至正、最明の知識を生出せざる可からず、青年の學生輩は此の如き制限の下に己

を措くを忌みて、是等は己が思想の自由、獨立、範圍を抑壓する者なりと思ふなる可しと雖も然れとも、自由なる者は律法の支配を受てこそ初て安固、健全にして効力ある者となるとを得可きなり、されば一見其思想を制限せらるゝ如き觀ある拘束は、是れ思想の眞自由及び至高能力を得る爲に必要にして缺くべからざる者なり、俚談に云へるあり、壺中の麥酒自ら思へらく、予若し此器械を破りて外界に脫出するとを得は、則ち直に全世界に氾濫せんと、因て其の壺を微塵に破毀して、希望通りに外界に逸出し來りけるに、悶れや、是れ地上に漏瀉せる一杓の水に、如かざりきと、

(五)歷史的啓示なる者は、是れ三者をして合同するを得せしむ可きの媒介たるなり、夫れ聖書は神學的思想を以て解釋し、靈的生命を以て活動せしめざる可からず、蓋し宗敎的實驗及び神學的思想は兩つながら活ける基督に集合せり、基督に生命あり、又た智慧と知識との一切の財寶も亦基督の中に包藏せり、宗敎的の思想と生命の域內に在りては、基督は一切の半經が相會合し、又一切の半經が射出し來るべき中心たるなり、

世の人の傳ふる所に據れは、タレーランド氏の許に一日愛神人敎者の代人等の訪問し來れるありて、其人々が相謀りて自ら新に設定せし宗敎を世に傳播するに就ての最良方法は如何と氏に訊ねたり、氏此問に答へて曰ひけるは、諸君よ、予は世界に新宗敎を制定するの最良方法に關して、幾分の佑助ともなる可き歷史上の一事實を卿等に示すべし、夫れ耶蘇基督の新宗敎を設定せんと欲するに當てや、十字架の苦刑を蒙り、三日間墓中にあり、而して後更生して昇天せる是なり、若し諸君にして成効せんとを望まは、則ち予は卿等に忠告せん、基督と同一事業を行へと、思ふに此話中には頗る深遠なる意義を包含せり、夫れ神は獨り感情のみにて感得せらるる可からず、又獨り思考のみにて考得するとを能はず、凡ての宗敎的感情及び思想の以前に在て、神は或る方法にて感情及び思想の目的物として、一私人の意識及び人間の歷史上に自己を啓示せざるべからず、苟くも世界を更新し、人間の靈的需用を滿足せしめんと欲せは、唯た夫の一私人の生活及び人類の歷史に於ける自己の行爲を以て啓示し、罪惡より人類を救ひ出して以て義と善の國を建設する活ける神に由るの外は、寂靜主義の默想に由るも、神秘說の夢想と入定に由るも、思想の思辨に由るも、敎育或は愛すべき合理性に由るも、宗敎なき道義に由るも、神と關係なく、超

物的に根據を有せざる博愛主義に由るも、毫も其甲斐なきものなりとす、

(六)右の如き總合を成就せんことは、是れ一切宗教的思考中の至大問題なり、

凡そ有機躰互に相異なり、且つ相撞着するか如き元素を具ふるものも、實際上其生活に於ては、此等の元素互に相統合して一系を爲すものなり、而して是等の差異を領會し、生活に於て斯く現實せられたる多數の一致を思想上に明かにし、以て其原則と理法とを發見、宣言するは、是れ學術上の問題に屬す、宗教なるものは差異と外見的撞着とが相一致して顯はるゝ靈の生活なり、而して已に實際に宗教的經驗と生活との中に存する、所の一致を有する復雜の眞理及び眞理の適用を、思想の中に統合して之を理會し、及び之を告白するとは、是れ即ち神學の事に屬す、故に神學の大問題は經驗を思想に移し、自生的信仰を智力的形躰に組成し、之を理性に解釋、證明し、人間の本性と歷史に於ける是等のものゝ地位と意味とを顯はし、此の如くして宗教的生活に於て實際に經驗せし此總合は、知能を以て理會すべく、又證明すべきものなることの明白にするに在り、基督教徒の赤心を以て崇拜する神は、理性が人間の本性と歷史、宇宙の本性と秩序、及び自已を合理的なりと信ず可き其自有の

權利に對して、苟くも合理的說明を爲さんとするに際し、必す實在せざるべからざる神なることを證明するに在り、哲學が哲學たらん爲めに承認せざるべからざる絕對者と、宗教が其信賴、奉事の目的者として承認する所の、智慧と愛に於て完全なる永遠の靈との總合を發見するにあり、

蓋し此總合の必要に對して、靈性的及び超物的を知るの運用は有形的を知るの運用と同一なりとす、抑も有形世界に關する知識は靈界の知識と同しく、其初めは唯だ自已の自證に據て知るの外、何の手段にても證明さる可からざる直覺力に其端を發するなり、されば學術家が其感覺を通して有形的實在の眞知識を得ることを證明すればとて、其證明力は基督教徒が其自覺を經由して靈的實在の知識を得、若くは經驗を通して神の知識を得ることを證明するに過くと云ふと能はざるなり、且つ學術家の原初の意識に於ては、其他各人の意識に於ける如く、事實的實在と合理的原理とは、共に不分拆の星霧の如く、定形なく、分別なく、相混合して以て存在したるなり、學術家は決して自已の知覺が自已に眞知識を與ふとの事實を如何にしても證明すべき道を有せざるなり、唯其爲すを得る所のものは、其知覺せし實事の何物

なるかを認知し、漠然として其前に表現せし事物を分別し、及び其相互の關係に注目するに止る、彼は反覆、丁寧の觀察により、及他人の觀察と其攷究しつゝある事情に關して人間講究の最高結果とに、自己の觀察を比較して、以て其知覺の眞否を確定するとを得べく、又彼は此一切の者を理性の光明に照らし、其統制原則の下に在りて、以て諸種の推測をなし、而して自己の知識を擴充するとを得るなり、是等の運用に由りて彼は明白に其心意の前に此表現せる實事を現出せしめて、以て其差異と關係、及び相互の調和、及び理性の有する原則と、推理より生する正當なる斷言との調和を發見し、之を提げ來りて以て學術系全躰と相調和せしむ、此調和と契合とにより、其心意は既知の事物、及び其事物と後來知らるべき一切の物との關係に關する自己の知識の全寰を通して昇降するも、毫も事物相互の間若くは自己の心理的作用との間に撞着若くは不合の存せざるとを發見し、而して後初めて是等實躰に關せる明白の徵證を得て、以て安心立命の基礎となすに至る、是を以て其反覆の經驗と思想とは、絶へず其知識を確定するものにして、彼は疑懼するとなく、之に其の生涯の行爲を委任するなり、固より其長き生涯間には、改めざるべからざる誤

謬、及び補欠せざるべからざる知識の欠乏を發見するとあるべし、然れとも其知識の大躰は、其生存間に於ける日々の經驗を以て證定さるゝなり、之と同樣にて人類の知識は、一代より一代に誤謬を離れて廣大に成り行く中に在りて、其大躰は永へに存し、幾世幾代、人類の經驗に因て證定さるゝものなりとす、

若し夫れ靈界、超物界及び神に關する人の知識に就ても亦之れと同し、抑も是等の實躰は其智力的作用によりて啓示せらるゝと共に、又其感情、道義上の責任、日常行爲に於ける意志の實際的決斷によりて、人の意識に自己を啓示するものなり、人は理性の光明を以て是等を試驗し、是等に適用するに、理性の中に存する普般にして必至なる原理を以てし、之に由りて次第に是等の意義を認知し、有形の實躰より是等を區別し、以て是等のものが道義的に且つ靈的なる系統を成して、相統合するを發見す、蓋し此系統を承認するとは、是れ萬有組織の學術的知識に對して必要なる事なり、此の如くなるが故に、是等靈的實躰の反覆せる經驗と、是に關する不斷の思考とに由りて、人の知識の全進歩は、靈界に於ける其信仰を絶へず證定するものとなり、而して之が爲に靈界は愈々益々人の感想上に、宇宙の至深なる實躰として現

はるべし、泰然疑はずして、人は其生涯の行爲と利害をば擧けて此信仰の眞理に基因せしむるなり、有形的知識に於ける如く、人は誤れるを正し、缺けたるを補ひ行くと雖とも、然れとも神と超物界の存在と、道義法と、賞罰と、神恩の必要と、禮拜等の諸大事實は、是れ永劫に亘つて不變なる者なりとす、

此の如く論し來るときは、神學的思想に對する普通の反對說は、不合理にして且つ不確實なるものたらざるべからず、エス、ダブリユ、ロベルトソンは氏が常に人に敎へし所の一原則として、下の言をなせり曰く、「抑も靈性上の眞理なる者は智力上の命題として看察さるゝものに非らずして、却て靈に由て看察さるゝ者なり、故に此眞理は勸誘的に敎訓せらる可くして、獨斷的に敎誨せらる可からざるものなり」と、若し夫れ余が先に論せし所のことにして果して眞理なりとせは、則ち此原則は正當なる者にあらず、氏若し斯かる言を爲し得べくんば、又下の如く言ふを學べき筈なり、「有形の實躰は感覺を以て知らるべくして、知力的に命題を以て知らるべきにあらず、故に是に關する事實は勸誘的に敎誨さる可くして、學術的に敎へらるべからざるなり」と、固より靈的實躰の靈的經驗に由て知らるゝとは眞實なりと雖とも、

然れとも亦智力上よりも知られざる可からず、是れ宛かも有形的實事の感覺に由りて知らるゝと同時に、亦た智力的に知らるゝが如し、而して右兩箇の場合に於て、知識の至上、最高なる精確と完備とを得るとは、是と合理的實在者たる者の本分なり、されば監督ペットラーの語に曰く、「理性なる者は吾人が因て以て事物を判決すべき爲に有する唯た一の能力なり、吾人は天啓をも之を以て判定すべし」と、ウエース氏は曰く、「吾人は理性と本心の吾人に隨伴するを許さるゝ處までは、信仰を增進するとを得れとも、之より以上に進むとを得ず、是を以て舊約の預言者等も、吾儕の主も、其使徒等も皆、一瞬間たりとも吾人の理性若くは本心を寂滅せしめよとは命ぜざるなり、……信仰は吾人が天性の中にある他一切の本能と同く、理性の作用を以て抑制せらるゝとを要す」と、

故に此總合を成就するに方りて必要欠くべからざるものは、神の靈の指導を求めて之に從ふ所の人間の理性なり、人間は其合理性の德によりて有心的存在者となれる者にして、自己の合理的及び靈的系統の一部分にして、並に其分享者たるとを知る、故に靈的及び超物的實躰の世界は、是れ決て人間に取りて異鄉、殊城に非らず、

又は時々隱見出沒して以て人の好奇的注意を惹くが如き者にもあらず、之に關する人の知識は絶域の知識の如く偶爾なる者にあらず、自己の最高なる人性を現實する爲め、特更に人はノヴワ、ゼンブラ又はスピッバーグンに漫遊するの要あらざるなり、之に反して此事に關する人の知識は、人の自己に就ての意識より出つる自生的結果にして、其生涯の正當なる事業をなし、及び其實在の眞の發達と全備を現實せんと務むる其經驗によりて確定せられ、訂正せられ、擴張せらるゝものなりとす、」

(七)人の宗教的經驗及び神學的思想の歷史上の進路は、此總合作用を漸次に經營する所のものなり、

熟々歷史を察するに、右の進歩の途上に於て、三の段階を顯はせり、第一は不確明なる宗教的經驗及び自生的信仰の段階にして、第二は人が因て以て其宗教的信仰を檢討し、確定する所の反省的思想の段階なり、而して此段階よりは時に或は疑惑と懷疑の生出するとあり、而して其進路に一歩を加ふるときは、則ち前に已に攷察せし如く、智力的要素のみに割據するの傾向を經て、竟に全然神の信仰を抑壓するに至る、べし、然れとも此の如き結果は是れ不正則にして、歷史の示す所によれは、例外のものなり、是れ實に退歩なり、進歩に非ざるなり、若し夫れ正當合理の結果にして、歷史が實際に古來より一般にありたるとを示すものは、即ち神に關する信仰の證定せられ、又神に就ての知識の純潔、開廣せらるゝの有樣なりとす、是ぞ則ち人間思想の進歩に於ける第三の階段なり、此階段に於ては、人其反省的思想を以て自己の宗教的實驗及び自生的宗教心を檢討、確定し、以て經驗的、歷史的及び合理的の總合を發見するなり、此の如くして人は宗教が道理に合する奉事にして、其自發宗教心の精練なる知識となる樣に訂正せられ、確定せられ、及び擴張せらるゝとを發見する也、人類の極めて幼稚なる時に當りては、人は自己の內心に在て發見する所の靈の實躰を外部に適用し、萬有を以て自己の如き靈なる存在物と爲す、然りと雖とも是等の思想たる、決して妄想より現出せる單純の小說にあらず、其合理的本性の必然より、一切の現象をば實在者の現象として知らざるを得ず、一切の資性をば實躰の資性として知らざるを得ず、一切の變化を原因の結果として悟らざるを得ず、然るに其宗教的經驗に於て彼れは自己を省みるに、己れば自己に由り、自然物に由り、又他人に由て惹き起されたる者として解說する能はざる印象の主觀たるを發見

する者なれば、則ち彼れ野蠻人は必す、是等の事實を或作用者に歸せざるを得ず、而して彼は是等を自然物にも、非らず、又た人類にもあらざれとも、尙ほ自己と同一なる思想、意思、及び感情の無形力を有せる作用者に歸す、他語を以て之を言へば、即ち之を神に歸するなり、然るに第二の段階に在りては、人漸く其文明の度と敎育とを增進したれとも、尙ほ偏局なる發達の有樣に在り、故に其思辨尙ほ片面にして未熟なり、されば此時代に在りては人皆謂へり、靈及び超物の領域は、是れ單に自己の頭腦より出てたる無實の假作物にして、感覺に現はるゝ物象こそ、唯一の實事なれと、是に於てか、彼は理性と萬有とを相衝突せしめ、且つ彼は容易に心附かざれども、論理上の結末として、萬有を學術的に知ると能はずとの結論を生ぜしむ、第三段階に於ては、人其第一段階にて得たる原始の經驗と信仰とを取て、之を神の歷史的啓示と比較し、又反省的思想の檢討と確定とを受けしむ、是に於てか初めて經驗、歷史、及ひ智力なる三者の總合を得、神に對する極めて確實なるの信仰を以て宗敎的生活に復歸す、此に至りて他人の若し之に就て質問を起し來るが如き者あるときは、則ち一々之に其信仰の理由を說明するを得るに至るなり、夫れ上來陳述したる如き、

人類が其全歷史を通して經過し來りたる三段階をば、一私人も亦た其自己の歷史に於て同一樣に經過し行く者にして、幼時の單純なる經驗と、直信不疑にして自生的なる信仰よりして壯時の思想深遠なる研究に歷到す、當今之を爲すの中疑訝と困難に遭逢し、時に或は全く其信仰を破毀するもの往々是れあり、然れども大抵は皆攷究の末、有智的にして確實動すべからざる信仰に歸着するなり、此第三段に於ては、理性は明白に其主權を自覺して、以て之を宣揚す、是に於て人は自ら感覺的及び靈的兩界、物形的及び超物的兩界の分享者たるを知り、物界と靈界の間に存するが如くに見へたる撞着の溶解し去るを發見し、靈の心胸に物界あり、物界の中に靈の顯はれ、而して兩界の內外に神の存在するを見、又物系靈系共に思想の痕跡を顯はし、絕對にして至上なる理性の目的を現實して、以て互に相和合するを見、而して又自ら神の政治の下に在りて、兩界に跨れる作用者及び分享者たるとを悟る、此の如くして人は經驗、歷史及び合理の三者を全く總合し、理性に質して誤らざる宗敎的生命に復歸するを得るなり、

而して人の宗敎上の信仰及び思想の以上の歷史的進路は、全然形而下學の進路と

同一なるなり、古代世に行はるゝ創世說に關する妄想及び寓話の如きは、全く當時の宗敎に於けると同樣に、當時の學術にも亦た附屬したり、されば、かの萬物水より出つとか、若くは火より生ずとか、平面なる地球は火焰の河川之を圍繞せりとか、太陽は夜中地球の下底を經由して旅行するなど云へる說話は、是れ初代宗敎に妄想寓話の存せしと同樣に、初代の學術に於ける妄想と寓話たりしなり、而して斯の如き發端より學術は宗敎の歷史上に顯出せし所の者と同しく、幾多の誤謬と幾多の無稽なる思想の中を通過して漂流したりしなり、人若し之が實況を曉會せんと欲せは、請ふ二百年前に於て英國人の使用したりし處方書を讀め、

(八)此經驗的、及歷史的と、智力的即ち合理的との總合の必要、及び宗敎歷史に於ける其勢力は、基督敎有神論者間に於ける現今思想の運動に對するの鎖鑰なり、

「プロテスタント」主義の獨斷主義及び唯理主義に變化せるは、是「プロテスタント」主義の毀壞せる所以にして、其正當に發達せる所以にあらざるなり、世人往々言を爲して曰く、「プロテスタント」主義は是必す唯理的たるなり、曰く、唯理的主義は即「プロテスタント」主義の正當なる結果なり、曰く、今日に在ては人の宗敎的思想を滿足せしむるの道只だ二箇あるのみ、即ち一は吾人を羅馬敎に導き、他の一は純然たる唯理主義に導くなりと、此の如き種類の議論にして最近に世に公にせられたる者の一は、エドウヰン、デー、ミード氏が其著マルテン、ルーテル傳に述べたるの言なり、其語に曰く、「ルーテルは唯理主義を代表する者なり、彼は又宗敎に於ける智力主義を代表するなり、……彼が四百年前の學術に對せしと同一の精神を以て近時の學術に對するときは、則ちマルテン、ルーテルは必すジョセフ、クックトならず、ムーデー、サンキーとならずして、セオドル、パーカーたりしなるべし」と、

(註)世人動もすれは又云ふ「プロテスタント」改革は其中に政治的の改革を包含したりと、成程該改革は人の思想を喚起したるに相違なし、其唱道せし、信仰によりて義とせらるとの、大敎義は、人をして其卑賤なる肉躰を有しながら、人間の仲保なくして神に咫尺するを得せしめ、且つ自己が親く恩惠の神に信賴するの故を以て、神に嘉納せらるゝものとなるを得せしめ、以て大に人の品位、價値を發揮し、隨て其權利の神聖を主張したり、然れども其心髓に於て、該改革は平穩に進歩して、以て人權を享得せしむるに適當せるものなりしなり、夫の眞理

と愛とは、之を壓制する者が其正當有益なる感化力に抵抗するよりして生し來れる社界の擾亂、紛騷に對して責任を負べきものに非らず、

「プロテスタント」主義は非常に宗教上の合理的要素を宣揚し、又神學的思想をして激烈なる活動をなさしめたり、然れども此宣揚の斯く强盛なりしは、是れ只た羅馬教皇の權威の下に、智力の權利の大に壓縮せられたりし事情に對する偶爾の反動たるに過きざりしなり、「プロテスタント」主義は又靈生の復興にして、天主教主義の外飾と虛式とより全く分離せる一私人の宗教的經驗と、聖靈の臨在、及び勢力との宣揚たりしなり、されば「プロテスタント」主義の運動に於ては、經驗的要素も歷史的要素も知力的即合理的要素も、悉く皆勁烈に活動し居たりしなり、ルーテルは其眞に男らしき分明なる人性と共に、其品性中に靈的經驗と、聖書の歷史的啓示に對する敬意と、知力的自由及び勇氣との三者を結合して、以て右の時勢の代表者となりたるものにして、其分明なる人性は、彼の幽靈の如く、骸骨の如き中古の敬虔主義と燦焉たる對照を爲せり、元來「プロテスタント」主義の獨斷說及び唯理說に淪沒し了せるの事實あるは、是れ此運動の知能的なるに原由するに非らずして、常に一方に偏向するてふ人間の不完全なると、有限なるとに基因せしなり、之に反して「プロテスタント」主義は上と同一なる片面的の方法にて、時に或は祇虔主義、神秘主義、及ひ惑溺にさへ陷るとありたるを以て見れば、「プロテスタント」主義の根元は思想の自由を宣揚せしものたると同時に、經驗的宗教の復興せしより來りしことを知るへし、

基督教の思想は今や方に抽象より具躰及實躰に、獨斷主義及ひ唯理主義より神と救拯の歷史的及ひ靈的觀念に、思想より生命に轉移しつゝある也、此運動は是れ決して今日に初りしに非すして、其痕跡をば遠く數代の昔日に尋求することを得へし、監督パトラー及ひ校長エドワーヅの著書中に痛惜せし、彼の英米に於ける靈的信仰及ひ生命の衰頽は、是れ余が前に指示せし乾燥、無味なる獨斷論より生ぜるの結果なりしなり、而して之れが結果として生出せし他の一現象は、英國の自然神教說にてありき、自然神教論者はロバート、ボイルの、宇宙を時計と見做したるの思想を以て完全の說なり、と思へり、彼輩は神を存在する者なりと信認せり、然れとも、時計を製作して以て之を運轉せしめ、自己は之れが外に身を措て、其運轉を監視するの

外何事にも關せざる機械師の如くに神を思惟せしなり、且つ基督教を辨護せんと企圖せるの人々と雖とも、殆んど專一に奇蹟なる外部の證據にのみ依賴したりき、良し適々內部之證據に訴へたるとありしも、之より繹出せし千變一律の議論は、ソーム、ゼニーンスの論說の旨趣に過ぎず、其論に曰く、基督は自家獨創にして前代未曾有なる倫理の教系を訓誨したりと、是論や、萬國民の等しく承認せし道義の原理は元精上同一なりし者なりと云へる、近時に於ける學者の論證の爲めに吹飛はされたる者と謂つへし、本世紀の初め以來、チユガルド、ステワート及ひ其他の人々は、宇宙に於ける神の作用を論究し、若し時計の製作者にして其側に起ちて、己の指頭にて常に之を回轉せしめ居らざる可からざるが如きとありしならば、則ち其時計の不完全なるを證明す可きと同樣に、果して神の宇宙に於ける作用は、其工事の不完全を證明すべきものならざるや否やを攷究するとをなしたりき、

此靈的思想及ひ生命の痩弱より起れる反動は、米國に於ては校長エドワルヅの生時に於ける宗教の復興に顯はれ、英國に於てはウエスレーの運動に顯はれ、又國立教會に於ける福音的運動に顯はれたり、今や此反動勢は兩國に於て宗教的思想及ひ活動の各部に旺盛を極め、己か立命を得さるの基因は何れにあるや、若くは之を除去する爲めには何を必要とするかなど云へる事を、自ら解釋するをせざりし多數人の心意をば、不安心を以て皷動せしめたり、日耳曼に於ては唯理主義十分に其發達を逞ふせざるの前已に、ブランケ、スペーテル及ひ所謂敬神主義なるもの世に出て、以て乾枯なる獨斷說に反對したりしかども、然れとも是れ到底唯理主義に進行する思想の氾濫を遏むの力なかりき、唯理主義一度日耳曼神學の上に其威力を逞ふせし以來、之を妨遏するの效力ありし第一の反動はシユライエルマヘルの說なりき、氏は其少時の教育をモラヴイアン宗徒の間に受け、之によりて生涯自己を支配せし所の靈性上の感化を受けたりしなり、假令へ欠亡勝ちなりと雖とも、吾人は氏の基督教信仰の教系によりて、少くとも神學が其正路に復歸したるを發見せずんばあらず、氏の神學は自ら其向ふ所を看出し、其面を日の出の方に向け、以て永く其額上に義の大陽の光輝を戴きて進行しつゝありしなり、

思ふに此運動に於て最近の特に彰著なる時期は、ストラウスの耶蘇傳を公刊せし時なりとす、是に至て唯理主義は實に其最高の程度に到達したりしが如し、元來此

人の此著書は、耶蘇の生涯にヘーゲル派の哲理を應用せる者にして、下の如き事を證明せんと勉めたるものなり、曰く、吾人耶蘇の生涯の經歷中に顯出せる眞理と思想を知得、了認せし以上は、其經歷の傳說其物は何の價値をも有せず、又其歷史上の眞僞の如きは、何れも頓着するを要せざるの事なり云々と、要するに此書は福音傳に對して尖銳、深大なる破壞的の批評を與へたる者にして、當時世人が一般に、古來福音書が受けたる批評中の最も恐怖すべき者たりしことを認識したるものなりき、されば之れが爲め基督敎世界には大驚惶起りたり、然るに其後久しからずしてアンダーはストラウスに對する答辨として耶蘇基督傳なるものを世に公にせり、而して其後今日に至る迄、每年續々として世上に公にせられて、廣く流布し、熱心に購讀せらるゝ幾多の基督傳頻々として世に出たり、是れ實に基督が今も尙ほ人間の心意と精神の上に著大の勢力を有せるの明證に非ずや、ホーマーなる者は果して世に生存したりし人なるや否やと云へる問題は、學者の論爭せし所なれとも、其攻究を以て世上一般の感情を挑發せしむるとは到底出來可からずして、之が爲めに少く面白味を感じたるは、只是れ少數の學者に止まりしならん、然るに通常人の

手に成ると、學者の手に成るとに拘わらず、數多の一代記と、其生涯、行事の攻究錄の僅か數十年間に著作せられ、熱心に購讀せられ、到る所に攻究せらるゝ程に世人の感情を興奮せしめ人は、古往今來耶蘇を措て其人あらざるなり、而して斯く耶蘇の行事に世人を着目せしめたるの功は、吾人之をストラウスに歸せざるを得ず、何となれば氏が其著を公にせし前に在ては、世に基督の傳記なるもの、寥々として曉天の星の如くありたればなり、啻に是れのみならず、吾人は尙ほ多くストラウス氏の功に歸せざる可からざる者あり、蓋し氏は耶蘇の生涯の歷史的記事は左迄必要の事にあらずして、其生涯の全躰の意味は、其生涯が顯はせる所の眞理にありとのことを論示せんとせしが、氏は此說を成就することをなさずして、宛も之れと反對なることをば成就せり、何んとなれば氏は凡て基督敎國の思想をば基督の生涯の事跡の攻究、歷史上の人としての耶蘇の觀察、及ひ人類の間に於ける其歷史、敎訓及ひ勢力の考察の上に集めたればなり、而して之れが結果は則ち世人をして初めて、基督敎の大證據は即ち基督自身の中に在ると、及び其人間的生活及ひ勢力は只々其神たることを容認するによりてのみ解說せらるゝことを悟了せしむることにてありき、加

之世人は又從前より一層充分に、基督の人となり玉ひしとの深遠にして廣大なる意義と、道(Logos)の降生により、並に基督の生涯によりて與へられたる神の啓示の特性と、富贍と、實際的能力とを理會するに至れり、

米國に於ては、ストラウス氏が其基督傳を世に公にせし時は、諸敎會方さにユニテリアン主義の爭論を經たるの後に際せしかば、之れが爲め諸敎會皆暗に神學上の基督を現出して、歷史上の耶蘇の如きは殆んと其解せざる所たりしなり、されば彼等は信ずらく、基督は即ち神たりしなりと、而して彼等は基督の神性を證すへき意味を含蓄せる聖書の本文は、一切之れを暗誦、熟知せり、是れを以て基督は彼等敎會に對しては單に神たりしのみにして、其他何者にてもあらざりしなり、彼等敎會は基督の神性を證明する爲めに、基督の人性を忘れ、隨て神が其の中に在りて、若くは之れを透して自己を啓示し、又罪惡より人類を救出するの神功を成就すべきものを抹殺し盡したり、然るにストラウスの基督傳が波及せし結果は、米國の基督敎を導きて、耶蘇の人生に復還せしめ、以て人間の制限と事情の下に立ちて神の有の儘を吾人に代表、顯示するものとして、愈々基督の神たるを見せしめ、毫も之れが爲め

に其神性を減殺するとなかりき、敎授モセス、スチユアルド救世主に關する豫言に就て諸生を敎授するに際して、救世主に關する者として舊約書より數條を摘出するを常とし、其理由を說明して曰く、是れ等は新的書中に引用して基督に適用せられたりと、而して之より生せる結果の如何を觀察するに、之を學ぶ學生の多數は皆思へらく、救世主に關する豫言を承認するとは、是れ專斷にして無理なるとなりしなりと、是に於て彼等は舊約書を正當に解說するとき、果して救世主に關する彼等の豫言を其中に含めるかを疑ふに至れりと云ふ、然れども聖書に記述せる如く、神が人間の爲めに成したりし所の者に關する實際の歷史を、一層精細に研究したる結果は、現今の學者を導きて、イスラエルの全歷史をば救世主に關する豫備と信せしめ、及ひ其中の豫言をメシヤ的に解釋するは、最も嚴肅なる解釋法に循ふて、全く無理ならず、又自然なる者なりと承認せしむるに至れり、敎理と敎式とを以て充されたる神學は、基督の歷史的王國を全く見失ひたり、然れとも基督の傳記及ひ其地上に於ける敎訓を研究するの風潮一度世上に盛なるに至て、世人又大ゐに之れに注目するに至りしが、此時に當て新英國神學は將に其事業を完成せんとするの域

に達し、一層精細に人間の責任の性質と制限とを説明して、以て悔改者の義務と責任とを宣敎するの道途を開拓するに就て、其効績頗る大なりき、然れとも此が必然の勢として、其等の數問題を研究するに當て、神學は判然たる哲學の區別と定義とのみに人の精神を傾注せしむるに至れり、是に於てか人心又基督の生涯に於ける思想の豐富と、意思の能力とに關する觀察を等閑に附するに至れり、然るにストラウスの福音歷史上に一大攻擊を試むるに及て、基督敎徒の思想をして再び是等大問題の攻究に復歸せざるを得ざらしめたり、

夫れ斯くの如く、耶蘇の人間的生活に凡て基督敎國の注意を傾向せしめたるが故に、基督敎に對するストラウスの攻擊は、却て一時爲めに神學を薄弱ならしめたり、し偏癖と欠亡を訂正し、基督敎徒の思想をして復た歷史上の基督と、基督中に存在せし智慧と知識の寶庫に還歸せしむるの効力を有したり、要するに基督敎の神學者を喚起して、歷史上の基督が一切神學的思想と組織の眞中心たることを確認せしめ、基督敎の說敎者をして熱心を回復し、以てパウロと共に「我は爾曹の間にありて耶蘇基督即ち十字架に釘けられしものゝ外は汝等の中にありて何をも知るまじと心を定めたり」と揚言せしむるに至れり、ゲーテ曾て言へるあり、曰く、惡魔は是れ人間に對する神の最善なる賜物なりと、縱し此大膽なる斷言を其文字通りの意義にて贊諾するとなきも、吾人は須らく神が、

事のうはべを見るときは　凶とおもふことにても　なほそがうちより產み出す　福にはさちのかさなりて　末もかぎりもなきまでに

From seeming evil still educing good　And better thence again, and better still,

In infinite progression.

至ることを記憶し、今誤謬を含有せる此書冊を以てすらも、尙ほ且つ自己が人に自己を啓示すると、及ひ之れを求むる信實の人には自己を示すべきとの證據を與へ、又ストラウスの攻擊に對する基督敎的信仰と學術の反動より、諸種の利益の生出し來りたるとに對して、常に神に感謝すべき筈なり、

近時世人は喈々として稱道すらく、「神學に新運動を生したり」と、若し夫れ此運動にして、果して神の知識に於ける經驗、歷史及ひ合理の三者の總合の方に其步武を進むるならば、則ち極めて健全の運動たるなり、若し果して抽象より具躰に、思辨より

歷史に、死より生に、文字の彫劍より實事の確把に向ふものならば、則ち極めて健全の運動たるなり、又若し此運動にして獨斷論と唯理論より「キリスト」により世をして已に和かしむる神」に進み、而して之を以て一切神學の中心となし、人は實驗上之を知り、以て「彼を識りて之と和くことをなし神のなし給ひし所業を」證言する方に向ふときは、健全の運動たるなり、又若し此新運動にして感情的、片面的、他界の情慾的傾向より、現世に於て進捗しつゝある基督の王國を信認し、至心に己も亦た人間社會を基督の國に轉化するの事業に於て「神と共に働くもの」となりて努力するを得るの多福を喜ぶの傾向に移るときは、則ち健然なる運動たるなり、

夫れ最も人をして明瞭に、且つ最も十分に眞理を理會せしめ、其最も大なる勢力を顯はさしむる爲めには、之を形躰に現はし、若くは之に活力を與ふることを必要とす、即ち吾人の眼前に有心者とし、實物とし、作用として表現せしむると極めて肝要なり、信なる哉、ヨヨルヂ、エリオットの言や、其言に曰く、「人間の觀念は間々漠然たる幽鬼の如き者となりて、吾人の日光に滿ちたるの眼は之を見ると能はず、是れが爲めに諸觀念往々其空漠たる蒸氣の如き形狀にて吾人の前を過行き、吾人をして惜か

に之を感ぜしむる能はず、然れとも時ありてか、彼等は肉躰を取りて、照々たる氣息を吾人に吹き、柔和にして友愛なる手を以て吾人に觸れ、悽愴として實意ある眼を以て吾人を見、訴ふるが如き音調にて吾人に語るなり、要するに、彼れ等は活氣ある人間の精神を被りて、其有ゆる爭援と信仰と愛とを有するなり、勢ひ茲に至るときは則ち其存在は變して一の能力となりて、宛も情慾の如く、吾人を撼かし、吾人は猶ほ火焰の火焰に惹かるゝが如く、徐ろに催迫せられて其方に惹かるゝなり、……

……吾人々類幾多の人々に對しては、苟も某の有心者ありて特別の勢力を以て是等の人々の靈性に感觸し、以て其感受性を喚起するにあらすんば、粲然たる天の文章も、斐然たる地の經營も、決して何等の啓示をもなすとあらず、是れ吾人が正當に稱して改化と謂ひし心意的變更に於ける、幾多秘奥中の一たるなり」と、蓋し神の其啓示を萬有の中に形躰的となし、人間の生活の中に靈精的となしたるも、人間歷史の大進路中に自己を啓示したりしも、又特に「自ら人たるの基督耶蘇、即ち神人間を復和するの中保者」によりて人類に現はれたる事も、皆是れ上に述へたる人間本質の固有性に順應せしめんが爲に外ならず、

論し去り論し來れは即ち知る、神學思想の運動にして、果して上に述べたる如き方向に進みつゝある限りは、最も健全にして多望なるなり、夫れ然り、然りと雖とも斯の如き運動は是れ決して新奇なる運動にあらす、只々種々の形狀にて長く社會に顯出したりし乾澁なる獨斷論と唯理論の反動に於て、一層進歩したる階段たるに過ぎざるのみ、吾人精細の攷究を費すときは、則ち此運動中に彼の眞正圓滿なる神學を大成すへき唯一の方法たる經驗、歷史、及合理的智能の總合を得んと努力するの痕跡あるを見るべし、

或人は抽象の獨斷說と、哲理的思辨論と、破壞的批評主義とを避けて、活ける神の臨在と愛の經驗なる正路に還らんとするの目的を以て、シユライエルマヘル氏の說を採るに至れり、然りと雖とも氏の宗教上の見解は、眞理に適ふて必要學ぶへき者あるにせよ、片面、欠損的にして基督教の眞理と生活とに對して不充分なる可き事は明白なり、此の如き方向に於ける運動の結果は、今日の宗教的人民の間に在て往々見聞する諸種の敬神主義若くは神秘教となるなり、

又他の人々はシユライエルマヘルを去つてヘーゲルの許に逃れたり、蓋し彼等固く前者に倚賴して眞理を聞かんと欲せしかど、奈何せん、其信仰たる信者自己の感情の上に不定的に建立せられて、單に其主觀的意識にのみ止まるあるを發見したり、是に於てか、彼等後者の哲學に於て確立、永遠なる眞理と、絶對不變の實在者と、宇宙の千變萬化の現象が啓示する宇宙の實躰と眞意とを發見せんとを希望したりしなり、アウゴステン云へるあり、曰く、「基督教徒は眞理の各片をば、其何の處に發見せらるゝにもせよ、悉皆之れが主の所有物なるを主張するものなり」と、抑々キリスト教は一切の靈的眞理を包含せる者なり、苟も該教が一個の絶對的宗教たる以上は、必らず一切の靈的眞理を網羅し、一切の靈的實躰に契合一致するを得るものならざる可からず、成程深遠なるヘーゲルの哲學は、眞理と、實躰の眞相と、及ひ思想の眞線路とを暗示したり、而して之れか爲めに吾人の確認せる神學は擴張せられ、深邃にせられ、及ひ豐富にせられ、且つ天啓なりと云ふ權威を以て世に受けられたる教理の道理に合すること益す明白に發見せらるべきには相違あらず、余はヘーゲルは之を暗示せりと云ふ、何となれはヘーゲルは自ら其論理と先天式との爲めに掩蔽せられて、其哲學が近接し、且つ其方位に向ひつゝも、結局明言せざりし有神的

及び基督教的眞理を確く把持して明白に宣明するとを得ざりければなり、固より基督教の有神論者はヘーゲルの說を講明して、此說果して何の眞理を暗示したりしやを探尋し、且つ基督教的信仰を輔助饒足するが爲めに、其眞理を應用して毫も不可なるなし、然りと雖ども此に一言せざるを得ざる事あり、他なし、基督教の輔助としてヘーゲル主義を採用したりし近世の著述家は、之れが爲めに基督教の神學に幾何の重を與へたりしか、其邊は確知せずと雖ども、惜ひ哉、彼輩は皆該哲學の特性たる、不明と錯雜なる思辨とを其儘採用し、且つ容易に唯心的凡神論に陷り、具躰なる存在者及ひ其作用、關係と、論理的總念及ひ運用とを混視するの傾向ある思想と語辭をも該哲學と共に採用したり、

米國に於ては、合理的運動の爲めに有神論すら排拆せらるゝに至らすして、其結果終にユニテリアン主義と爲りて形はれたり、然るに福音主義と稱する人々の間に在てさへも、神學思想の擾亂に伴はれて、唯理的傾向漸く其間に光輝を發揮するに至り、中には唯理說を公言するものさへあるに至れり、思ふに是れ等の人々中には、時に或は其說の特異なる性質に氣附かずして之れを唱道せしなる可し、近時世に公にせられたる秀逸なる福音主義記者の書中に於て、吾人は實に下の如き言を發見するなり、曰く、「吾人は福音傳中に精細なる事實なるものを發見する能はさるともあるべし、吾人は容易に是等に對して無邊の疑念を生じ、無數の困難を起し得へし、是等の事實は數百年に亙りて凝集せる雲霧の爲めに陰蔽せられたり、然れども福音傳中に顯はれたるの眞理に至ては、決して此事實の如き有樣に非ざるなり、何となれば是等眞理は、年代の經過と共に漸次に其價値を減少するとなく、却て之が爲めに其價値を增加したれはなり、

十九世紀間を經たるの今日に在て、半ば忘失し去りたる事實に關して、吾人如何なる事を確定し得るに拘はらす、兎に角吾人は尙ほ下の如き疑問を發せざるを得ず、曰く、現時の重大なる刺衝力は何者なりやと是なり、而して是等の事實に關して、如何に吾人が之を證明する能はざるか如きことあるにもせよ、吾人は尙ほ基督の生涯を爲せし場所及ひ時期よりして、今日に至るまては、吾人と共に現存するところの活潑、有力なる原理の德を以て十分辨護し得へき靈性上の信仰を確持し得るなり」と、是れ豈に最初に基督傳を著はしたるときのストラウスの觀念と相伯仲する

の說にあらずや、夫れ基督の傳道の至意は、其說きたりし所の眞理と敎義とに在りて、其生涯の歷史の事實の如きは何も頓着するの價値ある者に非ずと云へる觀念は、是れ唯理論の本色なり、而して、此觀念は、マシウアルノルドの如く、「情緒を以て加味したる倫理」と宗敎とを全一視するの說の中に見へ、又近時英國敎會の敎職の如く、「善をなさんと希望する不可思議論者」を基督敎徒の働仲間として歡迎するが如き有樣の中にも現はるゝものと謂ふ可し、何んとなれば是等の說たる、皆基督なき基督敎、及神を無視せる宗敎を吾人の眼前に提出するものなればなり、右の如き思辨は、今日尙ほ獨斷派より合理派の思想に前進する神學運動の舊風を吾人の間に顯はすものにして、敎會が靈的實躰と生命との方に向て進みつゝある途上にて、之れか背後に見做しつゝ去る所の唯理論と云へる大砂漠より起れる、遲々たる一陣の風の如し、

以上論する所に由て之を觀れば、則ち神學的思想の運動は如何なるにもせよ、一個の經驗に偏する神秘主義、歷史的攻究に偏する不靈乾燥なる批評論、神學思想に偏傾する獨斷敎、若くは唯理說が尙ほ全く今日の宗敎及ひ神學的思想に顯はるゝは明白なりとす、然るに世人は今日の神學運動を論するに當て、通常是等の間に判然たる區別を立つるを忘れ、全一なる名稱の下に、全然相異なれる若くは反對の方向に在る宗敎的の生活、思想を統一するなり、抑現時の宗敎及ひ神學を領會して其當を得んと欲せば、必らす此等數個の方向間に確たる判別をなさゞるへからず、航海者は獨り緯線のみを以て其地位を決定する能はず、只だ緯線に合するに經線を以てして後、初めて之をなすとを得るなり、之と全しく神學思想の地位を決定する爲めには、吾人經驗、歷史、及び道理を究めて之を知らざる可からず、而して凡て健全なる思想の向ふ所は、皆此三者の總合にあるなり、

宗敎的經驗、及ひ歷史的啓示と、神學的思想の總合する點に至らんとする此健全なる方向は、言語を透して其言論の指示する實事に、抽象を透して具躰に、智力を透して實際に思想の經過するを確定するものなり、夫れ言語及ひ抽象的觀念は攷究上頗る必要なるものなり、然れども眞正にして確實なるの思想は、言語と抽象的概念とを透して具躰的實事に到らざる可からず、然り而して此事たる、神學的思想が宗敎上の經驗と、歷史的啓示と總合するとを得るの度に隨ひて成就するとを得へき

ものなりとす、

以上の結論中には、神學上の攷究を輕視し、若くは神及ひ神と人と、神と宇宙との關係に就ての吾人の知識を純潔にし、完全にし、及ひ組織せんとの企圖を妨遏するが如き事毫も之れあらず、成程宗教が最も緻密、複雜なる思辨、講究に勢ひ免るへからさる一切の疑問に精細の答案を爲さんと欲して神學が與へたる、許多の定義の爲めに尠からさる妨害を被りたるには相違なし、又神と神の事業との攷究上現出し來れる許多の點に於て、暗示の方寧ろ定義よりも事理を多く啓示し、情性の智性よりも寧ろ賢明なるが如きと是れあり、眞正の信仰と欠乏せる知識及ひ許多の智力的誤謬と兩立するともあり、且吾人は「信仰は混亂し居れども、其爲す所の純白」なる人々を基督教徒として歡迎、愛憐するが如きとあるも亦眞實なり、然れども是等の事實を理由として、誤謬の思想を辨護するとも出來ず、又思想を以て潔められず、且つ確定せられざる感情の神秘主義をも庇護すると叶ふへからさるなり、蓋し人が神に關する知識に就て得らるる可き極度の明白、精確、完備、統一を得んとを求むるば、是れ其合理性の自然に然らしむる所にして、又其道義上の責任たればなり、

扨神は教義、教系、及ひ宗教よりは全く別物なる自己を啓示し、而して教會の最良なる思想は、抽象と合理とを歸順せしめて、以て基督教徒の意識と、歷史上の基督及ひ基督の國に於て顯現せる具躰なる靈的實躰と正當なる總合を爲さしむるの傾向ありとの事實に關して、此に注目を要すへき三要點あり、

其第一點は、吾人が最も明白に、且つ最も信認すへき完全の知識を得るとは、全く此方法に在ること是なり、元來此事は是れ神に關する吾人の知識に於て然るのみならず、萬有と人類に關する吾人の知識に於ても亦然るなり、吾人は具躰的實躰を觀察、攷究するとに由て原理、法則及ひ組織に關するの知識を發見す、されば永遠、不朽なる數學の原理の如きも、具躰的形躰にて顯はる、今夫れ萬有は吾人に示すに星學を以てすることなし、星學なる者は只だ吾人が星學系統を發見す可き地球及ひ諸星を觀察、研究するに由て初めて形成するとを得るものなり、而して斯く發見せられたる上に於ても、星系其物には何の意味も、何の價値もあらざる者なれとも、只其宇宙が實在せる所の者と同一なる形躰を吾人の知能描出するあるが故に、意味あるものとは、なるなり、されば如何なる場合に於ても、萬有は單に其運行せる有樣に

て吾人の前に顯はるゝのみにて、決して吾人に與ふるに形而下學を以てせず、此學術は是れ單に萬有を觀察、攷究して、而して其實在せる儘の實躰を思想中に理會するよりして創設さるゝなり、神の啓示に於けるも亦之れと同一の順序を經由せざるを得ず、即ち神は決して吾人に神學を與へざると、尙ほ萬有の學術を與へざるか如し、神は只だ吾人の衷と前とに活動し、吾人は之を研究して以て神の性質と、其人類と宇宙に對する關係とを知り得るなり、是の如き觀察と思想との結果の、出來得へき丈明白に、且つ組織的に表現したる者は即ち是れ神學なり、吾人若し出來得へきたけ研究をなすときは、則ち羽雀も尙ほ一類典を成す丈けの知識を啓示すべく、單簡なる一個の歷史も、能く無限の思想境を開放し得へし、見ずや、夫の短簡なる基督の生涯は、克く神を顯はすとを、

注目すへき第二の點は、下の如し、即ち吾人の說式と敎系に附帶せる困難とは、其誤謬に陷ることあるといふことよりも、寧ろ其敎系、說式の正當なるにもせよ、吾人が言語と、抽象命題とを通過して實躰に造るとをせずして、只だ此二者の上に拘泥するに在りと云ふと是なり、夫れ學術なるものは何の學術たりとも、獨り書籍よりの

み得らる可からず、されば星學者は天躰を觀測せさる可からす、化學者は化學室に在て試驗を行はさる可からす、植物學者と動物學者も亦た植物と動物を攷究せざる可からず、未た曾て日月、星晨を實見したりしとあらさるの人は、星學に就ては極めて狹隘なる知識を有するなる可し、未た曾て動植物を見ざるの士は、動植物に關して狹隘なるの知識を有するなる可し、是を以て吾人の遵奉すへき敎義は、吾人神が其作用を以て自己を啓示するときに、經驗に由て之を知らさる可からずと云ふに在り、吾人は吾人の論式と敎系とを通過して其表言せる活ける神に造らざる可からず、元來神の啓示は廣大にして赫燿たると、猶ほ宇宙の如し、吾人は日々宇宙に在て神を發見せざる可からず、神の恩惠と日に新たに觸接して、以て吾人の舊知識を新にせざる可からす、而して又吾人が由て以て生存せる身邊の光線を受くるが如く、日に新に、日々に新に之を納受せざる可からず、聖書中には神の啓示をば大陽に比較せるとあり、學術は吾人に示すに、光線の常に活動して以て吾人の視力を支配する原則と理法を以てす、然れども大陽は間斷なく其光輝を射出しつゝありて、吾人は常に新たに之を受けざる可からず、然らずんば則ち吾人は視ると能はざる

なり、之と仝樣に神の啓示を攷究するに就ても、吾人は神の由て以て活動し、而して吾人の是非共に循由せさる可からさる不易の原則と理法とを發見するなり、然りと雖ども神の啓示は間斷なく一切の萬有に、一箇人の經驗に、人類の歷史に行はるゝものなれば、吾人は常に新に之を受けざる可からず、然らずんば則ち吾人は神を知る能はざるなり、蓋し前の場合に於て、常に新たに光輝を受けざる可からざる事が視學を廢滅し、若くは其價値を減少するとあらざるが如く、后の場合に於ても、亦た新たに神の啓示を受ざる可からざる事は、神學を廢絶せしめ、若くは其價値を減少せしむるものにあらざるなり、

第三に注意すへき事は、即ち此神に關する知識は眞正の基督教的生活を現實する爲めに必要なること是なり、夫れ知識なる者は生活の指導者、刺擊者、及ひ勢力として價値あるものなり、基督教徒の生活の理想は、人間生活の眞正なる理想なり、是れ神に於ける信仰の生活なり、神と人とに對する愛の生活なり、献身の生活なり、誠實且つ勇剛の生活なり、夫れ人類に關係する限り、地上なる神の國に於て此理想を現實するとは、是れ神の一切の啓示の終極なり、然り而して是れを現實するとに關し

ては、單に論式、教系及ひ書籍の知識のみならず、亦た神に關する知識もあらざる可からず、是れ人間が神の前に在て、常に之に信頼し、之と親交して以て生存せんが爲めなり、

第二編

絶對者として宇宙に啓示せられたる神、

如何なる思想と雖とも、絶對を否定するの地位に立たず、去れば最も熱心に絶對の思念に抗敵して論ずるの人と雖とも、亦た其論の中に絶對を自定したり、……

……ハルトマン氏「精神の宗教」、

古來人類には、諸種の制限を離れて永遠に存在せる者との念の存するあり、……

……吾人は思想の法則の爲に、自ら此絶對的存在に就ての意識を超脱するを妨遏せらるゝなり、蓋此意識は是吾人の本我意識の反面なればなり、而して吾人が有する信仰の確否を測度すべき唯一の方法は、是等の信仰を變更せんと務むる手段、勢力に、是等信仰が反對して永存する程度の如何に在て存するが故に、一切の時、一切の事情の下に永存して、意識の滅する迄滅する能はざる者は、一切の信仰中最高の確實性を有するものと結論せざるを得ず、……勢力の永存を定言するは、是れ取も直さず、始なく終なき獨立の實躰を定言すると異なるところなし、……

……形而下學の公理は必す其通有の基礎として絶對的實在者を掲げざるを得ず、……之なくんば則ち宗教は其主題たるべき事實を有せざるなり、之なくんば則ち學術は、其主觀的たり又客觀的たるを問はず、皆其缺くべからざるの下題を表失するなり、吾人絶對的實在者を擧けずしては、内部の現象に關する理論を建設する能はず、且つ絶對的實在者即ち永在する實在者を掲くるに非らずんば、則ち吾人は外界的現象の理論をも建設すると能はざるなり、……此の如きもの、是れ即ち積極的知識の説を成り立たしむべき基礎たるなり、吾人が到着せる公準は、證明よりも一層深遠に、――明確なる認識よりも尚ほ一層深遠に――心意の本性其物の如く深遠なるものにてあるなり、而して之が權能は其他一切の者の上に超絶す、何となれば此は是れ只に吾人の意識の本性に賦與されるのみならず、之を賦與せられずして形成せられたるの意識は、吾人之を想像せんと欲するも尚ほ能はざればなり、……其積極的存在は是れ意識の必要なる下題なり、されば意識の繼續せん限り、吾人は寸時たりとも此下題を離るゝ能はず、斯の如くなるが故に、此下題の組成せる信仰は、何等の信仰よりも遙かに崇高なるの證據を有す、――ヘル

ペルト、スペンセル氏「原理論」、

宇宙の秘義なるものは是れ一の事實たるなり、――單純なる虚躰に非らずして秘奥なる實在者たるなり、――ウヰルヘルム、マヤー氏「基督教本性」、

此無碍者に關する觀念は、吾人が意識の背面に於て必然的に生出し、而して一切の思想が依て以て其作用を始め、且つ一切の思想が一切の有碍にして表現せられたる實躰を經過し、終に無限、凡碍なる者を確認して始めて休止するに至る所の第一根元の前提なり、――フヰヒテ氏「宇宙の有神的觀察」、

第八章

絶對者

吾人は今、神果して自己を宇宙に啓示したるか、若し果して然らんには、如何なる者として彼は自己を啓示したるか、而して吾人自己の經驗に啓示せられたる神に於ける吾人の自生的信仰は、果して是等の啓示の確定する所たるかを確知せん爲めに、吾人の攷究の及ぶ限り宇宙を探究せざるべからざるなり、

第一着に、吾人は絶對、無碍、凡碍なる實在者の宇宙に啓示せられたるを發見すべし、此一事を充分確定し置きたる後、吾人は歩を進めて、彼が斯く啓示したりし限り、絶對者の何者たるやを確定すべし、而して吾人は宇宙の存在と、萬有の本性と進路と、及び人類の本性と歴史とに於て、其啓示を攷究すべし、然る後彼は基督と其王國の建設とに於て自己を啓示したりしや否やを討求せんと欲す、元來此事は是れ人類の歴史に於ける神の啓示の一部として、一般啓示論中に攷究さるべきものなり、然れとも此事たる、斯く神の歴史的啓示全躰と相合一するものなると同時に、其人間

の靈的生命及び發達の寰内に於て、啓示の極點として重要の地位を占むるを以て、吾人は吾人の研究に於て、此事に關して別に一の場所を與ふるの必要を感するなり、

斯の如くにして、神の存在の證據と、神の性質の證據とに於て、吾人其間に統一の存するあるとを發見す、此等の證據なるものは連絡なき別々の議論にあらずして、一の繼續的且つ進歩的なる啓示の發達せる者なりとす、されば吾人の意識に於ける神の啓示を以て始め、進んで之を宇宙に於ける神の啓示に當てゝ試練すれば、則ち吾人は其間に一の繼續せる神の啓示あるを發見す、先づ絶對者として一切の現象中に啓示せられ、次には物系中に活動して、其進化の中人類の出顯するに至る迄、其中に活動する理性として啓示せらる、次に靈系中に在ても、吾人は神が道義的政治と教育と、人の靈性的の發育との中に在て絶對理性として活動する自己を啓示するを見る、最後に人間が之を受くるの準備を爲したるときに當て、基督と聖靈とによりて、神は罪惡より人を救拯し、以て其義と善との王國を人類の間に建設する者として自己を啓示するなり、是等一切の啓示を通由して、吾人は進歩的に絶對者の性質に就て、益々大に益々明なるの知識を得るなり、

自然神學に於ける英米の著述家は、神に關する人の知識の本原は、意識に於ける神の啓示に在りと主張するの習風を有せず、又神の存在に關し進んで宇宙に其證據を尋求するに當りても、彼等は通例絶對者の存在に關する合理的直覺を以て、理性に具はれる必至の原理にして、又思想の法則たりと承認し、以て立論するとをなさいりしなり、實に彼等は絶對者の觀念をは、自ら原因法に由りて其存在を證明するを得べしと思考せる第一原因としてのみ承認し、而して直ちに進みて神の有心性に就て宇宙に其證據を求めたり、されば是等の理由の爲めに、彼等の論說は皆な殘酷なる批評の攻擊する所となりて、其議論の確實なるとを否定せらるゝに至りたり、

吾人は今此攷究に在て、第一に絶對者の存在するとを發見すべし、

余の所謂絶對者とは、自己と相離れて獨立し、且つ自己の存立に必要なる或る實躰に依賴し、之れが爲に制限せられて以て存在するとをせざるの實在者を云ふ、絶對者とは其存在に對して、何等の先行せる若くは自己の外なる原因に依賴するとな

く、又其存在に於ては、自己と相離れて獨立せる何等の必然なる制限若くは關係の下に限局せらるゝとなきものを云ふ、

扨是より吾人が絶對者の存在を信するに就ての論據を考明する所あるべし、

夫れ絶對者存在すと云へるとは、是れ合理的たる人の本性に含蓄せる理性の必然、竟究の原理たるなり、蓋し此信仰は何かなる研究の線路に於ても、思想の運用を完成するに對して、自證的に必ず起るべき合理的の直覺なりとす、

凡て存在者に關するの知識に於て、吾人は絶對者の存在を知ることを得るなり、今若し物存在すとせば、則ち何物か永遠に存在せしものたらざるべからず、絶對にして原因なき、の元始ありと云ふとは、是れ妄にして思考すべからざるの論なり、

又有原因的なる物を知るときは、則吾人は必ず無原因的實在者の存在せざるべからざるを知るなり、今若し吾人萬有の進路に勢力と云ふ實躰あることを許容して、實在の各元始と變化とには必ず原因ありと確信するときは、則ち吾人必ず自ら結果にあらずして、一切の變化中に永存し、以て其全連鎖の無碍なる根據となる一勢力あるを知るなり、若し夫れ斯の如き者あらさりしならんには、則ち勢力は忽ち消滅すべく、萬有の進行は離散すべく、餘す所は只た之が先行となるべき者もなく、繼果となるべき者もなき、空虛の先行と繼果とあるのみ、蓋し此道理は勢力永存と云へる學術的事實にも亦た同しく含蓄せるものなり、スペンセル氏言へるとあり、曰く、

「宇宙の永存は即ち是れ一切の現象を經由して吾人に顯表せる未知なる原因及び勢力の永存なり」と、

之と同しく合理性に關する知識に於ても、吾人は必ず絶對理性を掲け來らさるを得ず、吾人に知識を與ふる所の推理の法を以て事理を結論することを得る所以のものは、是れ一に一切の思想を管理する普般眞理に依頼するによる、然り而して吾人是等普般眞理を確實なる者とするは、則ち其中自ら無碍、普般、無上にして、何の處にも、何れの時にも、常に同一にして不變なる理性の存在せることを是認するに外ならず、若し絶對理性にして存在するとあらずとせんか、則ち理性及び合理的知識なるもの一も存在せざるべきなり、

又吾人が一切を包含せる系統の中に萬般の事理を統一して以て之を知らんとを求むるは、是れ只た宇宙が絶對にして無碍なる獨一者の表現に外ならざるが故な

るとを發見す

之を以て見れは、絶對にして無碍なるの存在者必ずあらざる可からずとの知識は、思想の各方位に於て、自明的に生起するものなり、然れば吾人が原始的且つ普遍的の眞理にして、合理的直覺力に由りて知らる可き者として之を承認するは宜なりとす、絶對者に關する觀念と、其存在に就ての信仰とは、人間の意識の背面に在りて、又人間の思想を經過せる一切の知識の基礎に在り、されば絶對者の存在と云ふとは一切の有限者、勢力、推理的及び合理的知識の可能性の伏線と成居るなり、此合理的直覺力に由りて絶對者は吾人に啓示せらる、而して果して之に就て尚一層知るとを得べきや否やは、吾人の今攷究せんとする所にあらざるなり、埃及國のサイスに於けるイシス神の聖殿に左の如き銘あり、曰く、「余は存在し、存在せし、及び存在すべき者なり、人類は未た曾て余か面被を擧げざりしなり」と、夫れ假令禮拜者は之が面被を擧くる能はざりしとするも、然れとも彼は少くとも面被の後には永遠なる實在者のありしとをば理會したり、思ふに宇宙は此聖殿の如きものなり、其法則と運用の爲に絶對者は被覆せらる、然れとも理性は自己の明光を以て之を索、

究して、以て此被覆の上に、絶對者の實在を宣言する銘辭を讀むなり、

然るに此に反對論あり、其言に曰く、絶對者の存在すると云ふとは、是れ理性の必然的公準に非らず、何となれば宇宙は是原因的作用と結果との永遠なる連鎖として解釋さるるを得へけれはなりと、此論に對する普通の答辨は、即ち下の如し、曰く、此反對論は是れ自家撞着なる迂論たるなり、夫れ各點に元始あるの連鎖は決して永遠的なる能はず、又各點に於て相依頼せるの連鎖は決して獨立なる能はずと、然れとも右の反對論に對する答辯は、之よりも尚一層深遠なることを得べし、蓋し連鎖と云ふとに關して缺く可からざるの觀念は、一切の變化を通して、變化するとなくして永存する者ありと云ふとなりとす、若し此事なしとせん乎、則ち各變化毎に絶對の終局と絶對の元始と存すべく、嘗て存せしもの終を告げ、嘗て存せざりしもの茲に始まるべし、然るに若し原因的作用と結果との連鎖ありとせは、則ち一切の變化に通して變化するとなく永存する所の者ある可きなり、而して此一切の元始と連鎖の變化とを通じて永存する所の者は、則ち連鎖に關せず、獨立して元始あらざるの物たるなり、此意義たる、是れ勢力永存と稱する學術的法則に含有せる所のも

のなり、所謂勢力の永存なるものは、一切の變化を通して宇宙に潛伏し又活動せる力の量は、常に同一なるものなりと云ふにあり、

此に又一の反對論あり、其說に曰く、絶對者の存在せると云ふことは、合理的直覺力に據て思想の第一原理若くは理法として知らるゝ者に非らずして、原因の理より推論して生ずるの結果なりと、然るに此原因の理なる者は、單に宇宙に於ける原始ある現象にのみ關係す、只夫れ此原始ある現象にのみ關係する者なるが故に、此理は決して萬物の絶對なる境域に達する能はざるなり、且つ此原理は元來只だ或る觀察せる變化若くは原始に關せる思想よりして、初めて意識中に生出する者なるが、此變化と云ふ事には、只だ有限なる原因のみあれば則ち足れりとす、而して若し又有限なる原因も亦た其原始を有する者なるとを見るとするも、其所謂原始に對して原因の理が要求する所は、只だ一の有限なる原因に外ならず、然らは則ち各事物の原始には必す原因なる者ありとの信仰は、必ずしも無原因の原因ありとの意義を含有せず、只だ有限なる結果と原因の中を絶へず轉廻するを以て足れりとする者にして、決して之に超へたる深遠の意義を有せざるなり、之に反して絶對者存在すとの信仰は、是れ理性の根本原理にして、結果の連續を觀察するとき人の意識中に明表する者なり、然れども決して此連續よりして推理したるの結果にはあらざるなり、

從來有神論者にして、神の存在は原因の理法に循由して、宇宙の存在するとより證明され得べしと主張せしもの少なからず、然れども此論は是れ適々以て左の反對論を招くの媒介となりしのみ、曰く、原因の理法は神の原因をも要む、曰く、此理法は宇宙が原始を有するの實證を擧示せざる以上は容易に適用すべからざるなり、曰く、假令宇宙に原始ありとするも、尚ほ是れ有限の結果たるが故に、只だ有限の原因あれば足れるなりと、然り而して是等の有神論者は獨り原因の觀念のみにて是等の疑問に答辯する能はざるなり、蓋し絶對者の存在は原因結果の理より推論したる結果にあらずして、理性の究竟原理なり、思想の必然法なり、如何なる思考も之を超絶する能はず、又之が支配を脱出する能はず、

此外又一の反對論あり、其說に曰く、絶對者の存在と云ふ事には調和すべからざる程の矛盾を含むなりと、スペンセル氏曰く、若し夫れ吾人無原因なる者存在し得る

事を許認するときは、則ち物には必ず原因あるべきものなりと自定すべき理由あらざるなり、若し第一原因が支配せる有限境の外に、吾人が無限的なりと思惟せざるを得さる第一原因の支配するとなき境域の存在する者とせば、――、吾人若し原因を有する有限者を圍繞して、原因を有せざる無限者あり認容とせば――則ち是吾人は默々の中に全然原因の理なる臆說を捐棄するなり」と、元來絶對者の存在說中に右の矛盾、及び其他の矛盾を含有せりとの言の出づる所以を尋ぬるに、絶對者の存在すると云ふとは、宇宙が原因の理に憑據して存在するとより之を推論し來れるものと臆想するよりして然るものなりとす、然れども此に注意すべきとあり、即ち此事に對する思想の終極法なる者は、一に非らずして二なると是れなり、其一は原始ある事物に干係して、凡そ原始には必ず原因あらざるべからずと告白する者にして、他の一は、原始なくして無碍、絶對なる實在者あらざるべからずと斷言する者なりとす、此の如く論斷するときは、則ち決して一の矛盾あるを見ざるなり、何となれば原始なき者あらざる可からずとの斷定言は、決して何にても原始ある者は原因なかるべからずとの定言に反對する者にあらざればなり、思ふにスペンセル氏こそ、實に此の如き矛盾に陷落せる者なれ、氏は上に引用せし反對論に反對して、自ら萬有に原因あるとを許容しながらも、一方に向ては非常に勁烈なる論法を以て、先行的原因を有せざる絶對力存在すと定言したり、所謂「第一原因」なる者は原因を有すべきものにあらず、

又他の反對說に曰く、無限若くは絶對を知ると云ふ知識は、無限若くは絶對なる知識ならざるべからずと、フオイエルバッハ曰く、「若し汝無限を思考するときは、則ち汝は自己の思想力の無限性を認知、定言するものなり、若し汝無限を感ずるときは、則ち汝は自己の感覺力の無限性を認知、定言するものなり」と、

余の解釋する所を以てすれば、此に反對論者が所謂絶對の知識なる者は、單に之を知る所の心意に依るのみにして、之に自己を啓示する外界の實躰の作用一も加はるとなきの知識を指すなる可し、若し夫れ反對論の言ふ所果して余か解釋の如しとせは、則ち人間は神に關しても、亦た有限なる物に就ても、決して論者が云ふ如きの知識を有せざるなり、元來斯の如き儀型的にして獨立なるの知識は、獨り絶對理性に在て存す可きのみ、然れとも有限なる實躰に關する人の知識にして、已に右の

意味に於て絶對ならずとせは、神に關する知識は何故に又絶對ならざるべからざるや、夫れ絶對者は人間の本性を通由して、思想の各線に於ける終極、必至の公準に於て自己を啓示す、而して人間の心意は其上に反應して以て絶對者の存在するとを知るなり、

若又反對論者が絶對の知識と云ふとを以て、絶對者に關する完全百備の知識なりとせんか、亦た是れ一切の知識に背戻せるの論たらずんばあらず、何となれば人間が斯の如き知識を有せるものとては、一物も之れあらざればなり、試に見よ、何物にても、人間が一度注意したる物に就て熟思するとを繼續し行くときは、必す究竟人間が誰れも答辯する能はざる困難の疑問を生出し、以て自然絶對者の感想其心に浮ぶに至る可きにあらずや、是を以て各事各物の人の心中に啓示せらるゝや、之と同時に必す亦絶對者を其思想に伴示せざるはなし、然らは則ち此の反對論は、是れ絶對者に關する知識に反對せるが如く、其他一切の知識にも亦同しく反對せるものなり、人の知識に限局あるの事實は、決して其知識の眞實なるとを妨けざる也、吾人は此事に關して尚ほ聊か言はざるべからず、即ち人間の默々たる意識中には、

尚ほ明白に形成せられず、又思想中に曉得せられざる信仰ありて、此信仰は吾人の思想、行爲を支配するとあり得べしと云ふ事是れなり、されば小兒及び蠻人の心意中には、各の變化に原因あり、二直線は場所を圍む能はずと云へる原理、及び理性に存する其他の原理只彷彿の間に備はり、又人の思想と行爲を支配する常智の信仰にして、其結論と行爲に對する理由として他人に向て說明する能はざるのみならず、自己にさへも之を解說する能はざるが如きもの少からず、然りと雖とも是等の一切の場合に於て、此の如き知識は、假令之を解說する能はずと雖も、然れとも之によりて其眞實の知識たるを失はずハミルトンは此種の知識を稱して「未書の總念」と云へり、人類發達の初級に於ては、人の宗教的信仰及び神の觀念は、此種類に屬するものなり、斯く其初め陰在意識中に、明寫せず又た確定せられずして存する原理と觀念とは、人類の進步的發達と共に、漸次に文明の中に波及し、以て實驗學、數學、哲學及び神學の大敎系の中に敷衍せらるゝなり、創世記第一章の記者の心中には、不十分ながらも、神は己の像に摸して人類を創造せりとの觀念、存在したりしものなるが、人類の歷史全躰と、基督及び幾年代に通する其王國の建設に於ける神の啓示

とは、此眞理の意味を顯示しつゝありしなり、而して今日に至るまで其意味と其實際の適用とに於て、尙ほ未た充分發達せざる所あり、之と同しく、絶對者に關して未嘗の總念を有するとも、亦た人のなし得べき所なり、

然れとも神及び神と關係を有する宇宙の知識と、之を認知し、形成し、組織し、及び適用するとに於て、如何程の進歩を人類がなし得たりとも、絶對者は常に人と其知識とに超然せざるべからざるなり、何となれば彼絶對者は人間思想の形狀に於て、完全に理會して以て抱持するとは決してなし能ざるればなり、然れとも此事實あればとて、此知識は其眞實の德を減するものにはあらず、

マンセル氏も亦た一の反對論を主張して曰く、「物躰の一部的知識を有すると云ふとは、是が一部を知ると云ふ意味にして、全躰を知るの謂にはあらざるなり、然れとも世人が知らるゝとを得べしと想考する無限者の一部は、其一部自身が無限なるか、若くは有限なるかの二樣ならざるべからず、若し之を無限なりとせんか、則ち是れ前と同一の困難を顯出すべし、將た之を有限なりとせんか、則ち吾論點は認許せられて、以て吾人の意識の有限なる事物にのみ限嘗せられたるを知るべしと、ハミルトンも亦同一の形狀にて反對論を提出したり、然れとも此は是れ頗る明白なる言語上の議論なり、夫れ物に關する吾人の知識の一部的にして且つ不完全なるにも拘はらず、其個存質（インデヴィデュアリター）と全存質（ホールネス）とに於て此物躰を知るとは、是れ容易の業たるなり、此に一人あり、其住家余が家と街路を隔てゝ相對せり、然れとも余は彼と僅に相知れるのみ、即ち余は彼に就て一部的知識を有せるのみ、然るに余が此一部的知識は、余か彼と相親昵するの度彌々進むに隨て、次第に完全に近くべきなり、今夫れ反對論者の言ふ所に據れは、之に關する余の知識は一部的なるが故に、余は其全存性に於て此人を知らず、只た其一部を知るのみと斷論し、且つ問て曰く、此一部果して以て全躰の人となすに足るべきかと、若し之に答へて然りと云はゝ、則彼れ揚言して曰く、汝は全躰の人を知る、然らは則ち汝の知識は一部的に非らざるなりと、若し又上の疑問に對して、否な是れ一部なりと云はゝ、則ち彼又得々として曰く、然らば則ち汝は此人を知らざるなりと、余は此の好辨家に答ふるに下の語を以てすべし、余は其人を人として全存的に之を知る、然れとも彼に關する余の知識は不完全なるなりと、之と同樣に吾人は一の絶對的靈たる神を知る、然れとも神に關する吾人

の知識は素より不完全なるなり、されはポウロ曰く「我れ今知ること全からず」と、吾人は時に又下の如き反對論に逢着す可し、曰し、同種類の者只能く同種類の者を知ると云へる格言は眞理なり、此に由て之を言ふときは、則ち有限なる者は絶對者を知る能はざるなりと、此論は是れ明かに此格言の適用を誤りたるものなり、若し夫れ論者の適用を以て正當なるものとせは、則ち人が神を知らさると均しく、神も亦人間を知ると能はずと斷論せざるを得す、世豈斯の如きの理あらんや、夫れ人間は其合理的靈たるの點よりして云ふときは、永遠の靈たる神と同種類のものなり、故に上の格言に從はんに、人間は假令神の無限性を解説するには、只た否定的にのみ爲し得るはかりと雖とも、之を靈としては、能く神の積極的屬性を知ると能はるなり、假令余は有限にして、神は無限なる者なりと雖とも、合理的靈性としては神の像に於てあるが故に、神を知ると能はるを得ずんばあらざるなり、去れば無限者の存在するを知る爲に、必すしも無限性を要せざるなり、若夫れ同者只能く同者を知ると云ふ格言を、直譯的に其極端まて押し進むるときは、則ち見識に等き誤説に陷落するに至らさるを得ず、此誤説や、哲學の諸系統に於てさへも廣く行はれたる者にして、知識は其目的物の智力的反映（インテレクチュアル、イメイヂヴアレント）なる者ならざる可からずとの事實を看過して、以て苟も目的物は其物自躰、若くは少くとも其影像の實際、心意中に表現するに非らずんは則ち知らるゝと能はずと主張する者なりとす、扨人間の思想は木石と同一なると能はず、故に人は木石に關するの知識を有する能はず、是を以て人間は之に關して只た觀念を知るのみにして、其他何事をも知る能はざるべく、人間の知識は決して其本我意識以外に達せざるべし、是に至て絶對者其物は普通の本我となるべく、而して之が結果は唯心的凡神論となるの外なし、

絶對に關するの知識は絶對、無限なるの知識たらざる可からずと云へる反對論は、其形式の如何に關はらず、悉く絶對者の外は何者も神を知ると能はずとの意義を含むものなり、されば之より推論するときは、則ち神は己を知ると能はるとを得べき實在者を創造すると能はず、若くは絶對者の存在する事實を知るとだも爲し得べき實在者を創造すると能はずと云へる結論に歸着せざるを得ず、然り、上の如き反對論は斯の如きの意義を含蓄するなり、されば此反對論を以て正理なりとするときは、則

ち神は是れ最早絶對者にはあらずして、自ら有限なる宇宙を創造すると能はず、若くは其中に在て合理的實在者に己を啓示すると能はずと云ふ不能力の爲めに限局せられたる者となる可し、

右の如く反對說は悉皆破壞せられて餘燼なきに至りければ、乃ち最後の根據として下の如き說を提出したり、曰く、絶對者に關する觀念は、是れ只た人間自身の巨大なる影たるに過きずと、抑も反對論者は確信して謂へらく、人類は絶對者の存在するとだも知る能はざる程に限局されたる者なりと、然らば試に問はん、斯迄に限局されたるの存在者に在りて、其地平線上に斯く計り巨大なる影を生ぜしむる者は果して何物ぞや、而して此存在者の爲に妨碍せらるゝも、尙彼の周邊を圍繞し、此影を照らして以て彼の眼中に映射せしむるの光明は是れ果して何物ぞや、又若し人間にして果して絶對者の存在を知ると能はざる者ならしめは、則ち此偉大なる觀念は如何にして其心中に生出したるや、如何にして斯く程迄確く人を信認せしむるか、夫れ證族は其文明人と交通せざるの時に當りては、決して其方言中に野蠻と云へる意味の語を有せざりしなり、然るに彼等が一度文明人と交通して自ら其蠻族たるとを知りたるときは、則ち彼等が已に文明の光輝中に照らされたるの時にして、少くとも文明の行路に一歩を進めたりし時たらずんばあらず、人の其服屬性と有限性とを知るとは、是れ其中自ら無限と絶對の觀念を含むなり、而して此觀念の存在すると云ふとは、是れ取も直さず、人の已に絶對者の光暉中に在りて、若し其絶對者が果して存在して以て自己を人に啓示するときは、則ち人は之を知るとを得ると云へる事實を表顯するなり、

斯の如く看來るときは、則ち右の反對論は、是れ彼の陳套にして且つ幾回となく辯倒し盡されたる知識相對說を、文を弄し、辭を妙にして言明したる者に過きざるなり、其說の大略に曰く、人は只た其合理的智能力を經由してのみ物象を知るとを得るが故に、元來何者をも知る能はざる者なり、然り而して其客觀的實在と信認して觀察し居る物は、是れ只た幻影のみ、自己の主觀的印象を外に投射したる影像のみと、是れ此反對論は表現的若くは合理的なる一切の直覺力を信せざるものなり、人間一切の智能と理性とを信せざるものなり、而して其理由を問へは、此假定せられたる知識なる者は、素と之を知る所の心意に相對したる者にして、人は只た其智力

を經由してのみ事物を知るか故なりとのとなり、吾人は小麥の存在を信せざるの人が、絶へず吾人の連枷の下に空藁を投すれはとて、其爲に一度打落したる藁を再び打落す如き業に從事して、貴重の歳月を消費するの義務あらず、此かる務めは眞平御免なり、

右の如く論し來れは、則ち絶對者存在すとの事に關して吾人の有する知識の眞實なる事に對する異論の勢力なきは明白なりとす、

論して此に至り、諸種の異論は悉皆破れ畢り、吾人の主張する所の者は確乎不拔となりたるが、吾人は尙ほ一の論すべき事を餘せり、即ち右の知識の眞實なる事と、其起原とに關する吾人の意見を一層深く證定すると、是れなり、

抑も絶對者の存在を知るとは到底出來得べからざるの事たるなりと論斷するは、是れ何等の存在物をも知るとは出來ざるなりとの意義を含めるものなり、されば此說を推し行くときは、則ち忽ち全くコントの實驗說若くは現象說の種類に陷落すべく而して純全たる不可知說若くは普般懷疑論となるに至る、若し絶對者あらずとせば、則ち永存するの實躰はあらざるなり、果して然らば啻に哲學及び神學の原理のみならず、形而下學の原理も亦た轉倒するに至るべし、何となれば學術は物質及勢力の量は恒に同一にして、增すともなく、減するともなくして、永遠に存在すと云へる公準に基因する者なればなり、又反對者の說に從ふときは、則ち宇宙の連續統一及び實在は皆無に歸し、吾人人類は是れ幻影の宇宙に於ける幻影と化し去り、且つ此幻影を實物と思惟するの誤謬に陷れるものたらさるを得ず、

此に又一說あり、其言に曰く、永存する所の者は唯一の力あるのみと、然れとも作用者なくんば作用ある能はず、動かすものなくんば則ち動ある能はず、實在者なくんば力ある能はずとは、是れ思想の必至法たるなり、吾人は動學的に物質を說明することを得べし、元子及分子は唯だ動力（ダイナミッド）に過きざるものなりと主張するを得べし、然れとも斯くすればとて、到底動力なるものをば實躰となさざるを得ず、何となれば統一及び同一を保ちて永存する勢力は、是れ實在者に取りて必要なる資質なればなり、

實に絶對者の存在に關する一切の知識を否定する者とては、是れ實在者に關する一切の知識を拒み、之を現象のみに限るの徒に過きず、故に形而下學は斯の如き僧

輩を度外に措けり、コントが原因、勢力、元子、分子、精氣(イテル)は是れ一切の學術より嚴重に放逐せざるべからざる形而上觀念たるに過ぎずと主張して、以て其實驗理學を著作しつゝありし時に當て、學術家輩は既に早やく勢力對立、及び勢力保存の理法を發明しつゝありたりしが、漸次研究を積むに隨ひて、右の放逐すべしと宣言せられたる觀念は、遂に一切學術的研究に於て必要の者となり、形而上觀念に對する客觀者の實在と、形而上原理の眞理なることゝは、形而下學の存亡の機を決する程のものとなるに至りたり、

此に又一の論ずべき確證あり、即ち歴史の示す所に從へば、一度人間の心意が學術的に物を思考するとを始むるときは、則ち其思考は絶對者の觀念、若くは少くとも絶對者存在すてふ信仰なくしては決して靜止する能はさること是れなり、されば

フォイエルバッハの語に曰く、「吾人は能力の極度、即ち之より大なる者は思考せられ能はざるの點に達せざる內は、自ら心中に空虛、欠乏の存するを感して、不幸、不滿なりとは、是れ一般の眞理なり」と、ツェレルも亦た曰く、「人間の靈は各力中に根元力を發見し、一切實在中に根元實在を發見し、雜駁なる各個の理法、最高の統一に歸若するに至るまでは滿足する能はざるなり、蓋し此根元力は則ち事物に於ける至奧の力にして、又其の授靈力の如し」と、

此道理は古來世の大思想家輩が、皆悉く熱心に絶對者に就きて攷究を凝らし、爲めに此事に關する議論が哲學史中の大部を充たすを見ても亦た明白なり、ラヴァイソン言へるあり曰く、「一切知識の根本に於て、相對的知識が其の對照者として相對立すべき絶對的なる者ありと云ふ事は、是れ二千有餘年の古代に在て、當時盛に行はれし普般相對及び變動の理論に抗してプラト派の建設せし說にして、即ち是れ形而上學の爲に道途を準備せし者なり、否な形而上學の爲に道を備ふるよりも尙一層必要の業を成就したり、即ち絶對は相對を考察する唯一の方法なるが故に、相對は絶對を俟ちて初めて理解するとを得るとの事實を顯示したりしなり、而して形而上學は其不朽なる建設者(プラト)の手裡に在りては、尙ほ一層の大事を成就したり、何となれば則ち睿智者が依て以て相對者を計較する所の此絶對なる者は、即ち睿智者其物なりとの事實を論示したればなり」と、サー、ウ井リアム、ハミルトンは吾人に告けて曰く、「ゼノファニーズよりライブニッツに至る迄、無限、絶對、無碍と云ふと

は是れ思辨の最高原理を形成したりしなり」と、然り、此長久の時代に亘りて、最大の心意と至深の思想家輩は、皆悉く絶對に關する問題を攷究するとに從事せり、ハミルトン又曰く、「カントは大功績を成就したり、氏が研究の結果は形而上學の廢止にてありしなり、即ち有限的、相對的、若くは現象的ならざる一切の者は、皆知識の境界以外にありといふとなり」と、然れとも實際の事情は大に氏の云ふ所と異にして、カントの說が啻に形而上學を廢止するとなかりしのみならずして、カントの著書は實に形而上學の研究、殊に絶對の存在に關する研究を奬勵して、以て當時に於ける幾多政治上の騷亂と雖とも、毫も之れが進歩を妨碍する能はざる程激烈の活動を顯はすに至らしめたりしなり、而して斯の如き形勢は獨り日耳曼にのみ限れるにあらず、彼のクーザンが巴理に於て、哲學の講筵を開きたるは、ハミルトンをして有限的の哲理に關する論文を草せしめたり、ハミルトン自ら謂ひたりし言に曰く、「實際少數の人のみ理會するとを得べき能辯なる敎義の說明に、耳を傾けたるの聽衆は二千人に超へたりしが、此人々は皆驚歎の情に堪へざる者の如く、中には熱心聽取する者甚た多し、兎に角此講筵は巴理及び佛國全躰に、アベラルド以來未曾有の感動を與へたりしなり」と、此絶對に關する攷究に於てはハミルトンも亦た尠からざる盡力を爲したりと雖とも、然れとも氏の目的は此研究の無功にして、文明史全躰に通して斯の如き事に消費したりし思想は、是れ悉皆智力を無用の地に徒費したりし者なりとの事實を證明せんとするに在りたり、而して氏は議論を以て之を證明せんと勉めたり、然れとも此議論は是れ前已に明示せし如く、全く虛僞のものたるなり、

然れともハミルトンはカントと同しく此等の問題を擊破すると能はざりき、氏の次世に於てはスペンセル派の不可知說及び進化說、「カントに還れ」てふ叫聲、及びヘーゲル主義の復興のあるありて、氏の前なる世代に於けると同樣熱心に、且つ一般に靈、物質及び勢力、萬物の究畢基礎及び起元、若くは神の實在に關する一切の問題に就て攷究するに至り、其結果として、絶對者の存在すと云へる知識を否定する者は、只た極めて少數なるに至りたり、

上に述へたる所は、宇宙を非有神論的に說明する種々の理論を抱く人々にも適用して誤らざるを見るなり、スペンセル派の不可知論者、諸種の凡神論者、唯物論者及

び自然神教論者は、皆な人が絶對者存在の知識を肯定し、且つ吾人が理性の第一原理、及び思想の法則として之を知ると云ふことを肯定するの一事に於ては、全く有神論者と契合するなり、獨り彼のコントの如く、知識に關して感覺説を主張する少數の極端實驗論者のみ、此事を否定す、

由此觀之ば、則ち人心は決して絶對の觀念より脱出する能はざる者なるとは明白にして疑ふべからず、何となれば此觀念は暗々の意識の中に永存して、人が現に理論上之を否定し居る時にだも、尚ほ其人の思想を支配しつゝあるものなればなり、されば暗々裡にせよ、明々地にせよ、苟も絶對者存在すと云へる假定のあらざる以上は、人の理性決して其必至の問題を解釋すると能はず、又知力上より得たる所の結果に滿足して安んずる能はず、又其知識の眞實なることを確把する能はず、又宇宙の連續、統一、及び眞實なることをも知ると能はざるに至るべきは、是れ極めて明白なるの道理なり、されば上の議論よりして生ずべき必至の結論は即ち下の如し、曰く、絶對者存在すと云へる原則は、是れ思想の原始、必然の理法にして、理性の至要素、實在者に關する一切の思考に於ける必然の公準たるなりと、是れなり、

以上絶對者に關する觀念起原及び其存在に關する吾人の信仰の説明に於て、余は眞正の意義に於て、神の存在と云ふことに對して、世人の所謂先天的議論を提出したりき、是れ絶對即ち完全の實在者に關する觀念より其存在を證するの議論なり、而して此議論の正確に歸着する爲めには、吾人絶對者の觀念は理性必然の觀念なりと云ふことと、此實在者の存在は必ず此觀念中に包含せらるゝと云ふ事、即ち其存在は理性に對して其觀念の如く必然ならざるべからずとの事とを顯示せざるべからず、而して吾人は既に之を論示したり、夫れ絶對者存在すと云へる事は、是れ合理的直覺性に對して自明なる理性必然の原理にして、實在者に關する一切の知識に於ける必然の預想なり、而して吾人が實在者を知ると同時に、直に一切の思考を支配するものとして出顯する者なりとす、カントは又此事に關する先天的論證を表出したり、氏は「純理之批評」に於て、理性必然の觀念として神に關する觀念を確認せり、然れとも理性が其必至的問題を解釋し、又學術的の知識に於て、宇宙を合理的に曉得せし爲めに必要なるは、啻に神の觀念のみにあらずして、神の存在も亦實に必要のものたらずんばあらず、蓋しカントは絶對者存在すと云ふ事を以て、理性の原

始的原理若くは其至要素と爲し、此外に解說、證明をなすの必要なしとのことを承認すべき筈なり、然るにカントは其現象主義を抱けるを以て、純理を以ては絶對を知るべからざるものと爲し、絶對は存在するには相違あらずと雖とも、然れとも吾人は其何物たるを知る能はざるなりと爲せり、而して後氏は實行理性即ち道義意識の域内に在て、絶對の何物たるを知るを得べき能力を發見したり、

以上述ふるところは、是れ眞正の意義に於ける所謂先天的議論なりとす、

吾人は以上理性の原理に於て、反省的思想の發見したる、神の存在に關する證據全躰に對すべき發程點を發見したり、而して此原理は吾人が實在者の存在するとを知るの場合に於て、吾人の意識に明表され、自明なる者として絶對者の存在を表影するが故に、吾人は人が之を稱して實躰學的論證と謂ひしの至當なるを見るなり、

但し是れ論證にあらずして、思想必然の原理若くは理法なりとす、

夫れ絶對者は宇宙の根據にして、且つ宇宙に表顯する者として理性に顯はるゝなり、故に吾人は絶對中には宇宙を說明すべき一切の潛勢力を包含せるを知る、されば物形的及び靈的の宇宙を探究するときは、則ち吾人は絶へず其中に自己を啓示する絶對の何者たるを知るとを得るなり、而して之をばカントも亦た理性の原理として承認したり、氏の言に曰く、「若し果して相對者ありとせば、相對の全躰も存し、隨て、絶對者あらざるべからず、蓋し前者は只た後者を俟て初めて存するとを得るものなればなり」と、

人間の知識に關する眞正の哲學は吾人に敎へて曰く、知識なる者は其初め實躰的たり、即ち實在者に關するの知識として始まるなり、而して其後に至ても亦常に實在者に關するの知識たるなり、

吾人が宇宙に於て實在者を知りたるときは、則ち必ず又宇宙の根基となりて以て宇宙に啓示せられたるの絶對者を知るなり、

吾人が宇宙に於て勢力の有在するとを知るときは、則ち必ず一切有限能力の元始、不斷原因たる能力として絶對者を知る、

吾人が宇宙に於て原因の存在するとを知るときは、則ち必ず第一原因として絶對者を知るなり、

吾人が物形的及び靈的なる宇宙の本性と進路とに於て理性の表現するとを知る

ときは、則ち絶對者は各人を照す光暉たる絶對理性なるを知るなり、

最后に吾人が宇宙に於て、基督及び其王國を發見するときは、則ち絶對者は普遍の愛にして、人類の贖主たるを悟るなり、

然れども吾人は神に關する此探究に歩武を進むるに先き立ちて、宇宙に關する諸種の非有神的の説を論究せざる可からず、

第九章　絶對者及び非有神論的の諸説、

流石は人情の常として、人皆無神論者と喚ばるゝをば耻辱と考ふ、人情豈に貴からずや、試に見よ、今日實驗論者、不可識論者、及ひ非有神的思想を持せる一切の學派は、皆な口に自己等が宗教と禮拜の目的者とを有するとを唱へて、以て公然無神論者なる名稱を甘受するを肯ぜざるなり、此趣旨に基きて、ハイヂは凡神論者を稱して、「忸怩たる無神論者」と云ひたりき、夫れ此の如く無神論者なる名稱を憎厭するは、是れ即ち天上天下自己は神を有せずして存在すと人に思惟せられ、又自ら若かく考ふるとき、震栗の情に堪へずして、靈魂の堂奥より發出し來る切情たるに外ならざるなり、

抑も文字學上より言へば、無神論者とは單に有神論者にあらざるものとの意なり、予にして若し無神論なる語を用うるとせば、此廣濶なる意味に於て之を用ふるものにして、宇宙を非有神的に説明する一切の説を含むものと知るべし、予は他に丁

度此意味を表明する語なきが故に、且らく之を用ひたり、

無神説は通例神は存在せずといふ積極的知識の定言にはあらず、神はなきものなりとの積極的定言は、是れ通例慣情及び憎悪の念より出てたるの無神説にして、前世記に於て虚無黨及び多數の社會黨が唱道する無神説の如きは即ち此種に屬するものなり、此く無神論は智力上の確信よりは、寧ろ不道德の品性に附着するが如きことありて、神に於ける信仰が、險悪の所行を企て、及び社會を破壞せんとの謀圖に反して、之れが妨碍となるが故よりして世に起るが如きことありとす、或は專制教主の壓制、若くは宗教の名によれる壓虐より起り、或は如何なる方法によりて生するにもせよ、有神論を方外に誤解したるよりして、無神説を激成するもあるなり、十九世紀倶樂部の會長なるカウトラント、バルマーは無神論者の胸臆を揣摩して一文を草し、之を「インデペンデント」新聞に寄贈したり、其言に曰く、「只だ有心的の神を否定、拒絶して而して後初めて道德なる者存立するとを得可し、何んとなれば所謂神なる者ありて、其命令に順從せさる可からずとせば、則ち茲に義務を生し、此義務一轉せば則ち隷屬となり、隷屬は道德を妨遏すへし、何んとなれば道德なるものは、素と自由より成立するもの、即ち他より强迫せらるゝとなく、自ら是認せる所を撰擇する箇人の自由より成立するものにして、隷屬とは全く之れと相反對せる者なればなり、夫れ然り、斯の如く神の意志に隨順するとは、啻に神の奴隷たるのみならずして、又人の奴隷たるなり、何んとなれば神の意志は只だ全然吾人と全一なる人間に由りて吾人に傳通せらるゝとを得る者なればなり、是を以て神に從ふとは、是れ取も直さず神意を十分に説明するに足ると自稱する薄弱の教師等に循ふに外ならず」と、今此議論中の意義を迎へて之を分析するときは、則ち下の如き説に歸着す可し、曰く、政府の權威を用ゐて正當なる法律を强行せしむるときは、則ち之れ人民を奴隷にするなり、曰く、一切政府の權威は是れ必らず吾人の抗敵、破壞せざる可からざる所の壓制なり、曰く、假令ひ如何程正當なる者にても、法律に從ふは是れ奴隷の所業なり、曰く、智慧と愛の永遠の原理に循ふて宇宙を統御し給ふ絶對の理性なる神に從ふも、亦た是れ奴隷の所業なりと、實に亂暴なるの議論と謂つ可し、若し夫れ斯の如き亂暴なるものをも、稱して推理と云ふを得へくんば、則ち此推論の結果は只だ一般の無政府と、全社會の壞亂とあるのみ、然るに此論や、是れ決して虚

想に非すして、實にバクコン及ひ虚無黨輩の現に講説せる所の原理なり、若し夫れ果して此議論を以て無神論を辨護するの最要論法なりとせば、則ち此辨護説こそは、實に是れ此無神説に對する十分の駁論なりと謂ふべし、

夫れ無神論なる者は、通常人間は神に關する何等の知識を有し、又神の存在するとを信仰するに就て何等の合理的根據を有するとを否定するものなり、

神なるものは禮拜者が交通するとを得可き所の絶對的靈なり、之に就てカントの説明せる所のものは極めて正當なるを覺ゆ、其言に曰く、「神なる概念は、事物の永遠なる本原として、單に盲突に動作する自然を含有するのみならず、自由にして睿智なる作用によりて、萬物の主宰者たらざる可からざる無上實在者をも含めり、而して、吾人に對して利害の關係を有するものは、實に獨り此概念あるのみなり」と、

未開人民の崇奉せる多神教及ひ拜物教は、之を無神主義と稱する事穩當に非ず、何んとなれば彼等は自ら造詣し得たる所の絶對的靈に關する最高の觀念に相當すべき、超物的及ひ超人的なる神祇を承認すればなり、然れとも近時の文明世界に於て、苟も知識あるの人士は、正力に是等未開人民の抱持せし如き誤謬に遡るが如き事はあらざる可し、されば近時の無神論は絶對的靈なる一個無上の神に關する一切の知識を否定して、以て自覺的智能、智慧及び愛の神を拒絶する所の宇宙論に歸着すべし、

非有神論的の説は絶對知識に關する其位置に從ふて、之を二大部に類別するを得へし、

第一、絶對者の存在に關する一切の知識を否定するの論説、

第二、絶對者の存在に關する知識を肯定するの論説、

(一)不可議論、

(二)一元論、

甲、凡神的一元論、

實躰的凡神説、　唯心的凡神説、

乙、唯物的一元論、

不可識論は定言して曰く、人間は絶對者の存在に關する知識を有す、然とども其到る處に存在して、以て一切の現象中に表現する勢力なりとのことの外には、決して

此實在者の何物たるかを知る能はざるなりと、

一元論は定言して曰く、人間は絶對者の存在に關する知識を有して、又其何物たるやを解説するとを得るなりと、其語に曰く、絶對者は宇宙の終極的根據にして、宇宙其物と全一なりと、

然るに有神説の宇宙を論ずるや、云へらく、宇宙は是れ絶對的靈なる神に對して共同、不斷の關係を有し、互に相統一して以て存在する所の有限なる實躰の全躰なりと、されば有神説に在ては宇宙をば全く神より區分して、宇宙なるものは常に神に從屬する者なりとなす、

一元説にありては全然此區別を毀壞して、而して敎へて曰く、宇宙と絶對者とは同一實在の見る所を異にしたる者なりと、

有神説の説く所に從へば、一切有限の實在者が、各自相互の間と、及び神との間に顯はせる統一は、是れ合理的なり、動力的なり、道義的なり、然るに一元説の言ふ所に隨へば、此統一とは是れ實躰の全一性に外ならず、

凡神的一元論の説く所に曰く、絶對者は絶へず宇宙の中に開展しつゝある者にして、隨て宇宙と全一なるものなりと、細言すれば、開展する所の宇宙と、開展せられたる宇宙とは全一にして、是れ一の絶對なる實在なりと云ふにあり、此論説よりして出すべき必然の推論は曰く、唯一なる實在は是れ絶對なり、有限なる宇宙に於ては實在なる者一もあるとなく、唯だ現象即ち此唯一絶對的實在の表現躰あるのみと云ふに歸着するなり、

實躰的凡神説は絶對者を解説して、宇宙に開展する所の唯一の實躰なりとす、然るに唯心的凡神説は絶對をば萬有中に開展する無覺の思想、若くは意志若くは理性なりと想定するなり、フィヒテは「獨一なる原初の唯一實躰は本我にして、此獨一實躰中に一切の偶性存す、隨て一切の實在物其中に藏す」との理を證明せんと試みたり、然れども氏が自ら表明せる所によれば、宇宙の本我なる者は、實に是れ無覺なる宇宙の道義的秩序に外ならず、

宇宙に開展する所の無覺的及び非有心的思想、若くは理性、若くは靈魂に關する概念は、何にても有機躰中に開展、表現する所の活力の秘奥なる元氣と相對比して説明するとを得べし、何んとなれば物形宇宙の進化、開展する有樣は、機械に似る所あ

るよりは、寧ろ迚かに有機的發生に類する所あればなり、故に希臘先哲の或人々が懐抱せし如く、宇宙は活動機關なりとの概念は、一見すれば實に奇怪なる説の如しと雖ども、少しく思慮を費すときは、決して怪む可きに非さるなり、夫れ思想成熟して既に此境に造るときは、則ち之より一歩を進めて、神を以て世界の活動力若くは靈魂となすの概念に歸着するは、頗る容易の業なりしなり、蓋し此の如き思想は、是れ實に唯心的凡神説と類を同ふするものなりとす、

唯物的一元論の説く所に曰く、物質なる者は其中に至要なる勢力なるものを含有して、以て永遠に存在するものなり、而して宇宙に於ける一切の實躰は、則ち此物質と勢力とが其存在の方法を異にせるものなり、故に宇宙には決して合理的靈なるものなく、又宇宙に超絶せる絶對者もあるとなく、宇宙の運行は只是れ「物質と勢力の分配を變する」までのことなりと、

夫れ凡神論は絶對者の存在をば承認すれども、有限的宇宙の實在を否定するものなり、故に之を稱して非宇宙的凡神説と云ふなり、之に反して唯物的一元論は物質の永遠性をば確認して、之に超絶せる絶對者の存在するとをば否定するものなり、

故に之を稱して無神的凡宇宙説と云ふ、

然り而して此に必ず注意せざる可からざるの一事あり、即ち唯物的一元論者は不知不識の間に、物質の元精的意味を變更し居ると是なり、彼等論者は最早物質を以て空間に含蓄され、及ひ空間を充塞するものと思惟せず、之を以て吾人が知る所の物質と心意の兩者を超絶して、以て兩者の共同根據となる者と考ふるなり、ナァーレは萬物は物を生起する物質より次第に進化すと云ふ、其創世説を説明するに當りて、此物質に賦與するに二箇の屬性を以てしたり、曰く可動性、曰く可感性、是なり、夫れ斯の如くして氏は純粋の唯物説を棄捐して、物質なるものをば他の實躰的凡神説の所謂惟一實躰と全一なりとせり、博士クリホルドも亦た之と全一の思想を懐抱したりき、其説に曰く、「無機物躰中の可動分子は、心意原質（マインドスタッフ）の小分子を有するなり」と、

不可知説は絶對者の存在を肯定するの點に於ては有神論と契合せり、一元論も亦た其兩種共に此點に於て有神論と符合し、而して又人は絶對者の何者たるを知るとの肯定に於ても、亦た有神説と契合す、且つ絶對者の性質に關する概念の重要な

る點に於ては、凡神論者の説く所育神論者と合一するところ少からず、
一元論は兩説共に、絶對者は其人間の中に於て意識を有するに至るの外は、有智的及ひ自覺的なる作用と目的とを有せずと論ず、
吾人は此等四箇の宇宙に關する非有神説的の理論に就て、別々に詳論するところあるべし、

フヰヅカスなる名義を以て著はされたる「有神説の公平なる探究」と題する書に述へて曰く、「辨證的悪戯家の御得意の論鋒は、無神説、凡神説、唯物説等に取り掛り、一々彼等を挑みて、自存と云ふことの秘義を説明せよと迫り、以て先つ之を破壞し置き、而して后ち自身は默々の中に、有神説にて斯かる問題を説明するの必要は之あらぬぞと云はぬ計りの勢を示し、其狀恰も此屬性は他に適用するときよりも神に適用するときは、迥かに容易に曉會するとを得へしとなすものゝ如し」と、嗚呼是れ何の言ぞや、題して公平なる探究と云ひ、而して卷首已に斯の如き甚たしき誤解を顯はす、吾人能く著者が進んで公平に論すへきことを望むを得んや、夫れ本書の云ふが如く、有神論者は毫も自存の秘義を説明せんと企圖する者に非ず、却て不可識論者、凡神論者及び唯物論者と仝しく、有神論者も亦た自存者の存在を以て、理性の必然なる原理及び思想の法と信認するなり、抑有神論者が説明せんと欲する所のものは宇宙なり、而して彼等は宇宙を説明するに當りて、宇宙の到る所に自己を表現すると認められたる絶對者に關して知られ得へき一切のとを確知せんと求むるのみ、蓋し數多非有神的の説の非理なるとは、絶對の靈たる神の存在の積極的證據と、神の存在を認容するとなくんば宇宙を説明するは愚か、宇宙の學術的知識だも得るとを能はざるの事實とに照せば、則ち明白なり、吾人は此より先つ諸種の非有神論的の説に關して講究するところあるへし、蓋し是れ明白に非有神論的の説の性質を詳にし、其中に存する幾多の困難と矛盾とを指示し、以て其全く宇宙を説明するに足らざるとを顯はすべければなり、

第一、絶對者の存在に關する一切知識の否定、――此種の無神説はコントの代表する所なり、其説に曰く、道理上宇宙論を形成するの必要はあらず、人の思想、知能の本分は、單に現象を觀察し、分類し、及ひ總合するのみに在て、現象以外に超へて、現象中に活動し、若くは表彰、顯現する實躰に迄干係すへきものにあらす、現象は現象にて

充分に、且つ人の思想、知能に對しても充分なるに、尙ほ之を以て深遠なる實躰に歸し、以て現象の爲めに一切を包括するの統一、若くは究竟根據、若くは合理的目的を發見せんと欲するは、學術的思想の本務に非ざるなり、元來宇宙には客觀的なる合理性なく、又其本性と其作用、發達の進路とに顯はるゝ理性なるものもあらずチヤウンセイ、ライトの所謂、集散離合する一切の現象は即ち「宇宙の天氣模樣」に外ならずとは、是れ之を云ふなり、

實に此種の無神論に在ては、宇宙若くは其中の實在に關する知識も、神に關する知識も兩ながら成立する能はざる者にして、其說く所を要約せば、則ち事物の眞知識は人間の到底得ると能はざる者なりと云ふに在り、

夫れ此種の無神論が能く成立するとを得べきの基礎は、上の如き臆說の上に在つて存するのみ、若し此論を一貫せしめんと欲せば、コントは宇宙論を形成するの問題を講究するを拒絕せさるへからす、何んとなれば氏は實在に關する一切の知識を否定し、而して勢力、原因、分子、精氣（エーテル）等の觀念をば、非學術的なる者として接斥したりければなり、成程是等の觀念は形而上的なり、然れども決して非學術的に非ざるなり、而して形而下學の如きは現に是等の諸觀念の實在を認許するが故に、コントの實驗理學を拒斥して、學術の目的に契合せざる者となせり、されば形而下學の進歩を圖る爲め、否な寧ろ其存在を確定する爲めには、絶へず形而上の觀念と原理とを用ゆると緊要にして欠くべからず、且つ苟も各行爲には作用者ありと信し、各運動中には運動する者と運動を起す者との存するとを信し、勢力は動と同しからずして、原因は先行に過くるものなるとを信し、而して自己が徒らに主觀的印象の幻像を有する者に非ずして、實在の眞知識を有すと信するの人にしあらば、必らず又絶對者の存在することをも信せざるを得ざるなり、若し現在存在する物ありとするならば、則ち絶へず存在したりし所の物あらざる可からざる道理なるに非ずや、而して絶へず存在したりし所の物あるを信認する人々は、既に已に宇宙論を發見するの問題を是認して、以て其解釋を求めつゝあるものなり、コムトは云へり、吾人若し何等かの原因の存在するとを許すときは、則ち又第一原因たる神の存在を許さゝる可からずと、其言眞に然りとす、

夫れ斯の如く絶對者の存在すてふ事は、是非共に人間の思想に附着せるの信仰に

して、人間は決して此信仰より脱出する能はず、實に此信仰は人間が之を認知するも、或は認知せざるも、何れにても到底人の思想に纏着して離れざるもの也、

且つ夫れ吾人は附論せざる可からざるとあり、即ち宇宙論を發見せんとを求むるは、是れ人間理性の必然性たると是なり、抑も之に對して彼の實驗學者が唱道する所の反對論は、是れ學術の名を以て理性に反對するの論にして、取も直さず學術を挑發して理性に喧嘩を買はしむるの大謬想たるなり、如何なる實躰の人の眼前に顯はるゝとありとするも、理性の必然にして且つ常に緊急とする問題は、其實躰が其他の實躰に對する關係を發見し、以て之を學術的系統に統一するに在り、即ち動力學上よりは萬事萬物の元始と變化の原因を發見せんとし、合理上よりは其啓示せらるゝ所の合理的觀念若くは眞理の何たる、又其如何なる合理的法則の支配を受けて活動するや、又其如何なる合理的目的を達せんとするの傾向を有せるやを確定せんとするに在り、蓋し古今常に世の學術的講究の精神を刺撃したる者は、此理性必然の要求に外ならず、

(註)教授クリフォード曰く、「吾が知覺する此世界なるものは唯た我知覺たるに過ぎず」と、然るに「望遠鏡物談」と稱する小冊子中に此種の知識説を描き出して、諧謔滑稽を極めたり、其譚に曰く、アリスなる少女一日ツウイーヅルダム及びツウイーヅルヂーなる二童と伴ひ、赤顔王を見んとて出て行きしが、時恰も王は黒甜鄕に逍遥したまひけり、ツウーヅルヂー、アリスに尋ねけるは、「和女は王は何を夢みつると思ふや」と、「誰が此かることを知り申すべき」とアリスは答へき、ツウーヅルヂーは得意顔に手を扑ちつゝ、「和女の事を夢みつるなり、偖若し王にして和女の事を夢みるの夢醒めなば、和女は何處に在るべしと思ひつるや」と叫ひぬ、「申迄もなく、今在る處に在るべし」とアリスは言ひけり、「中々、和女は何處にも在らぬものとなるべし、和女は只だ王の夢の中におるばかりのものなるに」とツウーヅルヂーは劒もほろゝに言ひ詰めたり、尙語を續ひて曰ひけるよう、「若し彼の王にして目醒なば、和女はじやんと一聲諸共に、蠟燭の如く失せ去るべし」と、アリスは焦心となりて云へり、「左樣の事あるべからず、全躰小女も王の夢中におるばかりのものならば、卿は何ものにて侍るや、聞かまほし」と、此くて互に言ひ募り、喧しかりしかば、アリス叫びて言ふよう、「靜に〳〵、左樣に

矢釜しくしては、王目覺め玉ひなん」と、「これはしたり、王の夢を驚破せようが、せまが、そは和女の搆ふも要なきことなり、和女の實在ならぬことは和女とくより知り玉ひなん」と、ツウーヅルダムは言ひぬ、此くてアリスは聲を揚げて泣きつゝ、「少女は實在なり、若し少女實在ならずば、如何で少女泣き得べき」と云ひけるとなん、

而して斯く各個なる事物を動力的若くは合理的系統の中に統一して以て之を曉得せんと欲する理性必然の要求は、自然に吾人の思想を推前して、以て萬事萬物をば凡括的の系統に統一せしめんとするものなりとす、由之觀之、世の宇宙論を建設せんと欲するの企圖は、是れ合理的にして且つ正當なる者なり、果して然らんか、則ち有神論は是れ學術の眼を以て觀て、其正當なること、他の論説に劣るとなし、

第二、スペンセル派の不可識説――スペンセル派の不可識説に對して有神論は定言す、人間は不完全なからも、絶對者の何たるやに就て積極的の知識を有するなりと、元來スペンセル氏の宇宙説は正當に稱して不可識説と云ふ可からす、何んとなれば文字學上よりして云ふときは、「アグノスティシズム」(即ち不可識説)なる語は一切の知識を否定するの意義あるものにして、正當に云ふときは即ち普般的懷疑説と其旨趣を全ふする道理なれとも、スペンセル派の不可識説は之に反して、啻に宇宙に關する人間の知識を承認するのみならずして、又絶對者をも承認し、之を以て實存せるものとし、遍在する能力となし、宇宙の一切現象中に自己を表現即ち啓示する者と爲せばなり、故に之を稱して不可識説と云ふも、是れ只一部不可識説に過ぎざるのみ、

倩々思ふに、此の如き不可識説の起る所以のものは、絶對者の性質を其先天的觀念より形成し出さんと企圖するに坐するのみ、此の如き方法に從ふて進まんか、則ち其到達する所は只だ否定あるのみ、即ち絶對は無碍なり、無限なり、無屬なりと云ふの外なし、此の如くなれば絶對なる語は積極の意義なき空言、實名詞なき浮虛の形容辭、定言すへき實躰を有せさる否定と成り果てんのみ、サー、ウィリアム、ハミルトン及びマンセルの兩氏は、近代に在て此種の思想を代表せるの鴻儒なり、

絶對者の性質を知るとを得へき、唯一眞法は、宇宙に於て絶對者の表現せる有樣を研究するに在り、諸種のスペンセル派不可識説及び一元論の諸派も、絶對者なるも

のは宇宙に表現せる遍存的の能力なりと論ずるの點に於ては、皆有神論者と其説を同くする也、然らは則ち宇宙を説明するに必要なる一切の勢力は、此絶對者の中に潜勢力として包含し居らざるべからざるの道理なり、而して之等の勢力は宇宙に啓示せられ居るものなれば、吾人は之を知るとを得べし、此の如き順序に由て論ずるは、是れ有神論の方式なるが、蓋し是れ結果よりして既に許認され居る所の原因の性質を推論するとなれば、正當にして能く學術の方式に契合する者と謂はざるべからず、抑有限心意にして絶對に關する先天的觀念を以て考察を始め、此觀念を分析、し若くは此觀念より演繹して、以て絶對者の性質を明知せんとするも出來へき事にあらず、此かるとを爲さんとするは、取も直さず有限なる心意が、一切の事物と意義を含有する絶對に關する觀念を、先天的に有すと思惟するものにして、妄も亦甚しとす、夫れ人間の理性は、其理性たる自己の存在の理法に由て、以て或る無制限的實在者の存在するとを知る、然れとも此理性の絶對者の性質を知るは、只其宇宙に啓示せられたる所のものを知るに之れ由るなり、

抑も絶對者が、宇宙に自己を啓示するとは、取も直さず絶對者は不可知的なる者に非ずとの謂なり、絶對者を不可知者と稱することにして正當なりとせば、是れ啓示其物が十全ならずとの意か、若くは吾人の心意が一切の啓示を納るゝの量を有せずとの意義に於て然りとす、故に絶對者にして果して宇宙の運行上に自己を啓示せば、有限心意は其存在せん限り、其知識、能力の擴張に伴ひて益々神を知ることを得べきや必然なり、若し夫れ其物自身は知るへからざるものにして、人をして全く窺測する能はざらしむるものとては、是れ只虛妄の事なり、是れ只理性必然の原理に反對せる所のものゝ事なり、絶對者の事にあらざるなり、若し絶對者にして存在して以て有限者の中に啓示せらるゝ者ならば、則ち是れ決して不可知なる者たる能はすして、必らず人智の理會するを得る者たらざる可からず、且つや絶對者と有限者との間には決して矛盾反對の點あらざるなり、其故を如何んと問へば、元來有限物は是れ絶對者より出で、且つ常に絶對者に屬從するの媒介物にして、之を媒して絶對者は自己を、永遠啓示、しつゝあればなり、

不可知説を生すへき第二の原因は、研究者が研究の基點とし、且つ之を敷衍せんと試むる所の彼の絶對に關する先天的觀念其物が、虛僞の觀念たるの一事に在て存

するなり、夫れ已に其基礎たる觀念斯の如く虚僞なるが故に、之を敷衍し來るときは、則ち絶對なるものは遂に不可思、不可知なる者となり畢らさるを得ず、此説に在りては頗る不當なる定義を絶對に與へ、絶對なるものは是れ一切の關係の外に存する者なりと言へり、然れども元來絶對は自己に依頼せさる關係の爲め礙碍せらるゝとなくして存在する者にして絶對に關係せる宇宙は、其存在せんが爲めに常に之に循屬し居るものなり、左れば宇宙は絶對の爲めに制限せらるゝは勿論なりと雖ども、絶對は何等の必至なる關係により宇宙の爲めに制限せらるゝとあらざるなり、此思想と相密着して一の思想あり、即ち絶對は合理的器能に對する一切の關係を離れて存する實躰なりとの概念是れなり、然れども斯くの如き觀念より演繹し來りて、以て絶對の性質を顯はさんと欲するときは、則ち絶對は知る可からず、思議す可からざるものとなり、思想の停止の一個の標號たるに止まるを見るべく、而して之を合理心に啓示せんとするが如きは、到底出來得可からざるの事に屬するに至るべし、

又絶對と云ふ觀念を以て、凡有(ビオウル)即ち萬物を合算せる數學的合計の觀念と全一なりと見做すが如きも、亦た是れ誤謬の見解たるなり、蓋し此の如く釋解するときは、則ち絶對は萬物の總數たるべく、部分より組織せられたるものたらざるべく、隨ふて制限せられたるものとなる可し、斯く不當に絶對を理會するときは、則ち絶對とは矛盾撞着の意味を包有せる者と成畢る可く、遂に其物自身に不可知、不可思議なる者たらさるを得ざるに至るべし、ハミルトンは實に此かる説を抱く一例なり曰く、「無限果して有限を含まざるか、若し之を含まば、則ち無限なるものは部分より成立つものにして、離分すへきところの者を含むものなり、若し又果して之を含まざらんか、則ち是れ有限を除拒するものにして、有限は無限の外に在るものたらざる可からず、而して無限なるものは即ち有碍、有限なる者とならざるべからざるなり」と、絶對を以て全稱的(ユニヴァサル)と爲し、之をして竟に不定的に歸せしむるも、亦た是れ虚僞の觀念たるに過ぎず、抑も吾人が類似に基きて普通總念を形成するに當てや、吾人此總念の外延をして益々大ならしむるに隨ひ、多々益々其包むところの資性を除斥せざる可からず、されば獸類と云へる總念は、馬なる總念よりも適かに其元精的資性を減少せり、吾人若し斯の如くして外延を增大して止まざるときは、則ち其終極の

總念は、特別なる資性の一切を除斥したる者となる可く、全く實質なき不定的の者となる可きなり、斯の如きは是れ無と同一なるなり、假令ひ強て之を純粹實在と喚做せばとて、到底不定的なるに相違なし、何んとなれば此く喚ふは、單に「なり」と云ふ觀念を實在者となすまてのことなればなり、論じて茲に至れば、則ち又絶對は不可知不可思議なるものとなりて、思想停止の單純なる表號となり果てん、蓋し此定義たる、往々神學と哲學とに免かるゝ能はざるの誤謬に陷ゐりたるものにして、論理的思想の運用創作を以て、誤て具躰的實在となし、其作用となし、關係となし、偏に心意をば、普通總念を以て目的物とせる抽象的思想内に鎖閉し、以て實在及ひ其眞實の干係を以て目的物とする具躰的思想を顧みさるに至りたるに外ならず、

不可識説の第三原由は、絶對の觀念を敷衍するに當りて、凡て定義なる者は物を制限すと云ふ虚僞の格言を基礎として、之が推理をなすに在り、

抑も此格言たる頗る廣濶にして、絶對のとに關しても亦之を應用し、遂に論して曰く、絶對は有心的實在たる能はず、何んとなれば有心性は非有心性より之を分別せざるへからず、既に彼より分別し去られたるときは、則ち是れ制限せられたる者なれば、なりと、然れとも此の如き論は唯だ之れのみに限らずして、其他存在の各屬性、各行爲、及び各方法に付ても亦同一の論をなし得へく、終に絶對は勢力たる能はず、實在たる能はず、又絶對たるとだも能はず、何んとなれば是等を絶對に附するは、皆な絶對の義を限定するが故に、隨て之を制限するものなればなりと論せさるを得さるに至らん、然り而して或不可識論者に至ては、實に此格言を此の如き極度の點に迄で應用して以て主張すらく、若し絶對にして知られ得へきの屬性を有し、若し絶對者にして時間中に何等有限の實在若くは結果を生出する爲めに活動し、若し有限の實在にして果して眞實に存在し、若し絶對にして有限と無限とを兼ねず、善と惡と、聖潔と汚惡とを兼ね具へず、一切の兩立す可からざる資性を具ふる主觀者たらず、若し又絶對にして某の事物に某の關係を有し、若くは某の事物と區別ある者たり、若し又何等の方法を以てするにせよ、之を限定するとを得へき者ならば、則ち是れ絶對者は制限せられたる者となりて、以て絶對たるの資格を喪ふなりと、若し果して此論を是認せんか、則ち是れ絶對は實在者の具有すへき各の資性、勢力及ひ屬性を剝奪し去られたるものにして、絶對は一切資性の主觀者たると同時に、又

無一物の主觀者たり、且つ有ゆる矛盾の合一するところたるに外ならず、マンセル氏は此格言の應用を其極度に迄で敷衍して論じて曰く、「蓋し無限者を無限者として有限者と相分別するに、其有限者が具有せる資性を欠けりとの故を以て、之を分別する能はざるは頗る明白の事なり、何となれば此欠げりと云ふ事は、是れ已に無限者に對して制限となる可きものなればなり」と、さて有限と云ふことは制限の意義なるが故に、マンセル氏の言ふ所を檢査するときは、是れ取りも直さず、無限者に制限なきことは即ち無限者の制限となるものなりとの恐れ入つたる議論なりと謂はさる可からず、尚ほ此外尚も此格言を基礎として組成せるの論説は、皆悉く吾人が右に陳せる如き言語上の爭論に歸せざるを得ず、夫れ斯の如く看來るときは、つまり絶對なる者は零となりて、思想停止の表號たるに過ざる者とはなるなり、ハミルトン曰く、「否定的總念なる者は總念を否定せる者たるに外ならず、抑も吾人は或資性を付してこそ、初めて能く其物に關して思考するとを得るなれ、左れば是等の資性及其資性を附することを否定するは、是れ取も直さず其事に就て吾人の思考を否定するなり、……無限なるものは、單に有限なる者が因て以て思念せられ得へき所の屬性をば除去して考へられてこそ、初めて思念せらるべきものなり、再言せば、吾人は思念すべからさるものとして之を思念するなり」と、ハミルトンの説によれば、吾人は絶對に關して否定的知識を有するのみにして、又否定的知識は知識に非さるなり然るに氏は絶對の定義を下して、細かに之を區分し、而して遂に吾人が絶對の性質の何たるやをば到底知ると能はざることを證明せんとて、絶對は云々のものならざるべからす、云々のものたるべからすと論したり、此に由て之を觀るときは、則ち不可思議論者は強く絶對者の存在せることを主張しなから、吾人が其何者たるやを知らずと云ふ事を證明せんと欲して、却て絶對の果して存在するや否やは知るに由なきことを證明すべき議論に依據したり、獨り之れのみならず、是等の議論は其自定する如く、絶對は存在せずとの事を證明するのみならずして、絶對は一切の思想と智力の停止に對する一個の表號たるに過ぎずとの事をも證明するものもとす、

凡て定義は物を制限すとの格言は、論理的普通總念若くは數學的總計に對しては効力あるものなれども、具體的實在に對しては無効なり、成程不可識論者の説く所

は、彼等が保持主張する所の絶對に關する虛僞の觀念に對しては眞確なる者なりと雖ども、然れども彼の宇宙が自己の究竟基礎として其存在を啓示する所の眞實絶對、即ち無制限の實在に關する吾人の知識に對しては、何の勢力をも有せざるなり、夫れ一の實在にして許多の能力を顯はせば、顯はす程、實在に關する實體は愈々多く、益々强く限定的なる者となる也、即ち其實在と同一なる實在益々少許となり、普通名稱を以て指示せられたる部類中に在りて、之と相全しきもの益々少許となるなり、然るに此く增々實在を限定し、以て彼の論理的普通總念を少許の實在者に限局するは、適々益す其實在者を大にする所以なり、是れを以て彼の唯一にして宇宙一切の能力中に自己を啓示する絶對的實在者は、實に是れ一切のものゝ最も限定的にして而かも且つ最大なる實在なりとす、而して絶對は絶對にあらざる者の爲めに制限されさらんが爲め、必らず、しも萬事萬物たらざるを得さるの理なし、絶對者に從屬せる有限者の存在は、決して絶對に對する制限となるの理あらさるなり、然るに之に反して、若し絶對者にして自己に從屬せるの有限者中に自己を啓示する能はざりしならば、則ち此無能力こそ、實に絶對に對する制限となる可けれ、

上來論述したる所のものを總括するときは、則ち下の如き結論を得べし、曰く、此不可識說は吾人が絶對の性質如何を知ることを得ざるを論斷して、以て遂に吾人は一切の實在を知る能はずと論定するものなりと、試に思へ、若し思想にして果して進んで絶對に至るときは、則ち消滅して無に歸するものとせば、人の思想は即ち絶對にせよ、有限にせよ、孰にしても眞實の知識を人に與ふることは到底出來得へからざる事にあらずや、何んとなれば若し果して絶對なるものあるとなしとせば、則ち此宇宙に眞實と、勢力と、統一と、連續とを與ふる所のものなきに至りて、宇宙は一個の幻像となり、無終に流轉するの幻影となる可ければなり、去れば此不可識說はスペンセル氏の如くに、其所謂不可知的なる者に能力及ひ其他の屬性を附加して、以て自から矛盾し、自ら損傷するものたらずんばあらず、若し又之を首肯せずとすれば、是れ其性質を知るに由しなき實在者の存在することを言ひ、此實在者が何物をも啓示せずして不斷啓示をなしつゝあることを說き、及び吾人が實在に必要なる資性を附加するときは、則ち直ちに無に歸するが如き實在の存在することを肯定して、以て自ら撞着、矛盾に陷り、以て其說を毀壞せざるを得ざるに至るなり、是れを以て此一

部不可識説は論理必然の勢に由て、遂に自ら全部不可識説即ち普般懐疑説となるに至る、今其順序を言はんに、其初め合理的直覺力は單に心意の無能に原因すと自定するに始まり、進で絶對に關する知識は是れ只だ知識の否定に過ぎすと自定するに至り、遂に心意は何事を知るの能力をも有せずと推論するの必至に至て終るなり、蓋し是れ智力の涅槃とも謂ふべきものにして、智力は絶對者の否定的知識に於て一切思想の停止を得、茲に始めて寂滅して以て其能事を了するものと謂はざるべからず、

ハックスレー氏は自ら「不可知的なる語を發明せし」ことを誇揚すれども、是れ甚た不吉なる發明なりしなり、何んとなれば字學上よりして言ふときは、此語は一切知識の否定の意を表彰して、普般懐疑と同一の意義を示せばなり、思ふに氏が建築せし所のものは、氏が知りたりし所のものよりも遥かに善なりしが如し、何んとなれば氏が此名稱を附したりし所の思想の法は、之を究極するときは、必らず其終極の論理的結果として普般的懐疑説を包含すればなり、教授ハックスレーは其著「ヒユーム論」中に、ヒユームを以て「不可識説と稱せられたる近代の思想法の創始者なり」となしたり、思ふに博士は不可識論者は皆なヒユームの哲學を人に誨へ、又其物界の知識を肯定し、及ひ絶對者の性質に關して一切の知識を否定しなから、其存在に關する知識を肯定するに方り、ヒユームの議論に由て自己を益すること大なるものありと思惟するものゝ如し、然れども是れ誤解たるを免かれず、抑もヒユームの説は下の如し、若し覺官を經由して吾人只だ印象のみを知るものならば、則ち心意中の觀念も亦た其實體を欠ぎて、一切知識に關する理論はスペンセル氏の説明せし不可識説に類するよりは、寧ろコムトの全部實驗説に符合するものと謂はさるべからず、スペンセル氏は其不可識説の解説をなすときに當りて、――氏は他の著書に在ては屢々之と符合せざる意見を吐きたれども、――有限實在の積極的知識、及び絶對實在は存在して宇宙に顯はるゝものなりとの積極的知識の理論を設定したりしが、此點に於ては氏が説は現象説の理論よりも、寧ろ有神説と相調和せるものゝ如し、若し現象説の議論にして近時の不可識説の議論と同一なることありとせば、是れ即ちハミルトン、マンセル、及ひ其他の人々、且つスペンセル氏も亦た時に論理上必らす是に歸着すへき原理を自定したるが故なりとす、

夫れ絶對は一切現象の中に在て宇宙に表現せる遍在力なりと云へるスペンセル氏の原理は、事實より推理する氏が慣習と共に、氏をして有神論的方式を採用して、以て宇宙に顯現したる所の者を觀察し、絶對なる者の性質を攷究せしむるに至るべきものなり、而して氏が誤りて斯くなさいりし度に隨て、氏は自家撞着に陷りたり、且つや氏は此原理の中既に絶對の性質に關する眞知識を確認して、之を遍在力なりと稱す、若し之を是なりとせば、有神論者が絶對は絶對的遍在力たると同時に、又絶對的遍在體なりと主張するも、之を是認せざるべからず、スペンセル氏はハミルトン及びマンセルの不可識説を稱賛し、自己の意を得たる者として兩氏の語を多く援引したるにも拘らず、却て又吾人は絶對者に關して只だ消極の知識を有するのみとの兩氏の議論を批難、拒斥して確く絶對者に關する知識の積極的なることを主張し、因て積極的に知らるゝ所のものを詳細に表明したり、氏がハミルトンの不可知説を批評したるの語に曰く、若し果して非相對的即絶對的なる者は、純粋の否定としてのみ思想中に表現する者なりとなすときは、則ち是れ絶對と相對との間の關係は思考すべからざる者となるなり、……而して若し此關係にして果して思考すべからざる者たるときは、則ち相對的其者も亦た思考すべからざるに至るべし、何となれば其反面あらざればなり、此の如く論斷し來るときは、結局如何なる思想にても無に歸せざる可らざかるに至ると、

人に絶對の觀念ありとの事實は、是れ實に人間が絶對の性質如何を知るに堪ゆる者たるの確證なり、此觀念は哲學の萠出せし以來、永く人類の思想中に顯著なる者にして、苟も深く思考する習慣あるの心意は、是非共此觀念を發見するの境に達するを避くる能はず、此觀念は獨り人類の思想に表現するのみに非らずして、亦多少明瞭に一切の宗教中にも顯はる、是を以て人間の歴史に於て一の有力なる要素となりしなり、而して假令絶對は單に消極的にのみ知らるゝことを得べきものなりと云へる思辨家世にあるも、事實によれは、絶對は神に關する觀念中に包含せられ、明白なる積極的觀念として人の心意に存せしものなりとす、余が此に此事を論する所以のものは、絶對者の存在する證據として之を言ふに非らざるなり、何となれば絶對者の存在するとは、不可識論者も亦た確認して疑はざる所なればなり、然れとも余が今茲に論述する所の者は、若し果して絶對者存在するときは、則ち人間の心

意は假令十分に、知るを得ずとも、積極的に其性質如何を知るに堪ゆる者なりと云ふ事の確證たらずんばあらざるべし、若し心意が斯の如く絶對者を知ることを爲さゝるとありとせは、是れ只だ絶對者が人間の知識の境域内に自己を啓示せざりしが故たらざるべからずして、絶對者が啓示せられたるも、人間は之を知るの能力を有せざるが故たるべからざるなり、且つ若し人が絶對者の性質を知ると能はざるを以て、其有限性に基因するものとなすとあらんか、則ち人間が有限的なる間は、何時迄も、絶對者の觀念にせよ、絶對者の存在に關する知識にもせよ、孰れも此有限の心意に其啓示の意義を理會せしむると能はさるべし、然るに是等不可識論者は、一方に在ては人間の有限性が絶對者の性質に關する一切の知識を除拒することを主張しながら、又一方に向ては、人に絶對者の觀念あり、其存在に就ての知識あり、絶對者は宇宙間一切の現象勢力及び運用の中に啓示せらるといふことを主張せり、此に一の注意を要す可きとあり、不可識論者は絶對の存在を知り得べしと論するとなるが、此絶對と云へる語の中には實在者といふ觀念を含むと是なり、夫れ存在と云ふ觀念の中には、存在する所の實在者なる觀念を含蓄す、實在者が賴て以て自ら表顯する所の勢力は、之を其實在者より分離する能はず、蓋し此勢力は此實在者が賴て以て自ら表現するものなればなり、故に絶對的實在者が存在するといふ定言の中には、絶對的實在者の性質に關する積極的知識の定言を含蓄す、實在なる語は尠くとも單一及同一の有樣にて永存する勢力といふ意を含む、故に人は絶對者の存在することを知ると云へる定言の中には、絶對的實在者に關して右の程度まで積極的の知識を有すとの意を含むものなりとす、

是等不可識論者は單に實在者として絶對を容認するのみならず、尙ほ迥に容認の歩武を進むるものなり、ハミルトンは吾人が無碍者に就て積極的知識を有せざることを説明しながら、進んで無碍者を彙別して、絶對と無限とふ二種を包有せる一の類となせり、氏又説を爲して曰く、吾人は相對的及び有限的なる者を超へては何事をも概念する能はずとの意識を有するによりてこそ、無碍なる者存在すとの信仰吾人の心に起るなり」と、而して氏は此不可知的なる獨立者こそ、信仰及び宗教の目的なりと論したり、マンセル氏は其「宗教思想の限界」と稱する著書中に、ハミルトンの結論を敷衍して、之を宗教的信仰の基礎となし、又懐疑論者の駁論に對する基